

33123

R71



始



SAMMLUNG NATIONALÖKONOMISCHER
MEISTERWERKE
DES
IN- UND AUSLANDES

HERAUSGEGEBEN VON
TOKUZO FUKUDA UND YOSHIZO SAKANISHI

ZUR GESCHICHTE
DER
ENGLISCHEN
VOLKSWIRTSCHAFTSLEHRE

IM
SECHZEHNTE UND SIEBZEHNTE JAHRHUNDERT

VON
WILHELM ROSCHER

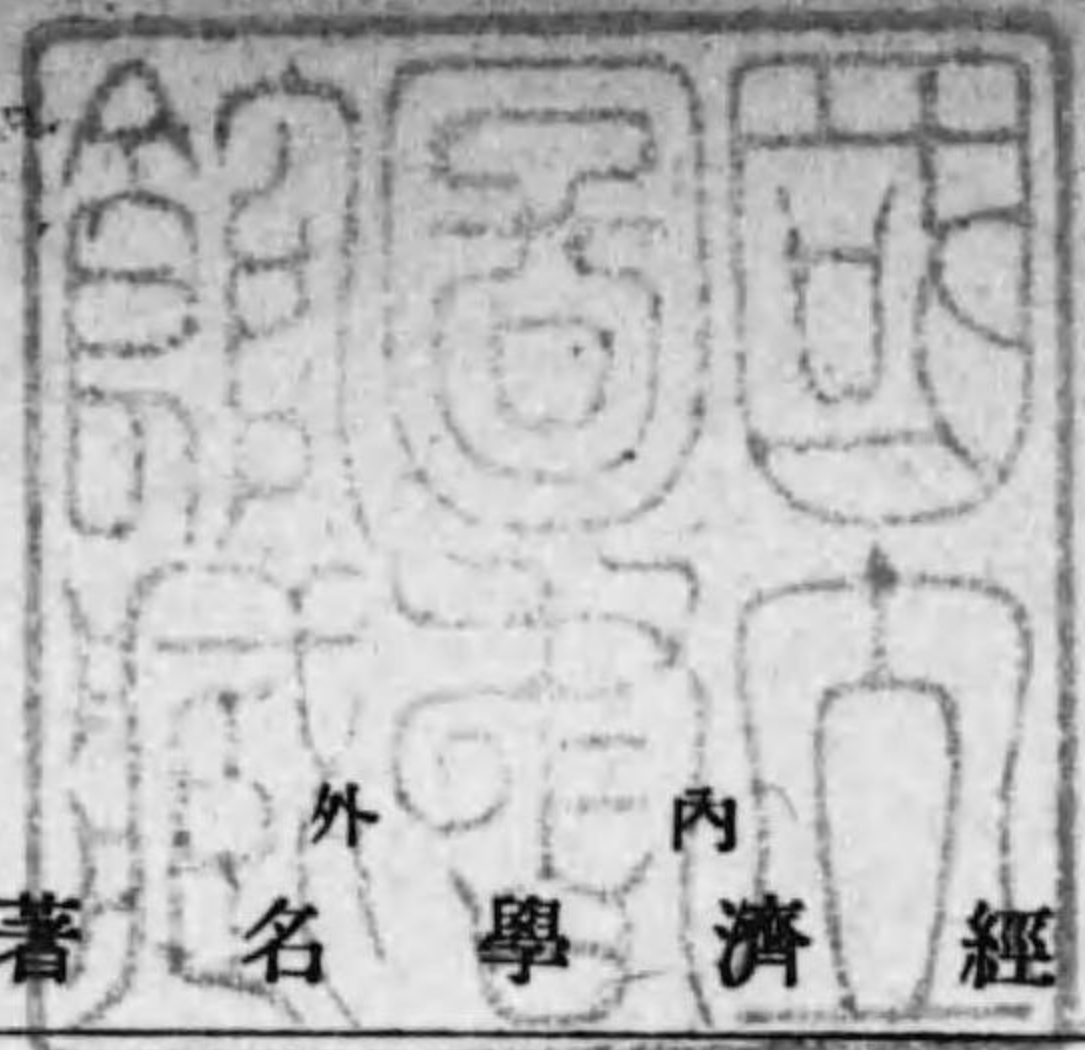
LEIPZIG 1851

INS JAPANISCHE ÜBERTRAGEN UND MIT
EINEM SACH- UND PERSONENREGISTER
SOWIE EINEM LITERATURNACHWEIS VERSEHEN

VON
EIICHI SUGIMOTO, *Shogakushi*

TOKIO, 1947
VERLAG VON DOBUNKAN

331.23
R71



著 名 學 濟 經

杉本榮二譯

シロ
アーツ
英國經濟學史論

||十六・十七兩世紀に於ける||

株式會社
同文館



VERLAG VON ODBERKAY
TOKYO, JAPAN
ERCHI SUJIMOTO, URBAN
VON
WILHELM ROSCHER
GESCHICHTE UND SYSTEM DER VOLKSWIRTSCHAFTSLEHRE
IN ENGLAND
DIE
HISTORIE DER
NATIONAL-ÖKONOMIK
VON
TOSIYO FURUDA UND YOSHIZO SAKAMISHI

ZUR GESCHICHTE

ENGLISCHEN

Erste Aufgabe, 1929.

VOLKSWIRTSCHAFTSLEHRE

GESCHICHTE UND SYSTEM DER VOLKSWIRTSCHAFTSLEHRE

WILHELM ROSCHER

LEIPZIG 1891

VERLAG VON ODBERKAY
TOKYO, JAPAN
ERCHI SUJIMOTO, URBAN



ロシア英國經濟學史論に序す

此書は疾くに各國語に譯出せられてあらねばならぬものである。然るに今此日本譯が唯一最初の外國語譯本たることは、一見奇とする人もあらう。其理由は極めて簡單である。原本の流布甚だ乏しく、今では高度の希觀書となつてゐるからである。ロシアの『經濟學體系』は何れも何版何十版を重ねてゐる。然るに其の學說史に關するものは、僅かにドイツ經濟學史が近年漸く覆刻を見た以外、他は何れも稀本となつてゐる。其中でも此の英國經濟學史論は至つての珍本となつて仕舞つてゐることは、學問の爲め甚だ遺憾なことである。今『内外經濟學名著』が此の埋れたる學實を邦文を以て、我邦の學界に提出し得たことは、編者として私の喜びに堪へざるところであつて、譯者杉本學士に對し深甚の謝意を表はさねばならぬところである。

更らに此譯本について一言を許されたい。杉本君は單に原書を其有りの儘に極めて忠實に、これを日本文に移すを以て安んぜず、ロシア引用の書物は、東京に在つて爲し得る限りの一切を捧げて、一々其原文譯書ならば其原譯書について商量され、更らに其れ

ら書物の所在を、本書の讀者に一目瞭然たらしむ可く、引用書所在表を作成された。これは、漫然見る人には左までの勞を要したものと思はれないであらうが、事實は、甚だ辛勞多いものであつたのである。

杉本君が此譯業に着手したのは、一昨昭和二年夏のことであり、爾來月を閲する約十六七月、其殆んど全部は數回の校訂推敲の爲めに費されたのである。斯くの如く多大の勞作の含まれてゐる邦譯は、私の知る限り、多く其例を見ない。勤勉忠實の一點に於いて、私はまさに杉本君を師とせねばならぬとさへ感ずる。

私は高商の學生たりし頃、常に一度はロツシア先生の講義を聞く身になりたいた念じてゐた。一八九七年五月五日私はライプツヒへ到着した。其日直ちに私はライプツヒ市郊外のヨハニス墓地に先生の墓に詣でた。先生は私が高商を卒業した年の明治二十七年——たしか私の卒業の日と殆んど前後して——に永逝せられたのである。

私が留學第一の地としてライプツヒを選んだのは、先生はすでに在さないけれども、せめて一學期なりとも先生永年の講義の爲されたライプツヒ大學に學びたいと思つたからである。幸に先生在世時の同僚ミヤスコヴスキ先生が居られたから、私は入學と

共に先生を訪れ、其研究室へ加入を願出で、快い許可を得たのであつた。然るにミ先生は其後僅か數週間でロツシア先生の跡を追ふて他界された。私は燈明を失つた如くに感じ、茫然として一學期を過した。然るにミュンヘンのブレンタノ先生は、ロツシア先生が特に指名して後繼者とせられた人であることを知り、切りとブ先生の諸著を繙いた結果、斷然意を決して、其年の秋からブレンタノ先生の許に馳り、爾來今日に至るまで先生の門に學ぶ幸を有つこととなつたのである。

私の永年の心願は、何とかしてロツシア先生著述中學問上最も重要なものを世に紹介したいと云ふことにあつた。今杉本學士の此譯——并に續いで刊行す可き山田學士の『國家經濟學講義要綱』の邦譯——を得て、私の三十年に近い心願は、漸くにして充たすことを得たのである。此の英國經濟學說史こそは、ロツシア先生等身の著述中學問上の價值甚大なるものゝ一に屬するのである。

先生の『經濟學體系』の浩澗なる著述は、先生の名を不朽ならしめるものと普通認められて居る。無論これは然る可きである。しかし其意味はむしろ文獻上に於いて、あつて、其著の内容に於てと主張することは、今日はすでに許されてないことと思ふ。これ

に反し先生の英國經濟學史こそは、今日まで、まだ其右に出づるものなき重要なものである。否これに近似値を有するものすら、まだ見出すことは出来ないのである。

近世經濟學者中涉獵の最も該博なるを以て誰人も許すカール・メンガーは、ロ先生の此書をたよりとして其の世界的價值ある文庫を形成したもので、杉本君の序文にも記してある通り、現商大藏のメンガー文庫は、實に不思議と思はれるほど、ロ先生が此書に引用してゐる諸書を、殆んど一の洩すところなく蒐集してあることは、私をして斯く想像せしめるのである。而して此一事によつて、私はロ先生の此著の價值の大なることが十分に立證せられると共に、歴史派に對抗し、塊太利派を統卒して起つたメンガー其人は、決して單なる抗争の人でなく、單なる反對の論者でなく、歴史派の武器をいとも丹念にいと精進に仔細に取り揃へ、これについて商量考究したことを知り得ると思ふ。メンガーの學說の依つて出づるところの如何に遠く深きことよ。其趣きは英國正統派の文獻を網羅的に打盡的に涉獵し盡くして、さて正統派經濟學に對する全面的總攻撃を開始したマルクスと全く同一轍——若くは其以上——に出づるのである。

我々は、先覺學者のこれらの行藏を鑑みるとき、實に忸怩たらざる能はざるのである。

資本論一冊の通讀をすら終らずしてマルクス排撃を敢てする手品遣ひ的文獻、メンガーは扱て置き、ポエーム・バヴェルクすら十分に商量せずして、『レントナーの經濟學』云々の口眞似をする論策、我々は其れらの濫發に飽滿され過ぎてゐる。我々の學ぶ可きところは、斷じて其れらであつてはならぬ。

かくて、私はロシアの此書の邦譯刊行は、英國經濟學史其ものゝ研究に取つて重要なのみならず、抑も先人學を爲す用意の一端を窺知するに於いて、甚大な意義を有つものと思はざるを得ないのである。

一九二九年一月十九日

福田 徳 三

記す

譯者小引

一 本書は Wilhelm Roscher: Zur Geschichte der englischen Volkswirtschaftslehre im sechzehnten und siebzehnten Jahrhundert. Leipzig 1851. Aus dem III. Bande der Abhandlungen der Königlich Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften. の翻譯である。

二 原著者ウ・ヘルム・ゲオルヒ・フリードリッヒ・ロツシャーは、一八一七年十月二十一日ハノーヴァー(Hannover)に生れた。一八三五年ゲッティンゲン大學に入り史學及び政治學を研究し、一八三八年ドクトルの學位を受けた。次いでベルリン大學のランケに就き、そのゼミナールに於て史學の研究を續行した。彼の歴史的研究方法の基礎は、この間に築かれたのである。

一八四〇年母校ゲッティンゲン大學の講師に任ぜられ、史學及び國家學を講じた。『スキディデスの生涯・著作及び時代』並びに『國家經濟學講義要綱』(本『内外名著』の一冊として山田商學士の邦譯が公けにされる筈である)は、この講義を基礎としたものである。後の著書でロツシャーは、サヴィニー及びアイヒホルンが法律學に於て採つたと同じ方

法を經濟學に適用し、經濟學上一新生面を開き、所謂歴史派經濟學を樹立するに至つた。一八四三年同大學の助教役に任ぜられ、翌四四年には更に正教授に進んだが、その後一八四八年ライプツヒ大學の招聘に應じ、一八九四年六月四日永眠するに至るまで斯學の研究に没頭し、その結果を『經濟學體系』『獨逸經濟學史』その他多數の著書論文に於て發表した。

左にその著述要目を掲げる。

(イ) 歴史學に關するもの

De historicae doctrinae apud sophistas majores vestigiis. Goettingen 1838.

Leben, Werk und Zeitalter des Thukydides. Goettingen 1842.

(ロ) 經濟學に關するもの

Grundriss zu Vorlesungen ueber die Staatswirtschaft nach geschichtlicher Methode. Goettingen 1843.

Die gegenwaertige Produktionskrisis des hannoverischen Leinengewerbes. Hannover 1845.

Ueber Kornsteuerungen: Ein Beitrag zur Wirtschaftspolizei. Stuttgart etc. 1847.

System der Volkswirtschaft. Ein Hand- und Lesebuch fuer Geschafsmanner und Studierende.

Bd. I. Die Grundlagen der Nationaloekonomie. Stuttgart etc. 1854. 26 A. bearb. von R. Pochmann. 1922.

Bd. II. Nationaloekonomik des Ackerbaues und der verwandten Urproduktionen. Stuttgart etc. 1859. 14 A. bearb. von H. Dade. 1912.

Bd. III. Nationaloekonomik des Handels und Gewerbetreibens. Stuttgart etc. 1881. 8 A. bearb. von W. Stieda. 1913-17.

Bd. IV. System der Finanzwissenschaft. Stuttgart etc. 1886. 5 A. bearb. von O. Gerlach. 1901.
Bd. V. System der Armenpflege und Armenpolitik. Stuttgart etc. 1894. 3 A. ergaenzt von C. J. Kluncker. 1906.

Kolonien, Kolonialpolitik und Auswanderung. Leipzig 1856. 3 A. Leipzig 1885.

Ansichten der Volkswirtschaft aus dem geschichtlichen Standpunkte. Leipzig etc. 1861. 3 verb. und verm. A. Leipzig etc. 1878. 2 Bde.

Nationaloekonomisch-civilistische Studien. Leipzig etc. 1862-9. 2 Bde.

- Zur Gruendungsgeschichte des Zollvereins. Berlin 1870.
 Betrachtungen ueber die Waehrungsfrage der deutschen Muenzreform. Berlin 1872.
 Ueber Kornhandel und Teuerungspolitik. 1 u. 2 Ausg. in der Deutschen Vierteljahrschrift. Nr. 38. 1846-48. 3 Ausg. Stuttgart etc. 1852.
 Versuch einer Theorie der Finanz-Regalien. Leipzig 1884.
 Ueber die Stellung der Nationaloekonomie im Kreise der verwandten Wissenschaften.
 (イ) 羅素博士の國土學
 Zur Geschichte der englischen Volkswirtschaftslehre im 16. und 17. Jahrhundert. Leipzig 1851. (★譯者の原文)
 Ein grosser Nationaloekonom des 14. Jahrhunderts. (Nicholas Oresnius.) 1862.
 Die deutsche Nationaloekonomie an der Graenzscheide des 16. und 17. Jahrhunderts. Leipzig 1862.
 Zwei saechsische Staatswirte im 16. und 17. Jahrhundert. Leipzig 1863.
 De doctrinae oeconomico-politicae apud Graecos primordius. Leipzig 1866.

Ueber die Ein- und Durchfuehrung des Adam Smithschen Systems in Deutschland. Leipzig 1867.
 Geschichte der Nationaloekonomie in Deutschland. Muenchen 1874. 2 A. Muenchen und Berlin. 1924.

D. Ricardo's Grundgesetze der Volkswirtschaft etc. Leipzig 1878.

(ニ) ノの地

Betrachtungen ueber die geographische Lage der grossen Staedte. Leipzig 1871.

Umriss zur Naturlehre des Caesarismus. Leipzig 1888.

Umriss zur Naturlehre der Demokratie. Leipzig 1890.

Politik, geschichtliche Naturlehre der Monarchie, Aristokratie und Demokratie. Stuttgart 1892. 3 A. Stuttgart etc. 1908.

Geistliche Gedanken eines Nationaloekonomen, herausgegeben von Carl Roscher. Dresden 1895. 2 A. Dresden. 1896. Neue Ausg. 1917.

三 ロッシャーが歴史派經濟學創始者の一人として占める學說史上の位置は、餘りにも瞭かであつて茲に喋々するを要しない。而も羅馬は一日にして成らず、彼のこの偉業

は學說史に對する博い知識と經濟史に對する深い反省とから生れ出たものであることは、上掲の諸著作がこれを示してゐる。後者に就いては措いて問はず、彼が學說史に就き如何に慎重な態度を持し廣汎な研究を行つてゐたかは、茲に譯出した『英國經濟學史論』一編によつて知ることができやう。

アダム・スミス以降英吉利經濟學の黄金時代に關する研究は早くから盛に行はれてゐるが、本書の對象たる十六七世紀の學說史に至つては、今日と雖もその研究が甚だ貧弱である。況んや七十年前の當時にあつては、僅かにマカロックの『經濟學文獻』があつたに過ぎない。その時にあつてこれ程多くの資料を涉獵讀破し、今日なほこの時代に關する最も重要な文獻たる本書を残したことは、ロツシヤの偉大な功績の一つである。

四 私には本書の譯出に當つては、學說史に要求せらるべき正確さといふ點に重心を置き、引用句に就いては一々原書と照校することを期した。併しロツシヤの引用した版本を實際に見ることができなかつた場合も多かつたので、それに就いては譯者の參照し得た版本を明記し且つその頁數をも並記して置いた。なほロツシヤが原書書によらず翻譯書に據つた場合には、できる限りその原書書をも調べた。これら手續きの結果た

る譯者の附註、その他ロツシヤの原著になくして譯者の新たに補入した部分は、總て角括弧「」のうちに收めて置いた。

五 なほこれと關聯して、私は商科大學所藏メンガー文庫の價値に就いて述べなければならぬ。本叢書第四冊クルノー『富の理論』に對する校閱者序文中に引かれた、アモン教授の戲言は、決して一片の辭令ではない。少くとも本書に引用された諸著書は大部分具つてゐるのみならず、ロツシヤが引くべくして引くを得なかつた多くの文獻もまた集つてゐる。私は本書譯出中同文庫を涉獵しつゝ、ラティマー、チャイルド、ノース等の著書を發見したときの喜びを、今に忘れることができない。このメンガー文庫に福田先生の藏書及び慶應圖書館所藏本を加へるとき、我々は『諸の典籍が、亦た我が獨逸の諸圖書館では極く極く稀にしか見出され得ないため、遺憾なく完全を保證するを得なかつた』と嘆じたロツシヤの遺憾を味はずして濟む幸福を持ち得やう。

六 本書の譯出に當り、福田先生は絶えず懇篤なる教示を賜り、その文庫の閱覽を許され、且つこの拙譯の原稿を通讀し、加朱の勞を取られた。茲に感謝の辭を捧げる。なほ譯者の拉丁語に關する知識は頗る貧弱である。この點に就き教示を賜つた商科大學のプ

ルニエ教授に厚く御禮を申し上げたい。更に慶應圖書館の閲覧上種々便宜を與へられた小泉信三教授、その他本書の譯出に當り指導及び援助を賜つた多數の先輩諸先生に對しても、深く御禮を申し上げなければならぬ。この邦譯書に就き少しでも長所と認められ得る點があれば、それは總てこれら諸先生に歸すべきものである。併し反對に譯者の不敏なる、これら示教に背ける過誤を犯した場合が多々あるに相違ない。これらは總て譯者一人の責任に歸すべきものである。先進の叱正を得ば幸である。

昭和三年十二月二十日

譯者

英國經濟學史論 目次

アロッシ	英國經濟學史論に序す(福田徳三)	一
譯者小引	(七)
緒論	一
第一章	十六世紀初頭の社會主義	七
第二章	貴金屬の價格低下	二二
第三章	英吉利植民帝國の建設	四三
第四章	ヴェルラム男爵ベイコン	七一
第五章	英吉利世界商業の濫觴	九一
第六章	英吉利革命	九九
第七章	貿易に於ける和蘭繁榮の模倣	一二

第八章 政治算術家ペテイー……………一四一

第九章 自由貿易論者ノース……………一八一

第十章 哲學者ロツク……………一九五

第十一章 英吉利世界商業のその後の興隆……………三三五

結 論……………三五一

補遺二編

一 本論一四〇頁補遺(サーウ・リアム・テムブル)……………三五九

二 本論二四九頁補遺(『貿易・鑄貨並に證券信用
に關する論策』)……………二七六

附 録

一 本書引用書目並びにその所在……………(1)

二 人名索引……………(25)

三 件名索引……………(33)

四 原著者の肖像及び筆蹟(カール・ロツシヤ一編『一經
濟學者の宗教思想』より採る)……………
卷頭

シロ^ロツ^ツ 英國經濟學史論

|| 十六・十七兩世紀に於ける ||

杉本榮一譯

【緒論】

英吉利國民經濟學史上の眞の黄金時代は、千七百四十二年乃至千八百二十三年、即ちヒューム【David Hume】の『論集』(Essays, moral, political, and literary. 2 vols. 1741-1842.) 創刊からデイヴィッド・リカルド【David Ricardo】の死に至るまでであつたやうに思はれる。ヒュームとアダム・スミス【Adam Smith】とマルサス【Thomas Robert Malthus】とリカルドとはこの時代の音頭取りであり、英吉利派經濟學の巨頭である。そして、凡そ如何なる國民如何なる時代と雖も、或る一個の藝術または學問上、これ程比較的完全な學統を持つたものは、私の識る限り近世にはない。——かの偉大な四人の英吉利人は、互に極めて密接な思想上の關係を持ち、何れもその研究の端緒を、大體に於て先輩が遺して呉れた處に見出した。併し、それと同時に、彼等はまた何れも、新しく博く且つ全く獨創の諸研究を通じて、斯學の領域を擴大した、而も單に廣さに於てのみならず、また實に研究法自體を深くし、且つ鋭くしたことに依つてもこれを擴大したのである。——この學派は極めて世界的であ

る。今日でも尙ほ多くのの人々にあつては、特にアダム・スミスが科學的經濟學一般の始祖となつて居り、英吉利學派と理論一般とは同義となつてゐる。これは勿論、この學派が、正に最も普遍的な最も抽象的な諸理論に於て、その際立つた強みを持つてゐる爲めである。併し同時にこの學派は、極めて國民的でもある。上の人々は、身も魂も徹頭徹尾英吉利人である。彼等の原理、彼等の例證は、全く自國民の政策や歴史のうちに根ざして居り、通例は自分たちの見聞の範圍に限られてゐる。その上、彼等は、この見聞の範圍を取入れ支配しやうと試みて、驚く可き程の成功を収めてゐる。實に彼等は、英吉利の文獻學や修史學、英吉利の地理學や自然研究を、自分たちの目的の爲めに巧みに利用した。他の方面に較べれば、より抽象的なより系統的な思索の分野で、英吉利國民が近來成し遂げた總てのものうち、その經濟學こそ、最も完全なものであることは、世評殆んど定つてゐる。英吉利に於ける斯學の非常な人氣はこの爲めで、上は總理大臣から下は工場労働者に至るまで、人みなこれに對し極めて熱烈な興味を寄せてゐる。要するに、我々は次のやうに言ひ得る。英吉利の正統派國民經濟學者たちは、古來常に最良の學統をその最盛時に於て特徴付けてゐたところの、かの思索と經驗、理論と實踐、普遍と特殊、獨創と學習との正に中庸を、

極めてよく墨守して來たのであると。

今日では、この事情は多くの點に於て變つて來た。と言つても、英吉利では現在優秀な經濟學者を缺いてゐるやうに、言ふ積りではない。シーニア【Senior】・マカロック【McCulloch】・トレンス【Torrens】・トック【Tooke】・ロイド【Lloyd】・ポーター【Porter】等の名前は、識者なら、多大の尊敬を以てするに非れば、これを口にし得ないであらう。而もなほ、我は、偉大な先師たちの傍に彼等を並列させることはできない。彼等は、從來の諸方法を幾重にも嚴密に詳細に應用したが、眞にこれを改良したわけでもなければ、更に新しいものを案出したわけでもない。彼等は、斯學の材料を數倍も豊富にしたが、それは常に既知の領域に止り、従つて斯學は眞により、總括的とはならなかつた。彼等は、從來の體系に存する諸矛盾を幾重にも調和したが、併しこの調和自體を再び唯一の體系にまで高めるには至らなかつた。それは、單純にして善良な弟子と偉大な創造的天才との相違で、前者の諸業績は、我々が常に感謝の念を以て受取るところであるが、後者に至つては、その誤謬のうち、にさへ、無限に多く學ぶべきものがある。斯學に取つて意義ある問題にして、すでに正統學派の先師たちにより取扱はれてゐなかつたものは、リカルド及びマルサスの沈黙

以來英吉利で論題とされたこと如何に少きことよ。勿論國民經濟學上の諸研究に對する人氣に至つては、斯の國では愈々加はつて行つた。然り、それは現在でも矢張り依然として増加しつゝある。ピット【Pitt】が屢々陥つたやうな經濟學上の諸謬見は、今日英吉利の國務大臣をして、その名聲を失はしめるに足るであらう。併し、凡そ一個の専門に於ける他の學派の歴史を研究したものは必ず氣付くことであるが、殆んど何處でも、藝術又は學問上、最大の外部擴張即ち公衆の間に於ける最大の流行と人氣とが生ずるのは、何時もこれが最大の内容充實の時期の後、従つてその古典的傑作創造の後である¹⁾。

5 — 成る程ジョン・ステュアート・ミル【John Stuart Mill】は、最近英吉利經濟學の躡踏せる天地を著しく打開すべき一個の企圖を試み、從來抽象的な理論が蔑視して來た多くの實際問題を取り入れるのみならず、更に大陸の諸事情をも研究して、多くの英吉利國民的偏見を取り除き、自らは國民經濟學を社會哲學の上に應用することによつて、自己の體系を特徴付けてゐる。斯の社會哲學は、プリストテレース政治學の精神を汲み、現代を参照して、人類全體の經濟

1) 例へば、我が獨逸の歌謠會・音樂學校・大演奏會などが、我等のモツァルトやベートーフェンの死後に至り、始めて、充分な發達を遂げたるが如くに。

的諸關係を、充分に理解しやうと試みたもので、それが最大の學問的欲求の一つを満足せしむべきことは、疑を容れない。併し、この擴張に依つても、ミルに課せられた問題は、決して包括されてゐない。彼の歴史上の豫備的諸研究も、彼の倫理的眼界も、ともに、斯かる目的にとつて充分徹底してゐるとは、言へないであらう。従つてミルあるに依つても、今日の英吉利經濟學は、一個の白銀時代たるの地位を脱却するに至つてゐない。

以下の諸研究は、英吉利國民經濟學史の黄金時代に先だち、餘り世に識られてゐない時期の真相を明かにすることを以て、目的とする。私は、この論文では、唯だ十八世紀初頭にまでしか及ばないつもりである。そして何れ後の論文では、でき得べくんば、更に進んで、ヒューム及びアダム・スミスに至るまでを、研究するつもりである。『學說史論』といふ地味な標題を選んだだけは、諸の豫備研究が餘りにも甚だしく缺けてゐること¹⁾、諸の典籍が、亦た、我

1) マカロックの有名な著作『經濟學文獻』(The literature of political economy; [a classified catalogue of select publications in the different departments of that science. London] 1845.) は、要するに、英吉利に就いての、内容は可成り豊富であるが、部門の分け方が可成り拙劣な圖書目録に、編者が多かれ少かれ適當な傍註を施したものの以上の、何物でもない。數冊の書物を書いた著者の如きは、この書全體に互つて四散

が獨逸の諸圖書館では極く極く稀にしか見出され得ない爲め遺憾なく完全を保證するを得なかつたからである。併しそれでも多少とも重要な點は殆んど看過してゐないつもりである。

してゐる。例へばジョサイア・タッカー【Josiah Tucker】の如き、十一個所も異つた場所から、拾ひ集めなければならぬ。全體の時期及び傾向はおるか、個々のものだけに就いてさへ、どうして歴史的特性の敘述ができやうぞ。『ゲツチンゲン學事彙報』(Goettingen Gelehrten Anzeigen, 1846 Stueck 163 fg.)に於ける、拙稿評論参照。

第一章 十六世紀初頭の社會主義

本來の中世に於ては、英吉利國民は他の總ての新興國民と同じく、國家學の體系に寄與し得べきものを殆んど持つてゐない。希臘人も、ペリクレス【Pericles】以來やつとこの状態に達したが、それが英吉利人と同一の理由に據ることは明白である。偉大な事業を行ひ華麗な藝術品を創造することは、青年にして既に爲し得るところである。併し、これらの事柄に就いて系統的に反省する爲めには、精神の圓熟を必要とし、これは國民と言はず個人と言はず、老年に至つて始めて成るものである。而も國民經濟の體系は、所謂政治のそれよりも、成立の日が尙ほ淺いのを通例とする。これは宛かも、自然研究が、單純な炊事施肥等の諸過程より天體運動の方を遙かに早く闡明したと同じである。

我々は英吉利國民經濟學の勞頭に、トマス・モーア【Thomas More】の『トトピア』¹⁾を置く。著者の晩年、彼に加へられた殘忍な異端者迫害、加特力教會に對す

1) Libellus vere aureus, nec minus salutaris quam festivus de optimo reipublicae statu deque nova insula Utopia. (Lovan 1516. 4.)

る彼の殉教(千五百三十四年)を識るものは、この初期の著作中に見出される思想の範圍が、一方ではエラスムス【Erasmus】の如き博學な無差別主義者と懷疑論者
とに接し、他方ではあの時代の農民戦争と再洗禮論者
とに接してゐるのに、驚かされるであらう。モア自身
らは、彼自身と彼の著作の内容との關係を、慎重に表現
してゐる。この書の大部分は、表面上、ユートピアから
歸つて來たラファエル・ヒスロデイ【Raphaell Hythlod-
es】といふ旅人の口を籍りてゐるが、この人物までが、
自分はユートピアの組織を辯護しやうと思つてゐる
のではなく、寧ろこれを敘述しやうと思つてゐるのだ、
と屢々斷言し(二四一頁【英譯二】)、而もモアは、必ず
しもその全部に賛成してゐるわけではない、と明確に
保留してゐるのである(二〇二頁【英譯三】、〇八頁【その他諸所】)。

私は千五百五十五年キョルン刊行十二枚折版に據つて引用する。【譯者は茲にロツシャーが引用してゐるキョルン版を見ることができなかつた。由つて左の英譯版に據り、彼の引用を確めた。The Utopia of Sir Thomas More, in Latin from the edition of March 1518, and in English from the first edition of Ralph Robinson's translation in 1551, with additional translations, introduction and notes, by J. H. Lupton. B. D. Oxford 1895. 本文中ロツシャーの引用頁數の下に【英譯……頁】とあるのは、この英譯本の頁數である。尙ほこの英譯本には、ロビンソンの英譯文と對照して、原著第二版の拉丁文をその儘刷出してあるから、我々は本書に據つて、拉丁文原著第二版の原文とも、對照することができる。】

とは言へ、彼の理想が事實上ユートピアに存することは、疑を容れない。同一人が、人類の貧困に關する皮相の觀察によつて社會主義者となりながら、而も後には、それに伴ふ暗愚と放埒と不可能とに關する生きた經驗から、¹⁾ 現存するものに對する熱情的な愛着に歸へることが、どうしてできるか——この點は、現代人こそ充分に想ひやることができるであらう。

歴史が教へるやうに、諸の社會主義的、又は共產主義的學說が比較的廣く且つ深い共鳴を見出すのは、唯だ次の二條件が結合してゐる處に限られてゐた。その一は、甚しい貧富の懸隔で、その結果は、一方では驕慢と人間蔑視とを、他方では絶望と嫉妬とを、非常な程度にまで昂せしめる。これと同時に、高度に發達した分業の爲め、勤勞と勞銀との相互關係が、素人から見ても不明瞭となつてゐる場合には、特に然りである。その二は、激しい否な非常に反抗的な革命の結果たる、公衆の正義感に於ける混亂と鈍化とがこれである。今日がさうであり、希臘文明衰微の時代及び基督紀元前最後の一世紀半がさうであつた。近世の初頭乃至十七世紀の中葉もこれと同じである。——最後の時期は、亞

1) 或は、モア自ら前の郡奉行代理【Under-sheriff】として咫尺の間に觀察することのできた、千五百十七年の倫敦手工業者一揆が、この變説に與つて力あるのではあるまいか。

米利加に於ける鑛物の大産出並に同種の他の諸事件が、歐羅巴の價格關係の上に影響を及ぼした時代である。ところで、凡そ流通用具【貨幣】の價值低落は、事業家たちにとつては極めて有利であるが、いつも下層階級を酷く壓迫する。これは、後者がその勞働の價格をそれ相當に昂め得るのは、極く徐々たるに過ぎず、それも唯だ供給の減少、即ち移民又は死滅によるのみだからである。穀物價格に據つて計算すると、千四百九十五年頃の英吉利の日傭賃は、百年後より二倍乃至三倍の高位にあつた。さらにこの時期は、非常に多くの國々で、昔の父家長的農法と新しい投機的農法とが轉換された時代である。殊に英吉利では、三圃農法に代つて穀芻耕作法が行はれるに至つた爲めと、無数の小作農場が開闢され、大きな定期貸借が発生した爲めに實現された、一個の過渡期であつた。そこでこの場合一番自然な方途は、無論、斯様にして過剩となつた農夫たちを工業に收容することであらう。然るに十六世紀の財政は、主として國家の專賣を基礎として居た、従つて甚しく工業を壓迫してゐたことは當然であるから、これも不可能であつた。加之、僧院の廢止が行はれたから、この爲めにも、直接の貧窮は甚だしく増加せざるを得なかつた。この事情全體を最も明かに示してゐるものは、ヘンリー八世の治世二十七年以降、貧民救助救貧

院創設等の爲めに發布され、エリザベス治世の最終年に至つて、終に有名な救貧法となつたかの無数の法律これである。エリザベスの晩年には、各州に三四百人もの屈強な浮浪人がゐて、掠奪と竊盜とによつて生活し、同勢、六十人に及ぶ徒黨を組んで横行し、官憲をさへ畏れさせる程の力があつたさうである¹⁾。——さて他方、この窮迫の最中に於ける國民の氣分に就いては、農民戰爭、再洗禮論者たち、和蘭の叛亂、宗教改革及び反宗教改革運動、殊に英吉利では、エリザベス時代の王位繼承の争第一ステュアート王朝時代の憲法擁護の戦、最後には革命及び共和國を憶ふべきである。クロムウエルの時代に甚だ廣く流行してゐた見解は、今後は誰も領主たちの爲めに小作する義務はない、といふにあつた。レヴェラーズ (Levellers) の政治上の意見と宗教上の見解とは、それ程僅かしか分離してゐなかつたのである。

殆んど一世紀半に亘つて西歐羅巴を戰慄させたこの運動が抑、始つたことこそ、モリアの著作の理解に導くべき基礎を形づくる。總ての社會

1) サー・エフ・エム・イーデン、『貧民の狀態』(Sir F. M. Eden: The state of the poor; [or, a history of the labouring classes in England, from the conquest to the present period. London 1757. 3 vols.]) 第一卷一一二頁。

主義的體系に於ける如く、本書に於ても、比較的と言つて一番正しい部分は、その批判的部分である。——モリアが何よりも歎いてゐるのは、國內にのらくら者が甚だ澤山居るに對し、この連中を兎に角養つて行かねばならぬ働き手は、將に影を没しやうとしてゐる一事これである。彼は、前者のうち、僧侶や貴族たち、とりわけ特に、後者の從者や多數の婦人や乞食その他を算へてゐる。而も勞働者までが、大部分、單に金を貰つて金持の虚榮心を満足させるだけの爲めに、全く無用な事柄に使はれてゐる(三九頁以下、九九頁【英譯四一四頁以下】)。失費の多い傭兵連が戰の役に立つとは、モリアの決して認めなかつたところである(四〇頁【英譯四九頁】)。總ての人々が勤勉で、唯だ本當に有用な仕事だけを努めるときは、何人と雖も大して勞働する必要はないであらう。ところが今日では、少數の本當に働く人々が、家畜よりもひどいものを食はされ、こき使はれてゐる。老衰、病患等の場合に彼等はどうする當てもないといふ事情を顧慮するとき、特に然りである(九六、一九七頁【英譯一〇四、一〇七、一〇八頁】)。同様に、モリアは、當時の消費の仕方にも不満足で、葡萄酒店や麥酒店や女郎屋に對し、骰子や骨牌その他の賭博に對し、躍起となつて反對する(四六、九五頁【英譯五七、五八、五九頁】)。凡そ他人の前で外觀だけを立派にしやうと努力することは、彼から見れば懲罰に値する

馬鹿げた行爲である。それ故彼は、例へば珍らしい黄金よりも物の役に立つ鐵を尊重し(一一七頁【英譯一七四頁】)。粗末な羊毛製品に對する精巧な夫れの偏重を輕蔑して、良い方と雖も、元を質せば羊の着たものに過ぎないと笑ふ(二三一頁以下【英譯一八一以下】)。殊に彼は、當時世に行はれた國庫の苛斂誅求に對して、躍起となつて反對した。例へば、貨幣の改鑄單に表面だけの戰爭危険を理由とする租稅誅求既に忘れられた法律の違反を理由とする罰金その他の如きこれである(六五頁【英譯九五】)。否、進んでは、國民の財産は總て國王に屬すべきものであるとする、十六世紀の極端な王權説もまたさうである(六八頁【英譯九二頁】)。既に述べた農業上の諸變動¹⁾を取扱ふに當つては、その不都合な側を觀て、羊を呼んで、人間を貪り食ひ都鄙を荒廢せしめる猛獸であるといふ(四二頁【英譯五一頁】)²⁾。その書の最後には、特に力を籠め、更に繰返して所謂現文明の

1) ヘンリー八世時代に Common pleas 【民事高等裁判所】の判事であつた、有名なフィッツ・ハーバート [Fitz Herbert] の同時代の著作『耕作論』 [The boke of husbandrie. London (Berthelet) 1523.] 及び『檢地論』 [The boke of surveying. An M. D. XXXIX. London (Berthelet) 1523.] も亦たこれに關聯してゐる。【兩書共に Certain ancient tracts concerning the management of landed property reprinted. London 1767. に再刻されてゐる。】

2) 事實千五百三十三年には、二千頭以上の羊群を所有すべからず、と

蠻行なるものゝ總てを、並べ立てゝゐる（二九七頁以下【英譯三〇】）。其處で、モリアは、次の如く露骨に曰ふ。凡そ今日の國家は、本來唯だ、富者が結託して公益の假面の下に己の私利を營む手段たるに過ぎぬ。労働者たちは、壯年の間 *respublica* 【國家】の爲めに搾り取られ、而も一たび、年と病とに勝てなくなると、全く頼るものとはなく、最も無禮な忘恩を以て報ひられる。併し、凡そこれらの不幸は、竊盜も、詐欺及び着服も、争鬭も、殺戮及び暴動も、悲歎も、心配も、貧困も、總て貨幣の廢止と共に自ら消滅すべきものである。これは、現在でも既に、凶作の後には常に目睹し得るところで、飢饉なるものは、全く貨幣の作用を受けて穀物の在荷が不適當に分配された結果にほかならない。

モリアの積極的な主張と救済策とは、最近の社會主義者たちのそれと甚しく類似してゐる。總ての所謂社會主義なるものが、間もなく疲弊して何の役にも立たないものとなるの理は、茲に既に示されてゐる。私は唯だその最も重要なもののみを擧げるであらう。——ユートピアの處世哲學は、徹

いふ一法令（ヘンリー八世治世二十五年法律第十三號）が發布されてゐる。

この法律の緒言は、一人の所有者にして二萬四千頭に及ぶ羊を持つてゐるものもある、と言明してゐる。

底的な幸福主義である。總ての徳は、本性に従つて生活するに在る。然るに本性自體は快樂 (*voluptatem, vitam incundam*) を以て我々の行爲全體の目的と見做すべきことを命ずる（二二九頁【英譯一〇〇】）。この快樂を法外に粗笨な仕方理解すべからざることとは、トマス・モリアにあつて自明の理である。更にこれに、一人の獲るところは必ず他人の失ふところなりといふ、もう一つの別な原則が加はる（七九頁【英譯一〇九】）。凡そこれら二つの原則を認める者は、私有財産を放棄せざるを得ない（七六頁【英譯一〇六】）。斯くてユートピアでは、財産の共有と、労働の統制とが行はれ、従つて特に官廳は、殆んど専門的に、凡ゆる遊惰を防止することを以てその任務とする（九六頁【英譯一〇四】）。勿論どの都市も、一定の地域を所屬として割り宛てられて居り（八六頁【英譯一〇九】）、個々の家族もまた、多くの點に於て、自足的な範圍を形づくつてゐる。同時に、人口の均衡は、過度に密集した都市及び家族¹⁾から他の過度に稀薄なものへ移住せしめることによつて、絶えず維持される（一〇四頁【英譯一〇四】）。農業は、總てのものが週期的に交代しつゝこれを營む（八六頁【英譯一〇四】）。それ以外に、各人はなほ手工業にも従事する（九五頁【英譯一〇三】）。人々は共同の

1) 總ての社會主義的世界改良屋の主たる困難！

食卓で食事し(一〇八頁以下【英譯一六】)、總ての人々の衣服は徹頭徹尾均一である(一〇二頁【英譯一五〇頁】)。誰でもその筋の許可を得た後始めて學問に専心することを許される(二〇〇頁【英譯一四八頁】)、又旅行免狀を持つて始めて旅立つことを許される。なほ、各人は何處に行つても吾が家に居ると同じであるから、荷物はその際携帯しない(一一三頁【英譯一〇八頁】)。總て相互間の過不足は國家の指揮の下に、贈與を通じて平均される(一一四頁【英譯一〇七頁】)。外國貿易を通じてユートピアに多量に流れ込む貴金屬は、單に外國と戰爭する目的だけの爲めに貯藏される。國內では却つて最大の輕蔑を以つてこれを取扱ふから、例へば、罪人は黄金の鎖を着け、小兒は眞珠や寶石を遊び、便器は金銀を以つてこれを造る(一一五頁以下【英譯一七〇頁】)。

財産共有論者が、また原則として、婦人共有や婦人解放の空想 耽つたことは、周知のことでもあるし、又説明もつくことである。何となれば、食卓と寢床、世帯と結婚とは、いふまでもなく同一の關係即ち家庭生活の異つた方面たるに過ぎず、従つて個人所有の徹底的な反對者は、個人結婚とも闘ふことを容易に辭し得ない筈であり、更に婦人解放に至つては、財産の共有に導く極端な平等觀が、兩性の社會的不平等をも認めまいとすべきが故で

ある。ところでこの問題に於ては、我々はモリアを再洗禮論者と同一視すべきでないが、併し、必しも類似點は一つもないといふ次第ではない。そこでモリアは、ユートピアの婦人たちが科學教育のみならず(九七頁【英譯一四七頁以下】)、軍事教練に於ても、男子に伍することを認める(二六一頁【英譯二〇三頁】)。僧侶の職でさへ、老年にして獨身の婦人は就任することができる(二八七頁【英譯二八五頁】)。結婚に關する最も重要な改革は、新郎新婦が終生の契りを結ぶ前適當な證人の同席の下に、裸體で相見ゆること(二五〇頁【英譯二二五頁】)、及びこれに加ふるに離婚をも容易にすべしと云ふこと——少くとも加特力教徒たちは逡巡しさうな仕方——に存する(二五二頁【英譯二二八頁】)。

最後に、なほ、特徴的なのは、次の諸點である。(一) モリアが宗教上の異説に對して甚だ寛大なこと。これは、當時古典的に教育された人士にあつては、珍らしいことでないけれども、併しこの風も間もなく根柢から一掃されて終ひ、例へば千六百十三年英吉利に於ては、信教自由法を推薦した樞密顧問官が若干あるそうだと論じた廉を以て、中傷者として終身禁錮刑に處せられた者があつた程である。ユートピアでは、これと反對に、最も完全な信教自由が行はれてゐる。これは平和の爲めのみならず、また斯ふすることが、正に宗

教及び眞理自體に對し裨益するところ最も大なりと考へる故である(一八〇頁【英譯二】)。神殿では賢明な中立が守られてゐる。即ち凡そ或る一つの宗派に少しでも差障りの生じ得ることは、總じて差控へられる(一九〇頁【英譯二】)。要するに此處では、どの宗派に對しても斷じて輕卒な判定を下してはならぬ、といふ原則が存するのである(一八五頁【英譯二】)。總てこれ等のことは、確かに、無差別主義の香りを持つもので、モリアの理想國は基督教なくともなほ充分に成立し得べき所以を想ふとき、殊に然りである。彼は基督教に於ける財産共有の傾向を稱揚してはゐるけれども(二七七頁【英譯二】)、彼にとつては、基督教を容れることゝ希臘文學を容れることゝは、殆んど同じ段階に立つてゐるやうに思はれる。その他の點に就いては、ユートピアの信教自由も、今日のそれよりはまだ仲々遅れてゐて、靈魂の不滅や死後の報ひや神の攝理を否定する意見は、其處では非人間的となつて居り、市民權に値しないものとされてゐる(一八〇頁【英譯二】)。——(二)彼が、罪人に對して、寛大なこと。モリアは最も斷乎たる死刑反對論者に屬し、殆んど總ての場合、自由刑や強制勞働等を以て、これに代へや

1) 不治の患者たちに對する自殺の勸告も(一四八頁【英譯二二三頁】) 異端の思想を想ひ起さしめる。

うとしてゐる(二五三頁【英譯二】)。つまり、盜人が死刑に處せられることは、¹⁾彼から見れば正義と聖書とに悖るものと考へられるのである(四九頁【英譯二】)。然り、彼は、近頃好まれてゐる見解に左袒して、犯罪を防止する爲めには、犯人自身より寧ろ市民社會が變化しなければならぬと考へてゐるやうに思はれる(三八頁以下、五二頁【英譯四三頁】以下、六三頁【英譯三頁】)。——(三)總じて、ユートピア人は、實際極端に平和を愛する。殊に彼等は、從來の軍人崇拜の觀念を輕視する餘り、特に懸賞を附して、敵國の領主や將校たちの暗殺又は引渡しを、實行させやうとするまでに至つてゐる(一六四頁以下【英譯二四頁】以下)。これに反して彼等は、防禦を除き、次の二つの場合には、少しも躊躇することなく、戰爭に訴へる。第一には、諸外國民を暴君專政から解放するため(quod humanitatis gratia faciunt)【彼等はそれを人道の爲めに行ふ】(二六一頁【英譯二四四頁】)。第二には、更に、人口が比較的少いにも拘らずユートピアの憲法に對して穩かに同意することを拒んだ國土に於て、

1) 事實恐ろしく響くが、ヘンリー八世は大小の盜賊總數七萬二千人を死刑に處し、更にエリザベス時代には年々三・四百人も『絞首臺に喰はれた』と、ハリソンの『英國記』(Harrison: Description of Britain.)【譯者は本書を見ることができなかつた。併し此處に引用されてゐる部分は、イーデン『貧民の狀態』第一卷一一二頁にその儘引用されてゐる】一八六頁は誌してゐる。

過剰人口の就職口を作る爲めに(一〇五頁【英譯一】五五頁)。

苟も近世社會主義文獻に通じてゐるものは、これら諸見解の意義を悟り得るであらう。

第二章 貴金屬の價格低下¹⁾

十六世紀を通じて大抵の歐羅巴諸國に起つた、あらゆる流通用具の價格低下は、通常亞米利加に於ける鑛物大産出の一結果と見做されてゐる。そして最も重要な原因がこれであることは、言ふまでもない。併し、それは唯一のものであるとは言ひ難い。といふのは、亞米利加からの流入が、明かに、斯様な作用を説明し得るに足る程の分量に達しないすつと以前に、金屬價格の下落は既に顯著となつてゐた。殊にポトシ【Potosi】の發見(千五百四十五年)以前にあつては、亞米利加の銀は殆んど全く歐羅巴に流入しなかつたのに、佛蘭西では既に千五百年乃至千五百年三十年の交、銀の價格が約五割方下落してゐた²⁾。更に千五百年二十二年までは、亞米利加からの輸出は全く金だけであつたが、

1) 本章は遺憾ながら、埋め草以上には餘り出ることができない。これは、最も重要な資料が、ライプツヒにもドレスデンにも否なベルリンにもゲツチンゲンにも、見出され得なかつた爲めである。従つて私は、近世英吉利の著述家たちが傳へて呉れる諸拔萃を以て、満足せざるを得なかつた。【商科大學のメンガー文庫は、幸にこれ等の資料を豊富に所蔵してゐる。】

2) ジョン・ロー『貨幣貿易論』(John Law: Money and trade considered. Glasgow 1750.) 一二九頁。

それにも拘らず、銀に對する金の比價は目立つて下落しなかつた。この経過全體の主たる原因は、寧ろ、同時代歐羅巴の國民經濟に起つた内部的諸變化に存するのであらう。國民經濟は、當時恰も大抵の國々に於て、中世の眠りから目覺めた。固定的であつた國民資本は、やゝ流動的となつた。權利は次第に確保されてゆくと共に、投機もまた活潑となり、この二つが一體となつて個人並びに國家を刺戟し、中世式の退藏を斷念せしめた。貨幣は、從來、主として價值保藏の役目を勤めてゐたが、今やその流通能力が際立つて來た。分業が著しくなつて、貨幣の流通は愈、速かとなつた。同時に、信用は、生産を促進したり貨幣を節約したりする能力を、益、大規模に發展せしめ、本來の貨幣代用具例へば手形の如きも、愈、著しく行はれるに至つた¹⁾。近世眞先に成熟した國家たる伊太利にあつては、貴金屬價值下落の勢も、亞米利加發見以前に於て既に充分發展してゐたが、この理由は、斯くの如くに考へれば自ら説明がつく。同國では、十六世紀の初頭に

1) サー・ジェイムス・ステュアート『經濟原論』(Sir James Stuart : Principles of political economy.) 第二編第三章參照。併しこれにも勝つて特にヘルフェリッヒ『貴金屬價值の週期的變動に就いて』(J. Helfferich : Von den periodischen Schwankungen im Werth der edlen Metalle [von der Entdeckung Amerikas bis zum Jahre 1830. Nürnberg 1843.]) 六五—七六頁は、極めて尊重すべき勞作である。

は、商品價格は殆んど全く騰貴しなかつた。否な我々は、伊太利の諸市場では、千七百五十年頃の貨幣價格は、千四百五十年頃に較べて、殆んど低くならなかつたとさへ、言ふことを得る¹⁾。

更に、價格の大激變が、國の異なるにより、甚しく時代を異にして襲來したことも、これと關聯してゐる。例へば、佛蘭西や南獨逸では、この動搖は既に十六世紀の最初の十年間に始つてゐたが、八十年代には再び平靜に歸つてゐた。これに反して、英吉利では、十七世紀の三十年代になつてやつと平靜に復したが、その開始も比較にならない程遅かつたのである。

この過程に關する最も始めの而も最もよく識られてゐる苦情の中には、有名なヒューラティマー【Hugh Latimer】の説教中にある若干の言葉が、算へらるべきである。この敬虔にして博學な而も人望のあつた僧正は、その新教的反抗の爲めに、ヘンリー八世によつて免職逮捕され、舊教徒メイリーによつて(千五百五十五年)火刑に處せられた人であるが、幼王エドワード六世が朝にあつた時分、セント・ポーロ教會で説教を行つた。この説教中の

1) カルリ『貨幣論』(G. R. Carli: [Dissertazione dell' origine e del commercio] della moneta. [Milano 1804.] Scrittori classici italiani di economia [politica, pt. moderna.] tom. 13.) 三二七頁以下。

一つ(千五百四十八年一月十九日)に於て、ラティマーは彌昂じて行く一般的な物價暴騰の爲めに、英吉利國民が脅かされつゝあつた諸の悲しむべき成行を算へ立てゝゐる。これを觀察する機會は、彼自身の家庭に就いて起つたといふ。『私の父は、自分の土地を持たない小作農業者で御座いました。小さな田地を【英原著ではこの間高々年額】三磅乃至四磅で借受け、其處に六人の人間を養ふだけの穀物を作つて居りました。父は更に百頭の羊を飼ふ爲めの牧場を持ち、母は三十頭の牡牛の乳を搾つて居りました。父は一頭の馬を飼ひ、装甲騎兵として王様に仕へることができました。【英原著では、この一句は次の如くに頂戴する場所に参りますと、ときには、自ら馬に乗り装甲騎兵として王様に仕へることができ、また事實仕へて居りました。】父がブラックヒースの戦(千四百九十七年)に出陣のとき、甲冑の扣金を締めて上げましたことを、私自身今だに記憶致して居ります。【英原著では、この間父はまた私を學校に通はせて呉れました。さうで御座いませんでしたなら、私は、今日陛下の御前で御説教申上げることにはできなかつたで御座います。】父は私の姉妹たちをも、めいめい五磅或は二十ノールブルの持參金付きで嫁けて呉れ、敬虔と敬神との裡に教育して呉れました。貧乏な隣人たちに對しても御馳走を致し、また常に【英原著では「幾らかの」】喜捨を致して居りました。斯ういふことは、皆小作料

が安かつたからこそできたので御座います。ところが今日では、年々十六磅【英原著では、この間又はそれ以上】も小作料を支拂ひ、陛下の爲めにも、自分の爲めにも、自分の子供たちの爲めにも、何一つすることができません、更に貧民たち一杯の酒を振舞ふこともできません。併し他の個所では、地代の騰貴は幾分低く誌るされてゐる。『二十磅から四十磅で小作されて居りましたものが、今日では、五十磅から百磅以上もかゝります。そこで物成りの有り餘る最中にも、貧民たちにとつては飢饉が起ります。總ての食糧は不自然に高く、今に一匹の豚に一磅も支拂はねばならなくなるで御座います。地主たちの収入は多過ぎますのに、地方民の醫療費や貧民たちの辯護料や商人たちの商品等何れも餘りに高過ぎます』¹⁾。茲でラティマーが苦難の窮極の原因と見做してゐるものは、明かに小作料の騰貴で、

1) 『説教集』(〔Frvtefvll〕 sermons [preached by the right reuerend father, and constant martyr of Jesus Christ M. Hugh Latimer] newly imprinted: with others, not heretofore set forth in print, to the edifying of all which will dispose them selues to the readying of the same. London] 1575.) 三十一頁以下。イーデン『貧民の狀態』第一卷九三頁。【本書でロツシャーが引用してゐるイーデン前掲書頁数は、千七百九十七年版のそれと全部符合してゐるが、この個所だけは不一致を示してゐる。これは一〇〇頁の誤植ではあるまいか。】ヤコブ『貴金屬の生産

並びに消費に關する歴史的研究』(W. Jacob: An historical inquiry into the production and consumption of the precious metals. [London 1831.]) 第二卷第十九章【七七頁以下】。【茲に引用されてゐるラティマーの説教は、千五百四十八年一月十九日セント・ポーロ教會に於ける説教(『説教集』一三頁以下)ではない。これは千五百四十九年三月八日、ウエストミンスター宮殿内説教所に於けるエドワード六世御前説教(前掲書二三頁以下)中の一節である。そして、この引用文の前半は『説教集』三一頁より、後半は三〇頁から引かれてゐる。尙ほ後半の引用文は、必ずしも正確ではない。それは、次の如く述べられてゐる。『醫者。貧民たちが患ひましても、支拂を十分にせねば助けて貰ふわけに参りません。辯護士にも高過ぎる程澤山拂はねばなりませんから、貧乏人たちは助言も出張も頼めませんし、また斯様な事態の中に在つて助力を受けることもできません。商人の許に於きましても、非常に澤山支拂はなければ、どんな商品も手に入れることができません。貴君方地主たち、貴君方地代をお受取りになる人々、否、私は敢て申します、貴君方惡地主たち、貴君方沒義道な地主たち、貴君方は所有地から年々餘りに澤山御受取りになります。と申しますのは、從來この土地で二十磅から四十磅(これは一つの領地で、他人の汗と勞働とから無償で受取り得る、正當な部分で御座います)でありましたものが、今日では年額五十磅から百磅以上で貸されます。神様が、御慈悲を以て、荒野の代りに土地の色々な果實を澤山授けて下さつたのに、この法外な恐ろしい物價騰貴が人間によつて作られましたのは、地代が高過ぎる結果で御座います。これらの金持たちは甚だ澤山のものを持つて居りますのに、而も斯様な物價騰貴が発生し、貧民たち(勞働で衣食してゐる)は、額に汗し乍ら暮して行けず、凡ゆる種類の食物は大變高ふ御座います、豚も鴨も鬮も雞も卵等も。これらの品物やその他諸色が、甚だ不當に高くなりました。實際この勢が續きましたなら、終ひには、豚一匹に一磅を支拂はなければならなくなるであらうと、存ぜられます。』】

尊敬すべき著者は、エンクロージャー(Inclosures)や羊牧地の増加や穀物賣買による暴利その他に對して最も熱烈に反對してゐる。

この個所は、普通十六世紀の中葉以前既に、英吉利では、貨幣價格の暴落が顯著となつてゐた、といふ證明に使はれて來た。併し、これは正にこの點に於て、今なほ幾分看過されてゐる重大な諸困難を提供してゐる。これらの困難は、變化した貨幣品位を考慮しただけでは、決して除かれない。即ち今日の貨幣本位からすれば、千四百九十七年頃の四磅は五磅六志八片に等しく、千五百四十八年頃の十六磅は十四磅二志に等しい。従つて老ラティマーの云ふ小作料騰貴は、三十割ではなくて、約十六割四分餘にしか當らない。——そこで、流通用具の價格低下は正に小作農階級を激しく壓迫した筈だといふのは、容易に信ず可からざることである。小作契約は、それが繼續してゐる限り、依然として舊い貨幣價値を基礎としてゐるのに、この階級の生産物は既に新しい價格で賣られてゐるから、それは原則としては、彼等に對して大きな利益を齎すであらう。假令ラティマーの父が、年々小作地の回收を豫告される小作農であつたとしても、彼の小作料騰貴は貨幣價格下落の影響を受け、穀價の騰貴に先つことは殆んどできなかつた筈である。而も穀價は、問題の

時期に於て、決して著しくは高くならなかつた。アーサー・ヤングの諸研究¹⁾によれば、一クォーターの小麥は、今日の貨幣に換算して年平均次の如くであつた。

一五〇〇年—一五一九年	六志七片
一五三二年—一五六二年	八志三片半
一五七三年—一五七五年	一磅一五志八片
一五八六年—一五九九年	二磅 二志四片
更に私は、イーデンによつて傳へられてゐる小麥價格 ²⁾ から平均を算出し、今日の貨幣に換算した。然らば次の如くとなるであらう。	
一四九五年—一五〇四年	一〇志
一五〇五年—一五一四年	一三志四片
一五一五年—一五二六年 ³⁾	一八志一片
一五二七年—一五四二年	二〇志四片

1) アーサー・ヤング『政治算術』(Arthur Young: Political arithmetic, [containing observations on the present state of Great-Britain; and the principles of her policy in the encouragement of agriculture. London 1774.]) 第一編第八章。

2) イーデン『貧民の狀態』第三卷中の Table of prices【物價表】を見よ。そこでイーデンは、彼の擧げてゐる物價は平均物價なり、といふ保證を與へてゐないから、この資料は注意して用ふべきであつて、何人もアーサー・ヤングからの乖離を訝つてはならない。

3) 併し、茲で私は、千五百二十三年の大飢饉を除いて置いた。

一五四三年—一五五二年 一七志九片
 一五五三年—一五六〇年 一四志七片
 一五六一年—一五六九年 一七志
 一五七二年—一五八五年 二二志四片
 一五八六年—一五九九年 三四志四片

これら二つのそれ自體可なり不確かな報告を、我々の目的に充分副はしめる爲め、英吉利穀物法の規定によつて訂正する。即ち穀物の輸出は、穀價が立法者の認めて以て正當に低廉であるとすゝる相場に下つた時にのみ、許されてゐた。而もこの標準價格は、小麥一クォーターに就き、

一五五四年	六志八片
一五五九年	六志八片
一五六三年	一〇志
一五九三年	二〇志
一六〇四年	二六志八片 ¹⁾

1) フィリップ及メイリー治世一年及二年法律第五號、エリザベス治世一年法律第十一號、エリザベス治世五年、エリザベス治世三十五年法律第七號、ジェームス一世治世一年法律第二十五號参照。

と規定されてゐた。これら總ての報告に據れば、穀價の著しい騰貴がエリザベス朝に至つて始めて生じたこと¹⁾だけは、少くとも明白になる。——斯様な諸事實とラティマー僧正の言葉との間に存する外見上の矛盾は、次の様に解決することができると信ずる。商品の騰貴や勞銀の下落等は、當時既に始つてゐた流通用具の一般的價格低下に、基くものであらう。穀物價格がこれと共に騰貴しなかつたのは、十六世紀前半を特徴付けてゐる英吉利農業の大改良（これは更に僧院領の俗人所有以來殊に甚しくなつたが）に、基くものと思ふ。人口の増加は、耕作法の改良に基く生産費低減と、同じ歩調を保つことができなかった。この事情の直接の結果が、嚴密にリカルド流の意義に於ける地代騰貴たり得ないことは、勿論である。併し小作料の騰貴とはなり得た筈である。といふのは、小作料にあつては、まづ大抵の場合、その大部分が資本利子から成立つてゐるから。當

1) アダム・スミスも『國富論』【An inquiry into the nature and causes of】the wealth of nations. 【London 1776.】第一編第十一章に於て、貨幣價格下落の運動を、千五百七十年乃至千六百四十年代のことだとしてゐる。同章でスミスが特に根據としてゐるのは、フリートウッド【Fleetwood】の計算した小麥一クォーターの平均價格で、千四百九十九年乃至千五百六十年には十志十二分の五片に等しく、千五百六十一年乃至千六百一年には反對に二磅七志五片三分の一に達してゐる。

時一般に行はれてゐた、多數小農場の大農場への合併調節穀菽耕作法の採用等——これらは總て、無数の場合、小農たちにとり甚だしく不利益な競争を惹起したに相違ない。舊僧院領の俗人所有者たちは、その臣民を取扱ふに當り、教權治下に於て普通であつたところより、一般に甚だしく無遠慮であつたから、それは益、以て然りである。千五百四十九年の恐ろしい農民戦争だけでも、想ひ起すべきである。これは、主として、僧院の復興とエンクロージュアの廢止とを目的としたものである。更に千五百九十七年には、オックスフォードシャーで、籬を破壊して穀作に歸へらうとする一つの小さな一揆が起り、千六百七年には、中部諸州で、同じ目的を持つ更に極めて激しい一揆が起つてゐる。僧正の父の如き非常に年取つた人が、すつかり變化した新時代の農法に對し、殆んど適應する途を知らず、その結果貧乏とならざるを得なかつたことは、當然である。況や彼の農場は、特に家畜を飼養する爲めに設けられて居り、經營法上の新たな改善は、全くこの部門だけに集中してゐたから、彌、この窮狀に陥り易かつたわけである。最後にまた、僧正自身の氣持をも顧みなければならぬ。彼もまた老人、而も僧侶であるから、古く feudal system 【封建制度】から新しき commercial system 【商業制度】への農業上の推移に對しては、恰かも今日多く

の老翁が鐵道延長を目すると同じ不満足を以て、これを眺めやうとした。凡そ當時の僧侶たちは、皆その所得を減らされ、經濟上沈みゆく凡ゆる階級と等しく、再三の貨幣品位低下を最も苦痛と感じてゐたのである。——加之、ラティマーが特に言及してゐる豚肉の騰貴は、この商品自體の内部的變化から説明することが出来る。豚といふものは、中世に於てはどの國民にあつても、最も普通な最も安い家畜であるが、進んで比較的高度の文化段階に達し、とりわけ森の面積が狭くなると、それは特に甚しく騰貴するを常とする。ところで當時の英吉利に於ては、更にこれに加ふるに、小さな小作農夫と細農民たち【*kleine Pächter und ländliche Cottagers*】従つて別の言葉を以て言へば、何時でも多數の豚を飼ひ自家の小さな經濟の落ちこぼれを以てこれを養ふを常とする階級に、甚しい減少が起つたのである。

さてその後、激しい物價の變動が充分に疑ふ餘地のない程進行しつゝあつたとき、これに關する輿論を言葉に物し批判を加へる爲めに、世態に通じた深奥な次の一書が現れた。『現今我が國人の各階級に通例な或る不平に關する簡略な調査』(A compendious or brief examination of certayne ordinary complaints of divers of our countrymen in these our days;

which, although they are in some part unjust and frivolous, yet they are all by way of dialogues thoroughly debated and discussed. By W. S., gentleman. 4. London 1581.) これである。その著者は、一般にウキリアム・スタッフオード【William Stafford】なりとされてゐる¹⁾。この書は、一人の土地貴族・一人の神學博士・一人の小作農・一人の小賣商人及び一人の帽子製造業

1) 千七百五十一年にこの書を新しく重刷した一書店は、これ以上何の典據もないのに、恐らくは唯だ賣行をよくするだけの爲めであらうが、偉大なウキリアム・シェイクスピアの名前を以て、この頭文字ダヴリユー・エスを補つた。併しこの詩人は、本書創刊の時十七歳であつた筈だ。こんな圓熟した觀察豊富な勞作は、恐らく何人と雖もこんな年齢に於て書けるものでない。ファーマー『シェイクスピアの學殖に就いて』(Farmer: On the learning of Shakespeare.)参照。——スタッフオードの著書の詳細な抜萃は、次の書物の中に見出される。ジェイ・スミス『羊毛考』(J. Smith: Memoirs of wool, or chronicon rusticum-commerciale. London 1747.)【スミスの『羊毛考』に就いては、本譯書では便宜上次の版本を利用する。Memoirs of wool, woolen manufactures, and trade, particularly in England from the earliest to the present times; with occasional notes, dissertations, and reflections. 2nd ed., rev. and enl. London 1757. 2 vols.】。ヤング『政治算術』第一編第八章。イーデン『貧民の狀態』第一卷、八九、一〇九、一一九頁。ヤコブ、前掲書、第二卷第二十章。原本が英吉利に於てさへ流布することの如何に少いかは、アーサー・ヤングが彼の引用文をジェイ・スミスから寫し取つてゐる事情によつて、證明される。【スタッフオードの『簡略な調査』は、その後次の如くに翻刻された。 a) William Stafford's Compendious or brief examination

者の間に於ける對話の形式で書かれてゐる。これは、斯ういふ風にして最も重要な國民諸階級を代表せしめる爲めである。特に所謂労働者の階級が缺けてゐることは甚だ特色の存する點である！——苦情の對象たる物價變動の程度に就いては、就中次

of certayne ordinary complaints of diuers of our countrymen in these our days, A. D. 1581, with an introduction by Frederick D. Matthew, edited by Frederick J. Furnivall. London 1876. b) A discourse of the common weal of this realm of England. First printed in 1581 and commonly attributed to W. S. Edited from the MSS. by the late Elizabeth Lamond. Cambridge at the University Press. 1893. この中(a)は、レイモンド嬢の述べてゐる如く(同女複製版序言三二頁参照)、千五百八十一年の刊本から複製されたもので、ロツシャー引用の源泉たるスミス・イーデン・ヤング・ヤコブの諸著に引くところと、丁数が嚴密に一致してゐるから、私は便宜上この版を参照して、ロツシャーの引用を確めた。(b)はラムバード[Lambarde]の手記に據つたもので、その原稿丁数は、茲にロツシャーが引用するところとは、一致してゐない。なほブレンタノ及びレーザ-主幹の『内外古今經濟學叢書』(Sammlung älterer und neuerer staatswissenschaftlicher Schriften des In- und Auslandes.) 第五冊には、次の標題の下に本書の獨譯が收められてゐる。 William Stafford's Drei Gespräche über die in der Bevölkerung verbreiteten Klagen, herausgegeben von Emanuel Leser. Leipzig 1895.]

1) 對話の形式は、戲曲的な當時にあつては、極めて好まれてゐた。私は、有名なライセスター講談書『學者とジェントルマンと法律家との間に於ける一對話』(A dialogue between a scholar, gentleman and lawyer. 1584.)を想ひ起す。

の點が注目されてゐる。十六年前に二百マーク【千六百六十三年チャールズ二世に依つて發行された蘇國銀貨】即ち百三十三磅六志八片かゝつたと同じくらゐ立派な家を維持するに、今日(即ち千五百八十一年)では二百磅かゝる(五丁)帽子一個は、當時十三片かゝつたが、今は二志六片である。靴一足は、當時六片で今は少くとも十二片、馬に蹄鐵を打つには、當時六片かゝつたが今は十乃至十二片かゝる(二一丁)。三十年前には、最良の鷲鳥または一頭の乳豚が四片で獲られたが、唯今は十二片出してやつと手にはいる。當時、好い鬮鶏は一羽三乃至四片、雛鶏は一羽一片、牝鶏は一羽二片かゝつたが、今は二倍乃至三倍もする。同様に、鬮羊や牝牛の價格も騰貴した(二四丁)。

土地貴族の不平は、他の大抵の階級のやうに、土地價格を物價騰貴と同率に糶上げるこゝとができない、といふ事情に關聯してゐる。成る程彼の地代は、先祖のそれよりは幾分高くなつてゐる。併し家計費が遙かに高い額に達してゐる。彼が、その原因として、長期間殊に數代に互つて小作契約を締結するといふ、英吉利に普通行はれてゐた習慣を指摘してゐるは、當を得てゐる。同じ階級に屬する多くの仲間はその爲めに、故郷の邸を棄て、倫敦に來り、斷然決心して宮廷の近くに借家せざるを得なくなつた。以前には十人に及

ぶジェントルマン (Gentleman) 等を己が邸内に養ひ、而もその上毎日二十人乃至二十四人の人々を賓客として饗應するを常とした人々であつたのに。彼等にして田舎の生活を続けやうと思ふものは、小作の満期によつて自分の手に戻つて来た土地を、自ら管理しなければならぬ。羊その他の家畜を以てこれを耕すために、更に他人の所有地までも借りなければならぬ。凡そ他の渡世方法は、貴族に對しては事實上禁ぜられてゐるも同然である〔五丁〕。——ところで農業に關する地主たちのこの言ひ草に對しては、小作人は大いに抗議せざるを得ない。地代はこれによつて法外に騰貴した筈である。が特に彼が不平を言ふのは、多數のエンクロージャーに就いてある¹⁾。その結果、牧場のお蔭で鋤は放擲された。斯くて周圍六哩の私の地方では、去年中に一打以上の鋤が使はれなくなり、嘗て三十人以上も暮しを立てゝゐた處に、今や家畜を持つた一人の人間が住んで居て、總てのものを一人で持つてゐる。これこそ最近の不安の主たる原因なのであつた。といふのは、エンクロージャーの爲めにパンを失つて徒食してゐる多數の人々は、今より悪いことは來る道理がないので、變革を希

1) ヒュームの適切な記述に従へば、エンクロージャーのこの増加は、本來全く、舊采邑の小作農民群減少と關聯してゐる。

ふに至るから。現時の困難全體の最も大きな原因は、諸の牧羊場である。それは、從來各種の生計資料を廉い價格で獲る手段であつた小作地を、排除する。バター・チーズ・麥芽穀物を充分に生産する爲めには、¹⁾、嘗に羊のみならず、十分多數の牡牛・牝牛・豚その他の家畜をも飼ふ方が却つてよい筈であるのに、今日では、羊！羊！以外には何も聞えない〔三丁〕。——ところが商人は勿論考へる。今日唯今及びこの二十年間全體ぐらゐ、有り餘る程澤山の穀物や家畜を見た驗めしは、未だ嘗てない、と。すると、これから正しい結論が地主によつて抽出される。エンクロージャーは、殆んど、物價騰貴の原因とはなり得ない。何はさておき、少くとも家畜騰貴の原因とはなり得ない筈である。何となれば、抑、エンクロージャーは、程牧畜を促進するものは、この世にないから〔四丁〕。——帽子製造業者は、勞銀の騰貴に苦情をいふ。自分は、勞働者たちに

1) 因に、これは甚だよく議られてゐることであるが、英吉利の中流階級は、農耕を行ふ者も工業を營む者も、物價大激變の間に、その助けを借りて、始めて本當に、根柢を固めたものである。即ち、一方では職人を、他方では地主と債權者とを犠牲にして。ハリソン『英國記』隨所、イーデン『貧民の狀態』第一卷一一九頁以下、ヤコブ『歴史的研究』第二卷第二十章參照。従つて中流階級の諸不平は、主として次の事情、即ち凡ゆる利益は當然のこととするが、凡ゆる損失には聲高く苦情を唱へるといふ、大抵の人間の通弊に、歸せられねばならぬ。

對し、従前に較べて毎日二片も餘計支拂はねばならぬ。而もこれを以てしても、尙ほ勞働者たちは、やつと生計を維持することができに過ぎないと。手工業者たちも、貴人等が家畜賃借人になつて以來、苦境に陥つてゐる。そこで、總ての工業者は、自分の徒弟や助手たちを極端に制限せざるを得ない。その結果は、從來非常に富んで居り人口も稠密であつた諸都市が貧乏となり人口も少くならざるを得ない。最近の諸不安は、これとも關聯してゐる〔三丁〕。——この諸都市の衰微は、(尤も倫敦は例外であるが)商人によつて裏書きされる。彼は更に附言していふ。一般的物價騰貴は、外國品にも及んだ。即ち今日では、絹も葡萄酒も油も香料も、つい二三年前より三分の一以上も餘計かゝるに至つた〔四丁〕と。——最後に神學博士は、この國の人々を互ひに敵視せしめつゝある宗教上の大分裂を以て、この時代病目錄を完結させる〔九—一〇丁〕。次いで彼は考へる。假令百姓がその生産物價格を切り下げ、地主がその土地を昔の標準で賃貸し、各人夫々その範圍に於て、斯うせざるを得なくなつたとしても、物價騰貴を無くすることができるかどうか、疑問である。そのときは、多分、外國品の價格も下るであらう。今、外國人が例へば天鵝絨一ヤールを二十乃至二十二志で賣り、然る後この貨幣を一トツドの羊毛と引代へに譲り渡し

てゐるとする。然らば、彼等にして依然一トツドの羊毛を一マークで手に入れ得る限り、恐らく彼等は喜んで、天鵝絨を一マークで我々に引渡すであらう〔一五丁〕。結局に於て博士は、商品の一般的過剰と並存する商品の一般的騰貴を説明するに、貿易の結果國內に流入した貨幣量の増加を以てするのである〔四二—四五丁〕¹⁾。なほ序でに、穀物と同じく羊毛をも廉價たらしむべき方策が述べられてゐるが、それは、穀物輸出禁止の遣り方に従つて、原毛の輸出をも全然禁止するか、或は少くとも現在より高い關稅を以てこれを困難たらしめるにあつた〔四四、六八丁〕²⁾。

1) ジェイムス・スミスの明確な保證に従ふ【『羊毛考』第一卷八〇頁】。

2) 我々の見解に甚だ近いやうに思はれる、かの説明の功績は、その時代に於ける新しさと珍しさとの程度に鑑みれば、最もよく判斷することができる。英吉利の比較的教養ある階級が、物價激變の原因に就いて、どう判斷してゐたかは、唯今見たところである。確かに一番苦痛に悩んでゐた庶民は、往々にして、物價騰貴を以て、僧院領の廢止に歸した。パーシー『古代詩歌の遺跡』(Percy: Reliques of ancient poetry.) 第四版第二卷二九六頁參照。西班牙では、工業家の貪慾こそ總ての責を負ふべきものであるとするに於ては、政府も議會も相一致してゐた。この理由に據り、穀物・家畜・皮革・絹その他諸商品の輸出は禁止され(千五百五十年乃至千五百六十年の交)、進んでは物價を安くするために、卸賣商人と消費者との仲介的位地に立つ小賣商業を、絶滅することまで試みられた。(レオポルド・ランケ『諸侯と諸國民』Leop. Ranke: Fürsten und Völker. 第一卷四〇〇頁以下【譯者は本書を見ることのできなかつた。】) 獨逸では、貨幣價格の

分量である。彼は、この最後の原因を、東印度行海路の發見・西班牙人の亞米利加征服・佛蘭西商業の興隆・後に貨幣を持つて再び歸國する佛蘭西労働者の多數なる移住・リオン銀行の創立その他から説明しやうと試みる。併し兎に角、増加した金銀の分量を以て一般的物價騰貴の一因とする（三三頁を見よ）に至つては、彼を以て嚆矢とするといふ點——その點は、明確に保證することができる。【ボダンの『共和國』は、千五百七十六年始めて佛文で出版され、後千五百八十六年著者自身によつて拉丁文に翻譯された。而して千五百七十六年佛文第一版は見ることができなかつたが、その第二版（千五百七十七年）九二六頁に於て、既に彼は『逆説批評』に言及してゐるから、従つてロツシャーの推定法に従へば、『逆説批評』の出版年は少くとも千五百七十七年以前と考へねばならない。エルスター（第四版）・バルグレーヴ（第二版）・セー（舊版）の各辭典は、何れもこれが刊行年を千五百六十八年としてゐる。然らば『極端なる物價騰貴』が『逆説批評』の最初の版であるとする見解は、訂正されねばならないであらう。尙ほ『逆説批評』は、Monroe: Early economic thought, selections from economic literature prior to Adam Smith. Cambridge 1924. pp. 121 ff. に英譯されてゐる。『今日見るが如き物價騰貴は、大約四乃至五個の原因に基くものと思ふ。その中主要なる而も殆んど唯一とも言ふべき原因は、（今日まで誰も言及したものはないが、）金銀の過剰これである。……』（英譯一七七頁）。】

下落が始つた時、大きな而も屢々聯合してゐる諸商館の事實上の獨占こそその原因である、と信ぜられた。例へば、彼等は、葡萄牙王に對し、香料等の代として王の要求するところ以上を支拂つた。これに對して王は唯だ、他の獨逸人にはもつと掛値をする、と約束しなければならなかつただけである！　そこで、小商人たちの競争を強める爲め、千五百二十二年帝國議會は、五萬グルデン以上の資本を擁する凡ゆる會社を禁止した。——レオボルド・ランケ『宗教改革時代の獨逸史』（Geschichte Deutschlands im Zeitalter der Reformation.）第二卷四二頁以下及び一三四頁以下【『全集』第二版ライプツヒヒ一八七三——一八九〇年刊、第三卷三〇頁以下及び八六頁以下】。——これに反して、佛蘭西の理論家ジャン・ボダン【Jean Bodin】は、物價大激動の眞因を、正當に理解してゐた。即ち彼は、『慈善並びにその矯正に關するマレストロアの逆説批評』（Responsio ad paradoxa Malestretti de caritate rerum eiusque remediis.）一編を執筆し、——而もこれは多分千五百八十四年以前に屬する。といふのは、この年ボダンは名著『共和國』（De republica.）を刊行し、書中既に、我々が茲に問題としてゐる著述に言及してゐる。同書第六編一〇二八頁（第七版）、千五百七十四年に公刊され、最近サンプル及びダンジョン共編『佛蘭西史稀觀書文庫』（Cimbre et Danjon: Archives curieuses de l'histoire de France.）（第一輯第六卷）中に再刻された著書『今日佛蘭西に起れる極端なる物價騰貴の諸原因に關する論策』（Discours sur les causes de l'extrême cherté qui est aujourd'hui en France.）は、『逆説批評』の最初の（尤も多くの點で不完全なものではあるが）版と見做され得る——その冒頭に於てボダンは、恰も商品が前世紀に比して高くならなかつたかの如くに言ふマレストロアの議論を、反駁してゐる。騰貴の原因としてボダンが擧げてゐる點は、次の五ヶ條である。曰く、商工業者たちの多くの獨占。曰く、西班牙及び伊太利への多額な輸出。曰く、自己の好む物に對しては輿論に於ても比較的高い價値を賦與せしめやうとする、諸侯たちの我儘。曰く、非常に募つた奢侈。併し就中特に強調してゐるのは、甚しく激増した金銀の

第三章 英吉利植民帝國の建設

22
アダム・スミス¹⁾が、*auri sacra fames*【神聖なる黄金慾】こそ、オヘダ【Ojeda】やバルボア【Balboa】やコルテス【Cortes】等を西領亞米利加征服に導いた唯一の動機であつたと説いてゐるのは、確かに誇張である。蓋し當時にあつては、殆んど總ての大理想は皆この企てに共働し、覺醒しつゝあつたマーカンテイル・システムの黄金慾以外にも、なほ著しいものとしては、當時に於ける西班牙加特力教主義の騎士的敬虔なる基督教々化熱があつた²⁾。況や、スミスが同じ個所で、『亞米利加に植民を試みた他の總ての歐羅巴諸國の最初の冒険家たちも、同様の幻想に驅られたものである』と論ずることは、遙かに許し難いところである。即ちこの議論は、最初の英吉利植民地經營の後援者や指導者たちが自ら執筆した諸資料に關する、完全な無智を、證明してゐる。この議論が説明せられ得る根

1) 『國富論』第四編第七章第一部【第二卷一五四、一五七頁】。

2) 拙稿『植民地制度研究』(Untersuchungen über das Kolonialwesen. Im Archiv der politischen Oekonomie [und Polizeiwissenschaft.] Neue Folge. VI.) 第一論文、三〇頁を見よ。

據は唯だ次の點だけに限られてゐる。抑、最
 始の英吉利植民地立法例中には、兎に角、西班
 牙流の取扱法に類似した點が澤山あつた。
 例へば、所謂所有者植民地 [Eigentümerkolon-
 ien] に原則として與へられた特許狀中には、
 諸金銀鑛よりの収益の五分の一にあたる徵
 税を、王に於て保留して置くのを常とした¹⁾。
 またサー・ウォータールー [Sir Walter Rale-
 igh] も、有名な論文『大きく、富み且つ美しき
 ギアナ帝國の發見』(The discoverie of the lar-
 ge, rich and beautifull Empire of Guiana.) (ハク
 ルート編第三卷六二七頁以下 [エヴリマン
 版第七卷二七]) の中で、この讚美せられたる
 地方に於ける黄金の富を明かにする爲め、特

1) 因みに、英吉利の植民政策が、抑々の始めから、既に西班牙のそれ
 と如何に甚しく異つてゐたかは、當時最も賢明にして而も最も思慮ある統
 治者の一人たりしヘンリー七世が、千五百二年プリストル商人と葡萄牙航
 海者との一組合に對し、探検旅行計畫の特權を與へた、特許狀に依つて明
 かである。その第二條は、明確に、新發見地には、英吉利の男女が自由に
 移住し得べきこと、及び進んでは、植民地との交通が英吉利臣民に限らる
 べきことを、規定してゐる。(ライマー『英吉利外交文書類聚』 T. Rymer:
 Foedera, [conventiones, litterae et cujuscunque generis acta publica
 inter reges Angliae et alios quosvis imperatores, reges, etc. ab. A. D.
 1101 ad nostra usque tempora habita aut tractata. 1704--1713.] XIII.
 37.) 拙著『研究』第三論文二六六頁(前掲雜誌新輯第七卷) 參照。

【*本章中で屢々引用されるハクルート編書の全題名は、次の如くであ
 る。R. Hakluyt: The principa navigations, voyages, traffiques and

に著しく骨を折つてゐる。惟へらく(六六〇頁 [エヴリ
 版、三四六頁])、『金の山がある處では、商業に適した他の
 諸商品のことを述べる必要はなからう』と。(尤も彼自
 らは、直ぐその後で、ブラジルホルツその他の染料羊毛絹
 護謨胡椒等をギアナの産物として擧げてゐる。)併し斯
 様な見解は、英吉利植民地の建設者たちにあつては、原則
 でなくて例外である。

私は先づ、ラリーの尊敬すべき異母兄サー・ハムフリ
 ギルバート [Sir Humphrey Gilbert] に就いて述べる。彼
 は、その著『カタヤア及び東印度に至る西北航路【の可
 能】を證明すべく執筆せる一論策』(A discourse written
 to prove a passage by the Northwest to Cathaia and the
 East Indies) の第十章で、この航路の發見から生ずべき
 諸利益を畫いてゐる¹⁾。そこには、先づ第一に、旅程短縮

discoveries of the English nation, made by sea or overland to the
 remote and farthest distant quarters of the earth at any time within
 the compasse of these 1600 yeares. 1600. —譯者は、ロツシャー引用の版
 本を利用し得ない爲め、Everyman's library 所收の版本を以て、ロツシ
 ヤーの引用を確めた。本文中 [エヴリマンズ・ライブラリー版第……卷……
 頁] として挿入したもの即ちこれである。]

1) ハクルート編『英吉利國民の航海・航海術・航路及び發見』(千六百
 年) 第三卷二二頁以下 [エヴリマンズ・ライブラリー版第五卷九二——三
 一頁]。

によつて、印度その他文明並びに未開の國々に於ける商品、従つて、特に金、銀、寶石、絹、香料その他類似の高價品を、西班牙人や葡萄牙人たちより廉く買ふ可能性が存する（第一乃至第三號及び第五號）。併し次には、國內の公安を害し貧窮の爲めに罪惡を犯し屢、絞首に處せられる英吉利の貧民たちを、新發見地に移住せしめるといふ意見が示される（第四號）¹⁾。その上更に、歐羅巴の各強國から獨立してゐる筈の、これら諸地方に對する、英吉利製絨工業の販賣高激増が、期待されてゐる（第六號）。斯くてまた、インド人の尙ぶ各種玩具等の製造も、貧民兒童の使用に利用し得べく、それは更に、浮浪人及び無爲の徒を減少せしめるであらう（第八號）。而もそれは、最後に、國家に對して何等の負擔をも課することなくして、海軍力の増加をも生ぜしめる（第七號）。そして總てこれらのことは、たゞ一つの基督教國と雖も、正當な苦情を起し得ないやうな方法で、行はれるのである！

同じギルバートは、ニューファウンドランドに關する卓拔な記述の

中で¹⁾、單なる黄金探檢家には最も縁遠いを常としてゐた諸點に對し、特別に注意を拂つてゐる。即ち、彼は、その島の諸良港に論を始め、進んでその地の氣候が居住に適してゐること、並に植民者たちが先住民の側から被るべき萬一の危險を、證明すべく努めてゐる。人間の食糧に供せられたり商業の經營に用られる諸生産物の中でも、特に彼は水の幸を擧げ、更に樹脂、蠟、タール、粗製炭酸加里、櫛、實、床板の如き木性品、最後には、鞣皮、毛皮類、大麻、亞麻、金屬を擧げてゐる。土地は特に牧畜に適してゐるといふ。「要するに」と彼は不機嫌に呼ぶ、「かの地には、人間の役に立つ諸産物が有り餘る程、澤山與へられてゐるのに、人間はその五分の一も利用しなかつたのだ。然るにも拘らず、自然が勿體ない程人間の勞苦を引受けて呉れる、かの遠隔の地に居住を求める爲めに、人間らしく若干の考慮を拂ふこともせず、好き好んで、許されざる物によつて生活し、人でぎつしり詰つたこの國の中で、非常に慘めな暮し方をして死んで行く、多數の我が同胞たちの過誤と愚鈍とに至つては、誠に以て困つたものである」【エングスリ

1) ハクルート、第三卷一五二頁以下。【エグリマンズ・ライブラリー版第六卷一九頁以下(?) A brief relation of the new found lands, and the commodities thereof.】。その編輯は、ギルバートの一友人に依つてなされてゐる。

1) 上流階級にあつても、過剰人口は甚だ劇しく感ぜられてゐた。即ち世人は、千五百七十一年以來の多くの不安を以て、監督のない上流家庭の多數青年子弟に歸してゐる。ヒューム【『英吉利史』(History of England from the invasion of Julius Caesar to the revolution in 1688. Reprint of the ed. of 1786. London etc. 3 vols.) 第二卷】第四十章參照。

【ライブラリー版】と。終りに彼は、ニューファウンドランドの工業に與へらるべき製造原料に就いて語り、主として鐵、鉛、銅の存在を擧げてゐる。尙ほ愈、最後に至つて、彼は若干の銀の形跡に就いても語つてゐるが、併しその跡は最早尋ねることができなかつた¹⁾。

マルティン・フロビッシャー【Martin Frobisher】が西北航路發見の旅を企てたとき（千五百七十六年乃至七十八年）、リチャード・ハクルートは、植民地の建設に際し特に留意すべき諸點に關する、簡単な示教を、フロビッシャーに同伴した數人のジェントルマンに與へて、餞とした²⁾。ところで、これに就いては、すぐ前に述べた著述に關すると、全く同じことが適用される。眼光紙背に徹して理解するものは、ミダス流の金銀崇拜者たちより遙るかに周到且つ明瞭な國富觀が、その根柢に横はつてゐるのを見

1) この根據ある意見に比すれば、千五百七十一年の議會でギルバートが勅許獨占權を辯護した熱情は、勿論一個の奇怪なる對照をなしてゐる。

2) ハクルート、第三卷四五頁以下【Notes framed by M. Richard Hakluyt of the middle Temple Esquire, given to certain Gentlemen that went with Martin Frobisher in his Northwest discoverie, for their directions : and not unfit to be committed to print, considering the same may stirre up considerations of these and of such other things, not unmeet in such new voyages as may be attempted hereafter. エグリマンズ・ライブラリー版、第五卷一六五——七〇頁】。

出すであらう。——茲でも、航海に便利な位置——従つて、でき得べくんば舟楫の便ある大河の河口に位する島の上、又は少くとも斯ういふ河口近くの岬に在る穩かな守るに易い港——を選ぶことが、何よりしつかりと教へ込まれてゐる。斯ふすれば、四隣を相手とする輸出入は、常に最も安全である。假令港の直ぐ近くにゐる住民たちが絶えず惡意を持ち、陸地の方面から植民者等を封鎖し續ける時でさへ、比較的離れた諸地方に對しては貿易上の集散地となり、暫時にして、可成りの地域をも支配し得るに至るであらう。茲では常に航海が主眼で、而もそれは戰時にもなほ且つ役立ち得るものである。——植民は更に溫和な氣候の處で、而も淡水と燃料と生活資料とを充分に持つ場所で行はれねばならない。唯だ金銀銅乃至水銀の鑛山が存する時に限り、上記必要品の不足は、航行によつて充分に補充することができ（これ、ハクルートが本書中貴金屬について述べてゐる唯一の個所である！）非軍事的【in civil sort】植民地の絶對に必要缺く可らざる條件としては、適當なる建築材料が指摘されてゐる。次に、土人たちに對しては、最大の仁慈と親切とを施さなければならぬ。殊に執念深くすることを禁ずる。斯うすれば、我々は、常にその土地の生産物を識り得るのみならず、これが外國への販賣をも自己の手に收める

ことができる。植民者たち自身の生産は徹頭徹尾、氣候と地味とに従つて行はなければならぬ。ハクルートは、特に海鹽、葡萄酒と乾葡萄、橄欖、洋紅、兩品ともに英吉利の製絨工業で使はれる。熱帶果物、甘蔗、皮革、木性品その他を擧げてゐる。『然らば、我々は最早、西班牙や佛蘭西やバルト海沿岸諸國に頼る必要はない。最早今日のやうに、我々の財産を消費し、疑はしい友邦を過度に富ます必要はなくなる。否、我々の需要品は、我々自身の産業と彼の地の財寶とによつて、現在の價格の半額で買入れ得るに至るであらう。』【原文(エンスライブラリー版一六八頁)】加之、假令植民が單一の都市に限られねばならないことがあつても、なほこれによつて英吉利の商業と航海と國富とを不斷に増加し、その上、母國に宗教上の不安乃至内亂が起つた際、非常に役立つべき安全地帯をも、獲ることができらう。

これと非常によく似た見解は、サー・ジョージ・ペッカム【Sir George Peckham】の次の著書に於て展開されてゐる。『かの勇敢にして尊敬すべきジェントルマン、サー・ハムフリー・ギルバートにより英吉利王權下に持ち來されたる新發見地の、最近の發見及び占領に關する眞正の報告』【A true report of the late discoveries, and possession taken in the right of the

crowne of England of the newfound lands by that valiant and worthy Gentleman, Sir Humphrey Gilbert.】本書第四章には、英吉利が斯るか植民地探檢の旅によつて獲得する筈の諸利益が、描き出されてゐる。その第一に位するものは、例の如く、『帝國の最大の寶、攻防の中堅』即ち、『この上もなく威武堂々たる陛下の艦隊』に對し直ぐにも助力し得る準備を整へてゐる多數船舶と乗組員とである。これと同時に主として注目されてゐるのは、北亞米利加の漁業であるが、それは英吉利人が現場に確固たる足場を持たなかつた爲め、從來は充分に發達し得なかつたものである。次に推稱されてゐるのは、英吉利の小間物衣類その他の製造業者等がインド人たちの中に見出すべき販路である。これは、勞働不足(原毛の甚しい輸出増加に基く)の爲め衰微した英吉利町村の總てを復興し得るであらう。多數の無職者は必ずやこれによつて職を與へらるべく、多數の少年は怠惰から救はれるであらう。加之、多くの婦人たちは、亞米利加が極めて豊富に生産する革や麻や棉花や染料の加工に使用せられ得るであらうし、彼等の夫たちは、眞珠採取、鑛山勞働及び農業、鯨及び鯨の漁獲、粗製木製品の製作等に於て職を

1) ハクルート、第三卷一六五頁以下【エヴリマンズ・ライブラリー版第六卷四二—七八頁】。

見出す希望を與へられるであらう。最後に著者は、西北航路の可能性及びこれによつて短縮され而も安く且つ安全となるべき對極東交通についても、注意を喚起してゐる。茲で甚だ特徴的なことには、彼もまた、發見や征服が西班牙葡萄牙に對して與へる主たる利益を、海上權の擴張に見出してゐるやうに思はれる。

——第五章では、凡そ植民會社は、貴族やジェントルマン等のそれと、商人たちのそれと、二つの異つたものを組織し得ると、ベカムは前提し、さてこれによつて彼等の私的利益も促進されざるを得ないとの理由から、二者の真相を示さうと試みてゐる。土人たちにとつても植民は大きな利益となる。その主たる利益は、基督教への改宗によるものであるが、更に經濟上及び社會上の文明並びに野蠻なる隣人たちに對する保護によるものも、これに屬する(第六章)。

右に直ちに續くものは、クリストファー・カーライル(Christopher Carlsle)大尉が(千五百八十三年四月)、對米貿易から期待し得べき諸利益と他の既存商業部門のそれとの間に行つた、興味ある比較これである¹⁾。『亞米利加中最も此方側にある地方に向つて、企てられたる航海に關する簡略なる論策』(A briefe and

1) ハクルート、第三卷一八二頁以下【エヴリマンズ・ライブラリー版 第六卷八〇—九一頁】。

summary discourse upon the intended voyage to the hithermost parts of America.)——この小著の目的は、カーライルの企てに金を出した商人、就中露西亞會社【Moscovian company】をして、右から左へと利益が入らなくとも満足せしめやうとするにあつた。對露貿易對土貿易等よりも勝つて、對米貿易に歸せらるべき第一の特長は、航海上にある。即ち航海は、比較的短時日に、而も唯一の風に乗じて、一年中何時でもできる。また全く公海のみを通過し、その際他國(例へばズンド海峽に於ける丁扶地中海に於ける諸野蠻國の如き)や不安全なる海岸からの危険を冒すこともない。この交通上最良の位置を占めてゐる英蘭土・愛蘭土の諸地方は、諸の良港に富む。最後になほ、植民者たちは、自己の信仰を寸毫も棄てる必要がない。亞米利加では、大部分の營業資金を皇帝貴族乃至役人たちへの贈物に使ふこと、恰も露西亞に於けるが如くにする必要なく、費用のかゝる使節派遣も要らないし、和蘭人の對抗を惧れる必要もない。更にこれに加ふるに、對米貿易は、時が経てば、對露貿易どころでなく、もつと遙かに擴大し得る。北亞米利加の諸生産物は、露西亞のそれを、南亞米利加の諸生産物は、西班牙・伊太利のそれを、補ひ得て尙ほ餘りあるであらう。況や、英吉利は、歐羅巴の隣邦諸國と競争敵對の間柄となることを最も怖れなければならぬが、

遠方の諸國に對する場合は最早それ程でなく、自國民の植民地に就いては毫もこの怖れがないのであるから、這般の事情は殊に顯著となる。更にこれが利益として、カーライルも英吉利製造品の大販路と比較的穩かな東印度航路の發見とに對する期待を述べてゐる。彼は、本書に於て、過剩人口の悲惨な状態を、鮮明な色彩を以つて描き出してゐる。英吉利は、『長い平和と幸福な健康と天與の豊饒と』【エヴリマンズ・ライ】を以てしながら、過剩人口に陥つた。而もこれは、道德的にも最惡の結果を惹起すに違ひない。これを救ふ爲めに植民を奨勵することは、基督教徒の一義務である、と。反對に筆者は、鑛物の埋藏に就いては、故らに沈黙してゐる。これについては當分何ら確實なことが判らない。さういふ希望を刺戟することに就いては、從來餘り多くの濫用が行はれて來たから、これに對し無條件的な疑惑を懐いてゐるものが多いであらう。後世非常に愛好された、貿易均衡の順逆に關する理論は、この書に於ても、上掲の諸著に於ても、見出されない。

併し、凡そこれに屬する諸述作中最も注目し値ひするものは、ジェイムス一世の御代一匿名者によつて執筆された、次の著書である。——『ヴァージニア案』 Virginia Verger, or a discourse shewing the benefits which may grow to this kingdom from American-English

plantations, and specially those of Virginia and Summer Islands.)¹⁾ ——若し我々にして聖書の句の驚くべき、殆んど堪え難い程の堆積——これを以てヴァージニア拓殖に對する英吉利國民の權利を證明する積りらしい——を切り抜け、本書を根本的に究明するときは、——それでも矢張り無味乾燥な清教徒的説教臭を脱しないが、——結局我々は、國富の本質に關する最も立派な意見に到達する。著者は、凡そ金銀坑なき植民地を輕々に付する輩を非難してゐるが、それは單に道德的見地からするのみではない、即ち單に、西班牙の鐵がインド人の金銀を奪ひ、英吉利の鐵が西班牙人の金

1) サミュエル・パークスの大著『巡禮行』(千六百二十五年) (Samuel Purchas: [Hakluytus Posthumus, or Purchas his] pilgrimes, [contayning a history of the world in sea voyages and lande travells by Englishmen and others.] 1625.) 第四卷一八〇九頁以下【一九〇五——一七年グラスゴー版、第十九卷二一五頁以下】に再刻。これに比せらるべきものは、千五百八十七年に著はされたトマス・ヘリオット Thomas Hariot】の次の著書である、『ヴァージニアの新發見地に關する簡單にして眞正なる報告』(A briefe and true report of the new found land of Virginia: of the commodities there found, and to be raised, as well merchantable as others.) (ハクルート編第三卷二六六頁以下【エヴリマンズ・ライブラリー版、第六卷、一六四——一八六頁】)。彼ヘリオットは、當時に於ける一流の數學者の一人であつたが、千五百八十五年ラーフ・レイン [Ralph Lane] の指揮の下に熱心にヴァージニア拓殖を試みた遠征隊中に、ラーンに依つて差し加へられた。彼の任務は、この地を學問的に研

銀を奪取することができるといふ爲めばかりでなく、實に經濟的關係からも非難するのである。「金銀が富を獨占することを許したものは誰人か。……それは最も賢い顧問〔聖書〕に尋ねさへすればよい。アブラハムの約束の國イスラエルの相續財産天國の寫し地上の樂園たりしカナンの地、その地の富は一體何であつたか。それは、エシヨルの葡萄、ギレアドの香膏、レバノン近くの香柏の森、牧草に充ちたエリコの谷、天の露、土地の豐饒氣候の穩和（金砂に非ずして）乳と蜜との流れ（人世の必需品と娛樂品とであつて貪慾の底知れぬ渦卷ではない）二つ

究するにあつた。そして彼は、その一年に亙る實地研究の結果を、前掲著書——これは確かに最初の統計的通覽の一つである——の中で、立派に公表してゐる。その見方は、ベカム・カーライル・ハクルート等に於けると本質上同一で、ヴァージニアの諸生産物を甚だ完全に敘述して居り、第一には、商業に適してゐるもの、次には、植民者たちの食用となり得るもの、最後には、建築材料等を擧げ、土人並びに健康上より見たる氣候等に關する卓抜な記述を以て結論としてゐる。かの實際上の結果としては單に歐羅巴に對する煙草の紹介に終つた企圖の失敗は、ヘリオットに従へば、植民者たちの無智と怠惰、並びに一部はまた、盲的な黃金慾に、歸せられる。總てこれらの點に於て、彼の報告は、内容上少しも『ヴァージニア案内』に對立するものではないが、それだけにまた、論調は全く反對で、前者は極度に冷靜且つ嚴密に學問的であるが、後者は空想的且つ清教徒的=宗教的である。エリザベス=シェイクスピア時代と破壊的な清教徒的=革命的時期との相違を、これ程明瞭に特以付けるものはないであらう。

の海の邊にある穩和な土地、その他ヴァージニアが持つてゐると同じもの——唯だ多くの點に於て優つてゐるだけであるが——ではなかつたか。抑、こんな小さな土地の上に於て、グビデがかの地に點檢した人數の百分の一を、自然の埋藏物を以て養つた産金國があつたであらうか。……凡そ人間は、死ぬべき神最良の土地の最良の部分有る。佛蘭西、白耳義、ロンバルディアその他歐羅巴で最も富んでゐる諸地方は、抑、注目し値ひすべき金銀坑を持つてゐるか。往昔歐羅巴中最も鑛山に富んでゐた地方であり、新世界の鑛山によつて富有を致した、西班牙の事物を、甚だ澤山見物して來た、我が最近の旅人たちに聞け、抑、英吉利國民は、西班牙國民を羨み、乃至は自國民の生活と幸福とより西班牙人のそれを佳しとする、必要があるかどうかと。彼等の昔の諸鑛山は、彼等を羅馬やカルタゴの奴隸とした。そして彼等の鑛山と素質とが今何をしてゐるかは、知る人ぞ知る。』

【二九〇五—三七年版】 著者は、西班牙には金銀が流入したにも拘らず、同國は他の歐羅巴諸國より少量しか貴金屬を持たぬこと、及びその流通が主として銅を以て營まれてゐることを注意し、さて論ずるやう、英吉利では、西班牙の酒や西班牙の油が、西班牙自體より多

く消費されてゐる。『インド人たちの金明水銀明水は、彼等自身の爲めに流れずして、西班牙の水槽に注ぐ。併しこの水槽は、倫敦の水屋中のそれと同じく、底にある排水管が何時も開いてゐて、無数の他の水槽をしてこれよりもつと多くの水を湛へしめるやうになつてゐる。更に、坑夫たちは、暗黒の寶を光明の中に運び出し、他人をして天國を夢みさせる爲め、自分は地獄の戸口で生活する（これが抑、生活と呼び得べくんば）ことによつて、他人の爲めに絶えず精根をつくし、様々な死に様に曝されてゐる、不幸の上もない奴隷ではないか。極樂には決して礦物が無い。そしてアダムもノアも、共に地上の支配者であつたが、鑛山労働には従事せず、ヴァージニアが英吉利を誘ふと同じ幸福な労働に、即ち酒造園藝農耕に、従事してゐたのである』【一九〇七—一九〇九】。なほ特に想ひ起すべきことは、東洋の絹製品綿製品香料が西洋の鑛山収益を悉く呑み込むこと、及び亞米利加の恐るべき人口減少は正にその金銀財寶に歸せらるべきものたること、これである。そこで彼は語を續ける。『Colony【拓殖地】や plantation【植民地】といふ名前からして既に、合理的な栽培、即ち收穫を期待し得る前に植えること、といふ觀念を含んでゐる。【……】西班牙が亞米利加で富んだのも、主として自國の倉庫に流れ込んだこの地の諸商品に依つて

であつた。而もブラジルや乃至は、これ程多數の富める葡萄牙人や西班牙人等の住んでゐる總ての島々では、抑、どんな鑛山が採掘されてゐるか。その生薑、砂糖、煙草、鞣皮その他の諸商品は、（私は敢て大膽に議論するが、）鑛山が現在又は過去に與へた利益より遙かに多くの利益を、世界中の西班牙臣民全體に與へたのである。』【一九〇〇—一九〇七—一九〇九】。植民による人口減少の對策に對しては、著者は西班牙の例を以て反對し、過剰人口を豫防する方策こそ、寧ろ遙かに必要であるとする。ヴァージニア及びこれに關聯する英吉利の前途に就いての卓拔な敘述に於て、この書物が上掲の諸著と異なるところは、唯だ、より完全であるといふ點、進んでは歴史的古典的な餘韻に富んでゐるといふ點のみに過ぎない。

それはさて置き、我々にして若し當時の英吉利植民全體の天才的中心合衆國の精神上的の祖先たるサーウラターラー【Sir Walter Raleigh】（一五五二年乃至一六一八年）に對し、少くとも若干の言葉を以て言及しないならば、本章は不完全となるであらう¹⁾。近世紀の發達した分業を最早許さ

1) 私は八卷より成るオックスフォード版『全集』——千八百二十九年——を利用する。【本譯文に於ては、便宜上千七百五十一年倫敦版『全集』(Works, political, commercial, and philosophical; together with

ないやうな萬藝に通じた第一流の天才、加之抑、これに匹敵するものは殆んど無いやうな精神上の創造力と元氣と彈撥力とを持つた人物——ラリーは斯様な人物で、事情の變化するにつれ、提督としても、代議士としても、學者としても、將たまた廷臣や植民や詩人としても、往くとして可ならざるはなかつた。我々は、コルネリウス・ネ波斯【Cornelius Nepos】が、アルキビアデス【Alcibiades】に關する有名な性格描寫中で述べたやうな、讚辭の多くのものを、彼の上に移すことができやう。この天分豊かな生涯につき、何か完全な描寫をなすことは、我々の目的を餘りに遠ざかることとなるであらう。それ故、私はたゞ、經濟學者としてのラリー独自の姿を、上述の植民地探検家たちから區別してゐる若干の特色だけを、物語るに止めやう。

茲に於てか第一に、かの注目に値する次の著作が現れる、『和蘭その他の諸國民との貿易通商に關する諸考察』(Observations touching trade and commerce with the Hollander and other nations. [presented to King James,

his letters and poems. With a new account of his life. London 1751. 2 vols.) を参照した。本章に引用されてゐるラリーの諸著述中、『世界史』だけは、この全集版に収録されてゐない。『エディンバラ・レビュー』第七十一卷に現れた、ラリーの生涯に關する立派な評論を参照。

wherein is proved, that our sea and land commodities serve to enrich and strengthen other - countries against our own.」¹⁾。僅か八つ折版二十三頁に過ぎぬこの著述の目的は、全然實際的で、和蘭が商業上に大をなした原因を發見し、且つ大した困難なくこれを模倣し得る所以を、英吉利國民に示さうとするにある。若し王にして、茲に推唱する諸方策を一括し、これを合理的に實施する意志さへあれば、彼は暫時にして、總ての隣邦諸國にとり、友としては願はしく敵としては惧るべきものとなり、英吉利の貿易は、年々三百萬磅だけ増加されるであらう等。著者が和蘭國民につき主として

1) 『全集』第八卷三五頁以下【一七五一年版、第二卷一〇九頁以下】。本書は、最初千六百三年、次でラリー處刑の直前、再びジェームス一世に建白されたもので(序文)、一般の見解は、これをラリー自らに歸してゐる、——例へばアンダーソン【A. Anderson: An historical and chronological deduction of the origin of commerce, from the earliest accounts. Containing an history of the great commercial interests of the British empire. Carefully revised, corrected and continued to the present time. London 1787-9. 4 vols.】千六百三年の項【第二卷二一六頁】の如きこれである。他方に於てジェイ・スミス『羊毛考』第一卷一四四頁【第二版第一卷一〇〇頁】は、これを以てコツケイン【Cockaigne】といふ名前の倫敦市會議員の書物であると述べてゐる。ラリー自身も後の見解を是認してゐるやうに思はれる。といふのは疑ひもなく確實に彼の著書たる『船舶發明論』(A discourse of the invention of ships, anchors, compass, etc.) (『全集』第八卷三三三頁【一七五一年版第二卷七一頁以下】

嘆賞するところは、彼等が外國生産物を基礎として、巧みに自國の商工業を打建てることを理解してゐる點これである。彼等自らは、極く僅かしか穀物を生産しないが、而もその大都市は大きな倉庫を持ち、英吉利佛蘭西西班牙その他の國々はこゝから高價で供給を受ける。和蘭國民自體は、何時でも穀物を有り餘る程持ち、外國の飢饉毎に富有となる。同様に和蘭は、最大の漁業と最も有力な魚類販賣業とを持つが、この魚類は、英吉利の海で漁獲する他に道がない。佛蘭西は多くの葡萄酒を、西班牙は多くの鹽を、澳太利は多くの木材を生産する。而もこれら總ての商品に就き、最大の手持品、最大の利得を手にするも

に於て、彼はこの著者と呼ぶに、 a gentleman to me unknown; but so far as I can judge he has many things very considerable in that short treatise of his, yea both considerable and praiseworthy. 【未知の一ジェントルマン。併し余の判斷する限り、彼は誠に敬重すべく嘆賞すべき彼の小編に於て、甚だ敬重すべきことを澤山述べてゐる】と言つてゐる。そして恐らくは、忘却されてゐた著書を、新たに切實に想ひ起させる爲めであらう、彼はジェームス一世への第二回目の建白書に添へた題寄中で、本書を以て a book of extraordinary importance for the honour and profit of your majesty and posterity. 【陛下並びに皇統の名譽と利益とにとつて、異常なる重要さを持つ一書】と呼んでゐる。匿名が單なる假面に過ぎなかつたかどうかは、敢て論ずる限りでないが、上述したところに依れば、本書の主たる内容がラリーによつて是認されてゐるものと見做すことは、できるであらう。

のは、和蘭國民である。將に世界商業を独占しやうと脅かしつゝある、この甚しき而も益、その度を増しつゝある優越の原因は、例外なく、國民の勤勉と法律の整備とに存する。これに屬するものとしては、例へば次のものがある。外國人を自國の土地及び民法の下に受入れるにあつて寛大なこと、彼等が享有する通商の自由と關稅が低率なこと、而も莫大な諸課稅品の數量は、その總收益を英吉利の二倍以上とするが故に、彼等の國庫自體は、これによつて何等の損害をも被らない、總て新しい商業部門を、急速に繁榮へと導く目的を以て、完全なる免稅その他の補助を與へること、和蘭運送業の運賃が特別に廉いこと、そこでラリーは考へる英吉利は、これらの諸方策を模倣することにより、忽ちにして和蘭國民を凌駕するに違ひない。蓋し英吉利は、比較にならぬ程より、多くの天恵を享け、和蘭が先づ以て他國から買はざるを得ない諸商品の多くを、自國に産出するから。併し和蘭人は、英吉利の魚族を漁獲するを以て満足せず、更に英吉利輸出品の大部分を、彼等の船に乗せて露西亞に送る。本國で精製されることなく、半ば原料のまま、殆んど例外なく輸出される、英吉利製羅紗を、和蘭人が染めたり仕上げたりするのは、無論のことである。總てかくの如くにして、彼等は、英吉利國民から、多額の貨幣と、下層階級に對する多數の有用な

就職口とを奪ふ。斯くて著者はまた英吉利商人が外國で長期の掛け買をせず、また直ぐ支拂を受けたらばかりに、凡ゆる不利に陥ることをも敢て辭しないのを、眞面目に非難してゐる。——本書中でラリーが英吉利國民を非難してゐる點は、未だ完全に成熟してゐない文化に關する周知の兆候であることは、我々も知つてゐる。この非難は、非難としては根據のないものである。併しそれだけに、我々は喜んで彼に許すに、祖國が他國に後れてゐることを見るのを苦痛とする底の、實際眞面目なる人物を以てするのである。さてこの點に於て國家が採用すべき方策としては、特に次のものが擧げられてゐる。——State Merchant【國家商業部】に屬する一委員會による商業の公營、未精製工業品の輸出禁止、石炭の輸出は許すが唯だ英吉利船のみによること、漁業の獎勵、最後に貨幣價值の引上げ（これに依つて他の國々は、自國の貨幣を保有し、外國の貨幣を誘引し、輸出商品の價格を外國の犠牲に於て引上げるといふ、三大利益を獲たのである。)¹⁾

國民經濟の基礎に關しては、ラリーは三つの階級を區別する。第一は、『自己の勞働によつて生活するもので、……』言はゞ、申命記に於て既に神が保護すべ

1) 下出九六頁を見よ。

く命じてゐた、地上の實る樹である。彼等は蜂蜜を集め、而も殆んど蜜蠟を享樂しない。彼等は非常な勞働を以て土地を鋤き、閑暇安逸の人々に、その穀物の最良の部分と與へる。』次は商人たちで、彼等は海によつて英吉利を富ますこと、恰もかの第一の階級が英吉利を養ふと同様である。最後は Gentry【ジェントルマンの階級】で、『彼等は、凡ゆる獸類に噛み殺される程の低地にも、凡ゆる暴風に引き裂かれる程の高處にも棲まず、……』國內に於ける善き秩序の衛士となる』¹⁾。我々は生産要素に關する後世の學說の粗笨な萌芽を、この分類の中に見落し得ないであらう。——ラリーがまだ貴金屬を、彼の植民仲間より高く評價してゐるらしいことは、既に上述した。そこでまた彼は考へる。世界を脅威しつゝあるフキリップ二世の軍隊は、西班牙の葡萄酒及びオランダ商業の如きによつても、或は、母國に於ける他の如何なる生産業によつ

1) 『政府の所在に就いて』(On the seat of government.)——『全集』第八卷五三九頁。【一七五一年版第二卷三一九——三二〇頁。この一文はラリーの原文では次の如くになつてゐる。『第三の種類は、英吉利のジェントルマン階級である。そして、最も低い土地に住んで、その爲めに凡ゆる獸類の咬傷に遇ふこと、乃至は、最も高い山中に住んで、その爲めに暴風に引き裂かれる危険に曝らされること、この何れをも彼等は執らず、その双方の中間に在る谷々に住み、地上の裁きに關與し、一面に擴つて國內に於ける善き秩序の衛士となる』(三二〇頁)。]

ても、養はれてゐるわけではなく、寧ろ、亞米利加の鑛山によつて養はれてゐる。『總ての歐羅巴諸國民を脅威し不安に陥れるものは、印度の黄金である。それは識者を買収し、議會に潜入し、最大の歐羅巴諸王國に於ける正義と自由とを束縛する』¹⁾。併し斯様な言葉のうち、果してどこまでがラリーの眞意であり、どこまでがギアナ遠征の目的を達成する爲めの、單純なる言葉の綾に過ぎなかつたか、といふ點に至つては、殆んど言ふことができない。況や嚴密なる眞理愛の如きは、決してこの著述家の徳性には屬してゐないのであるから。——過剰人口に對しては、ラリーは特別な恐怖を感じてゐたらしい。例へば次のやうに言つてゐる彼の言葉は、正にマルサスを想ひ起さしめるものがある。曰く『人間の數は非常に多いから、戦争乃至疫病に依つて、數千となく掃蕩されなければ、地球は、凡ゆる人間の勤勉を以てして、而も何等の生計の途をも與へ得ざるに至るであらう』²⁾と。かくて彼は、次の如くにも考へる。西班牙は、多くの植民地を以てして、而も人口稀薄どころでなく、依然として舊の如く、そこに養ひ得らるゝ限りの人間を持つて

1) 『ギアナの發見』序文『讀者に告ぐ』【一七五一年版『全集』第二卷一四九頁、ハクルート、エヴリマンズ・ライブラリー版第七卷二七九頁】。

2) 『世界史』(History of the world.) 第一編第八章第四節。

ゐる。若しエドワード三世が佛蘭西征服の目的を達したとした場合、この地は現在英吉利國民で充ちてゐるであらう。併し、そのために、英吉利自體がそれだけ人口稀薄となるには至るまい。過剰人口は、通常の時期に於ては、次の諸排水口を通じて減少せしめられる。曰く、飢饉と疫病、刀劍と絞繩。多くのものは、子供たちを養ふ手段が缺乏する爲めに結婚を差し控へ、他のものは、我が身を金持の老婦人たちに委せたり、貧困の爲め己が妻の不妊を喜んだりする。而も甚しきに至つては、我々の種族増加は、地上を荒廢に歸せしむべき不斷の戦争を惹き起す強い誘因を、含んでゐる。従つて、止むを得ず劍を抜くかの如くに辯疏する多數の王侯は、却つて彼自身の信ずるところ以上に、眞理を言つてゐることゝなる。多數の青年子弟や失業した商人等は、本來健全なるべき國家をも、事實上病患に陥れることがあり得る。生活資料が本來必要以上にある場合でさへ、その在荷全體を多數の價値ある人々の間に適當に分配する方法が、缺けてゐることもある。斯様な場合には、國土は戦争による掃除を必要とすることもあり得る。この場合戦争は、恰も大黃水劑が身體から膽汁を瀉下させるやうな作用を行ふものである¹⁾。——ラリーが體僕の制度に對し無條件に反

1) 『戦争論』(A discourse of war in general.) 『全集』第八卷二

對するものでなかつたことは、あの時代の精神を識るものゝ決して訝り得ないところであらう。これに對して彼は考へる世には自ら治める能力がない爲め、性來奴隸たらしめられてゐる人々が、多數に存在してゐると。従つて、彼はまた、社會上最大の惡結果を、不自由な田舎人の解放に歸してゐる。『嘗て大きな利益をなした我が奴隸たちが解放されて以來、無數の無頼漢や拘摸その他これに似て天性奴隸でありながら法律上然らざる輩が、發生したのである』¹⁾。この場合、我々は、ラリーが下層階級に對しては、一生涯極めて僅かしか同情を示さず、逆に、下層階級の間に、彼に對する同情は極めて僅かしか存在しなかつたといふ事情を想ひ浮べる²⁾。——それだけに愈、好い印象を與へるのは、熱心な自由貿易の讚美者を、彼に於て認められた時である。議會で大麻栽培の強制的施行が議せられたとき、ラリーは言つた。『我々の意志に従つて土地を利用すべく國民が強制される

五七頁以下【一七五一年版第二卷二頁以下。本編は欄外では “A discourse of war in general” となつてゐるが、本文の全標題は、次の如くとなつてゐる。 “A discourse of the original and fundamental cause of natural, arbitrary, necessary, and unnatural war.”】

1) 『世界史』第五編第二章第四節。疑ひもなく、アリストテレス政治學の餘韻である。

2) 『エディンバラ・レヴュー』上掲七二頁。

ことは、好ましいことでない。寧ろ私は、各人が、自分に最もふさはしい仕方での土地を使用し、而してその場合自分自身の欲するところに従ふことを望む』と。更に他の機會に、有名な Statute of tillage 【耕作條例】の廢止が議せられたとき、ラリーは説いた。『和蘭人は決して穀物を播かないが、工業の御蔭で充分に穀物を所有し、却つてこれに依り他國民に奉仕してゐる。真正なる英吉利國民の希望する如く、農業を自由のうちに置き、各人をして自由行動をとらしめること、これこそ最善の政策である』¹⁾と。この偉大な諸立言を適當に裏付けたものとして、私は、凡ゆる商工業を以て droit domanial 【公有物權】なりと説明した、千五百七十七年及び千五百八十五年の佛蘭西の法律を擧げやう²⁾。

1) 『エディンバラ・レヴュー』四〇頁。併し下出八三頁註一参照。

2) 本章に述べたやうな、富の本質に関する、甚だ多數の、殆んど本格的な、正しい見解の普及は、當時に於ける他の大抵の國民にあつては、これを探しても無駄である。併しそうはいふものゝ、たまには英吉利以外でも、これを指摘することができないではない。私はスユリー [Sully] を想ひ起す。併し西班牙に於てさへ、千六百四十年の頃、ディオゴ・サーヴェド・ラ・ファハルドの『基督教原理百箇條』(Diègo Saavedra Faxardo: Idea principis christiani, centum cymbolis expressa. Amstelod. 1635,) 五九〇頁【一六八六年イェナ版五六六頁】は、次の意見を述べてゐる。 Potissimae divitiae ac opes terrae fructus sunt: nec ditiores in regnis

fodinae, quam agricultura. Plus emolumenti acclivia montis Vesuvii latera afferunt, quam Potosius mens cum intimis suis visceribus, licet argentiferis. 【土地の果實は、最も重要な富であり財であつて、諸國とも、鑛山は農業程生産的でない。假令ポトシの山の果知れぬ地底は銀を産み出すとも、ヴェスヴの山の山腹の方が利益を與へることは多い】と。

第四章 ヴェルラム男爵ベイコン

ヴェルラム男爵フランシス・ベイコン [Francis Bacon von Verulam] の經濟學上の諸見解を識ることは、我々の目的から見て特に甚だ興味ある問題たるを失はぬ。彼は、人間智識の領域全般に通曉し、確實な諸觀察によつてこれを擴張することに、銳意努力した人物であるが、この人の公平にして而も偉大な博識よりするときは、凡そ當時の人々が科學と見做してゐたものにして、彼の眼界から完全に脱してゐたものが一つもなかつたことは、無論豫想し得るところである。彼に於て、經濟學が結局一個の甚だ控へ目な位置を占めてゐたに過ぎなかつたことは、蓋し當然である【*】。

【* この邦譯に於ては、原則として次の全集版を利用し、ロツシャーの引用を確めた。

The works of Francis Bacon, Baron of Verulam, Viscount St. Alban and Lord High Chancellor of England. Collected and edited by James Spedding, Robert Leslie Ellis, and Douglas Denon Heath. 14 vols. London 1876-1888.

本書の中でロツシャーが引用してゐる諸篇は、次の如くである。

1. De dignitate et augmentis scientiarum. 1623. (L. pp. 431 ff.)
Eng. tr. Of the dignity and advancement of learning. (IV. pp.

『智識の品位並びに擴張に就いて』(De dignitate et augmentis scientiarum.)¹⁾なる著書を含む、凡ゆる科學に關する有名な百科全書的通覽のうちで、ベイコンは、恰も家族が國民の一部であると同じく、經濟學は政治學の一分科である、と述べてゐる(第八編第三章)。併し不幸にしてこの學問全體のうち、比較的徹底的に取扱はれてゐるのは、僅か一編だけに止つてゐる。國家は如何にして擴張し得るか、といふ問題が即ちこれである。併しベイコンが、普通に所謂マーカントェイリストのうち、殆んど屬してゐないことは、既にこの編に於ても極めて明瞭に表はれてゐる。彼は就中貨幣こそ軍資金であるとするかの屢説かれ、る命題に對し、甚だ熱心に論戰してゐる。曰く、ソロンが豪華を誇るクロエーズス【Kriosos】に向ひ、鐵の取扱ひに於て王に勝るものが來たときは、王の黄金も直ちに彼のものとなるであらう、と豫言したのは正しいと。そしてベイコンは別の箇所では

者はそれを見ることができなかつた。)併し(8)及び(9)に就いては、如何なる拉丁譯をも参照し得なかつた。】

1) 最初千六百五年英語を以て著はされた。【本書は最初 The two books of Francis Bacon of the proficiencie and advancement of learning, devine and humain, to the King. London 1605. なる標題を以て出版され、その後増補改訂されたが、後千六百二十三年に至り拉丁譯が公刊された。ロッシュャーの引用してゐるのは、拉丁譯である。】

- 275 ff. V. pp. 1 ff.)
2. Sermōnes fideles.
Essays or counsel, civil and moral. 1625. (VI. pp. 367 ff.)
 3. Sylva sylvarum, or a natural history in the centuries. 1627. (II. pp. 325 ff.)
 4. Parasceue ad historiam naturalem et experimentalem. (I. pp. 369 ff.)
Eng. tr. Preparative towards a natural and experimental history. (IV. pp. 249 ff.)
 5. De sapientia veterum. 1609. (VI. pp. 605 ff.)
Eng. tr. Of the wisdom of the ancients. (VI. pp. 689 ff.)
 6. Novum organum. 1620. (I. pp. 71 ff.)
Eng. tr. The new organon. (IV. pp. 37 ff.)
 7. Descriptio globi intellectualis et thema coeli. 1653. (III. pp. 715 ff.)
Eng. tr. Description of the intellectual globe. (V. pp. 501 ff.)
 8. History of the reign of King Henry VII. 1622. (VI. pp. 1 ff.)
 9. Cogitata de coloniis in Hiberniam deducendis.
Certain considerations touching the plantation in Ireland. Presented to His Majesty, 1606. (XI. pp. 114 ff.)

ロッシュャーは何れも拉丁譯から引用してゐるが、(2)(8)(9)は本來英文で書かれたもので、英國民の爲めの全集版にその拉丁譯を附載することは、大して必要でないとの理由から、スペディング全集版ではその拉丁譯を缺いてゐる(『全集』第六卷、七、三六九頁、参照)。そこで譯者は、(2)の拉丁譯として、

Baconus, F.: De Verulamio sermones fideles, ethici, politici, oeconomici: sive interiora rerum. Lugd. Batavorum 1644.

を参照した。(本書は教科書として多數出版されてゐるそうであるが、譯

第八編第二章) 勇敢な人々の筋力こそ真正の軍資金であると説明した、マキアヴェリ【Machiavelli】に賛成してゐる。ベイコンにとつては、第一が *emendatio animi*【心の改善】で、次に *opes et pecunia*【富と金】が來、最後に *fama*【評判】となる。従つて彼は、強國の經濟的條件として、特に次の三つのものを擧げてゐる。曰く、租税が適度で而も喜んで負擔されること。曰く、少數の貴族と並んで優秀な農民階級が存在すること。最後に曰く、腕力よりは寧ろ手先を必要とする諸座職には、國民が餘り澤山従事しないこと(第八編第三章)！)

これらの見解は、同書第三編第五章で補足されてゐる。周知の如く、ベイコンは、從來の科學體系中にある缺陷を補ふに、新しい科學(その中文學史と比較解剖學とは最も優れた例を成してゐる)を以てする爲めに、多數の提案を行つたが、同書でベイコンは、就中、主として、發明的天才を指導し、既に解決された諸問題に關して彼が無益に努力することを豫防するてふ、意圖を以て、一個の *inventarium opum humanarum*【人類

1) 『論文集』(Sermones fideles.) 第二十九章參照。【本書は初め千五百九十七年英文を以て公刊され、その後數度再刷または増補された。千六百二十年版は、彼の生前に於ける最終の訂正版で、五十八篇の論文が收められてゐる。その拉丁譯は、千六百三十八年ローリー(Rawley)によつて出版された。】

の所有物目錄】を推唱し、人類の財貨全體は、自然の所産も人爲の所産も、嘗ては識られてゐたが今は忘逸されて了つたものも、悉くそのうちに記録すべしとした。この中にはまた、望ましいものではあるが未だ不可能と見做されてゐるものも、注意を鋭くする爲めに、列擧しなければならぬであらう。次にベイコンは進んで、一個の *catalogus logus experimentorum maxime polychrestorum*【最も一般的に用ひられる實驗目錄】を推唱してゐるが、これも前者と同じ目的を持つものである。この第二の提案は、ベイコン自身により、その著『自然史』(*Sylva sylvarum s. historia naturalis*)中で、或る程度まで實現されてゐるが、書中特に第五第六世紀は、多數の立派な農業上の研究を含んでゐる。『自然及び實驗史序論』(*Parascene ad historiam naturalem et experimentalem.*)が提出してゐるところの、農工業その他總ての部門に關する歴史の要求も、これに屬してゐるが、その總てに互る着眼點は、機械的な諸技術そのものが問題たるより、寧ろ科學の進歩

1) これに對する極めて注目に値する一個の貢獻は、ベイコン自身が行つてゐる。『古代人の智識に就いて』(De sapientia veterum. [1609.]) 第十九章。本章に於てベイコンは、極めて透徹した辨別力により、ダイダルス【Daedalus】の神話を技術と工業との規則的發達に關する譬喩として取扱つてゐる。この書は千六百十年に出版された。【スベディングは、本書の初刊を千六百九年と明言してゐる。(『全集』第六卷六〇七頁)】

に貢献するところのものが問題たるに過ぎぬ』【全集】第一卷四一頁】といふにある。——ベイコンは、周知の如く、かの工業が、何等學問上の目的を持たずして、而も絶えず實行しつゝある、實驗の父であるが、それだけに、總て如上の事實は、愈、ベイコンの興味を唆つたに相違ない。また彼は、人間の技術を自然に對立せしめず、これを單純に一個の *additamentum naturae* 【自然の補充物】と呼んでゐる。私は、經濟學者たちの間に於ける甚だ多數の無益な論争を中止せしむべかりし、有名な格言『人間の働きは、諸自然物を結合したり分離したりする以上に出ることができぬ。残るところのものは總て、自然がそれ自體の内部に於て、これを行ふ』¹⁾、を想ひ起す。この意味に於て、彼はまた、他の箇所では、次のやうに考へてゐる。 *Pinus historiam naturalem pro dignitate complexus est, sed complexam indignissime tractavit.* 【プリニウスは、自然史に就き、その權威に相應しい觀念を懷いてゐたが、この觀念に極めて値しない仕方であつた²⁾。】
 『富に就く』(De divitiis) 及び『經費に就く』(De sumptibus) と云ふ二つ

1) 『新論理學』(Novum organum, 1620.) 第一部落格言第四【全集】第一卷一五七頁、第四卷四七頁】。

2) 『智的天體の記述』(Descriptio globi intellectualis [et thema coeli, 1653.]) 第二章【全集】第三卷七三一頁、第五卷五〇七頁】。

の論文¹⁾は、ベイコンの大抵の著作の如く、所謂常套語に充ちてはゐるが、これ等の常套語たるや極めて明瞭に判ること、我々自身の力で自分たちの豊富な經驗により取除き得るものである。従つてそれらのものは、斯様な命題につきもの、無内容に陥らず、それ自體内容充實してゐるといふ特質を持つてゐる。それは、ピンダー【Pindar】の語を以て言へば、舌がミューズの神々の恩寵によつて、魂の奥底から作り出した、言葉である。ベイコンは、富に關しては、僧侶臭い甚だ曖昧な輕蔑も加へなければ、また下らぬ過評價にも陥つてゐない。富の徳に對する關係は、丁度輻重の軍隊に對する關係と同じである。致富の手段として、ベイコンは、次の十箇條を擧げてゐる。曰く、貯蓄、農業、工業、商業、會社、高利、新發見、獨占、王侯の地位、遺產横領。勿論甚だしく非論理的な並べ方で、而も國民經濟全體には少しも顧慮してゐないけれども、そのうちには、個人の處世法及び倫理學の見地から見て、立派な考が澤山編み込まれてゐる。斯くて農業利益の緩漫なところ、商業には幾多の道德的危險が伴つてゐること、利潤の大きいこと、確實なところとは結付き難い概念たること、致富の第一歩は第二歩以下に較べて甚しく緩

1) 『論文集』第三十四章及び第二十八章。本書の最初の部分は、周知の如く、既に千五百九十七年に公刊されてゐる。

漫なこと、等が高調されてゐる。これら個々の倫理的、心理的立言が、アダム・スミスやリカルドの諸著作に對する關係は、恰も七賢人の有名な諸格言が、プラトーンやアリストテレスの政治學體系に對すると、全く同一である。我々は、經濟學が、殆んど全く家政及び財政の單なる官房學者的取扱ひの中から、荆棘を開きつゝ發達せざるを得なかつた事情を、忘れてはならぬ。

併し、ペイコンに於ても、必しも全く國民經濟的觀念を缺いてゐるわけではない。斯くて、國民財産の増加は外國貿易に於ける利得から生じ得るのみであるとする、かの十七世紀に流行した見解は、既にペイコンに於ても見出される。ところで、彼はこの際、商品の原料と加工と運搬とを充分に區別してはゐるけれども、財貨生産の本質に對する明確な洞見に至つては、未だ猶ほこれを距ること甚だ遠く、單に *quicquid alicubi adicitur, alibi detrahatur* 【何處かで獲られたものは、他の何處かで失はれる】¹⁾と考へてゐるに止る。——諸財貨の分配

1) 『論文集』第十五章 (De seditionibus et turbis 【叛亂及び紛議に就いて】)。勿論、各國が貿易に於て獲得し得るところは、他の何れかの國が喪失したところに限る、とする通俗の謬見は、私の識る限りに於てジョサイア・タッカー『政治及び商業問題短篇集』(J. Tucker: Tracts on political and commercial subjects. [3rd. ed.] 1776.) 四二頁以下に於て、始めて實際に排斥されたものである。【問題の箇所は、『短篇集』所載第一論文

に關しては、同一人の手中に於ける過度の集積に反對するといふのが、ペイコン愛好の題目である。惟へらく、莫大な遺産は、相續者自身にとつても、原則として不利である(『論文集』第三十四章)。總ての財産が過度に富める少數者に屬する處にあつては、國家が財寶の中に餓死することも、あり得る。貨幣をして實を結ばしめる爲めには、肥料の如くこれを國中に撒き散らさねばならない。従つてペイコンは、高利獨占大采邑の牧場化が、少くとも制限されるべきことを希ふ(『論文集』第十五、第三十九章)。斯くて例へば、ヘンリー七世の治世四年及び五年には、二十英町以上の農場は、總て減少することなしに維持すべきことを命じた一法令が發布されたが、我がペイコンは、この法律に欣喜雀躍してゐる¹⁾。——消

“ A solution of the important question, whether a poor country, where raw materials and provisions are cheap, and wages low, can supplant the trade of a rich manufacturing country, where raw materials and provisions are dear, and the price of labour high. —

With a postscript obviating objections.” 中の一節で、タッカーの序文によれば、『千七百五十八年、文筆界に於て時流を抜んでゐる北ブリテンのあるジェントルマンとの通信に、起因するものである。』因みに『短篇集』は、千七百七十四年に第二版が出版されてゐるが、それは、ロッシェ引用の第三版と、全然同じである。

1) 『ヘンリー七世朝の歴史』(Historia regni Henrici VII. p. 1038. Edit. Lips. 1694.) 【『全集』第六卷九四頁】。『知識の品位並びに擴張に就

費に關しては、同時代の大抵の人々と同じく、奢侈禁止法を是認してゐるが¹⁾、これに就いて詳言はしてゐない（『論文集』第十五章）。併し、貴族や僧侶や文學者その他の數が多いことに對しては、常に口を極めてこれを非難し、彼等の著しく増長した消費は、國家を貧窮に陥れる危険がある、としてゐる²⁾。

個々の點の中では、何よりも先づ利子論（『論文集』第三十九章【スベディングの『全集』版で】³⁾に就いて述べなければならぬ。普通、資本利子を學問上始めて辯護した人は、サルマシウス【Salmasius】となつてゐるが、この點に於ては、サルマシウスよりペイコンの方が、一世代以上も先立つてゐる³⁾。成る程既にヘンリー八世は、總ての臣民（外國人を除いて）に對し、無條件的に徴利を禁止した昔の法律を、千五百四十六年に廢止

いて』第八編第三章及び『論文集』第二十九章は、大體同じ言葉を以てこれを賞讃してゐる。『歴史』は千六百二十二年に著はされた。

1) 本法は例へば佛蘭西では、ルキ十五世の時代になつて始めて、事實上の死文徒法となつた。

2) 『論文集』第十五、二十九章。Sorti reipublicae nihil addunt【彼等は國家の元本に何物をも加へない】と前の章で言つてゐる。從つて後世フィジオクラットの不生産的階級に關する見解の、一先驅である。

3) サルマシウスの『利子に就いて』（De usuris.）は千六百三十八年に、『貸借に就いて』（De modo usurarum.）は千六百三十九年に、『使用貸借に就いて』（De mutuo.）は千六百四十年に公刊された。

し、その代りとしては、一割の最高限を制定するに止めてゐた。宗教改革王エドワード六世の時代、利子禁止法は、舊約聖書の文句に從つて恢復されたが（エドワード六世の治世五年及び六年法律第二十號）、併しそれも僅か千五百七十一年まで、この年永久に消滅して了つた。國民の言語自體がこれを認めて居て、從來如何なる徴利をも意味してゐた usury なる言葉が、千五百七十一年以來は原則として唯だ、高利のみに適用されるに至つた¹⁾。併し、利子徴收の權利に對する偏見の排除が、如何にも根本的でなかつたといふ事情は、ペイコンと同時代の偉人ウキリアム・シエキスピニアが『ヴェニス商人』の中で、最も明瞭に示してゐる。ペイコン自身も、この僻見から必しも全く解放されてゐるわけでない。當時徴利に對して浴せ掛けられてゐた諸非難の中でも、次の二つのもの、即ち利子の徴收者は自ら好んで安息日に働くものであるといふ非難、及び彼は自らの額に汗してパンを食ふべしとする最古の律法を、犯すものであるといふ非難は²⁾、ペイコンの上に何等の印象をも残してゐなかつた

1) ヒューム『英吉利史』第四十四章附録三。

2) 『論文集』第三十四章。ダンテも既に、徴利者たちは何故地獄で憔悴するか、とふ理由として後者を擧げてゐる。『神曲』地獄篇（Dante: Divina comedia, Inferno.）第十一曲、一〇六行以下。

とは考へられない。それにも拘らず、ペイコンは、人間性が冷酷であるとの理由を以て、利子を許すべきものと説明してゐる。これ、貸金は、絶體に必要であるのに、利子なくしては殆んど發生せざるべきが故である。これに次いで、彼は、金貨業の長所と短所とを相互に對照してゐる。短所の中には、例へば次のものがある。多くの人々は、無爲なる利子生活の魅惑に依つて、自家の商業經營を忽せにし、物價は利子の爲めに下落し、總ての富は少数人の手中に集中されるであらう。併しこれら總てのことよりも、貸金の必要でふ明白なる事實の方が重要である。従つて事實上の利子禁止なるものは不合理であり、『ユートピアに相應はしい』ものであらう。ペイコンがこれを更に發展せしめて二重の法定利率を要求した條下は、この上もなく創造力に富んでゐる。低い方は約五歩で、總ての人々に對するものである。然らば、現在地代として買價の六歩を取つてゐる地主たちは、大いに利益を獲、無爲の利子衣食者等は、刺戟されて活動するに至るであらう、等々。次に高い方は約八歩で、それは、例外的に、國家の監督の下に、而も唯だ商業都市に於てのみ、商人たちへの貸金に對して、許さるべきである。ペイコンは甚だ正當にも言つてゐる、かの低利率を以てしては、商業は餘りにも僅かしか信用を受け得ないのみならず、商人たちとしても、

自家の利潤は比較的高いのであるから、比較的高い利子に耐え得るであらうと。従つてガリアニが、四世代以上も後になり、而もこれ以上は殆んど大して明確たらしめなかつた、かの資本の實際的生産能性には、少くとも氣付いてゐたわけである！¹⁾

ペイコンから見れば、利率に於ける如く、他の場合に於ても、官憲の價格公定は必要であるやうに思はれる『論文集』第十五章。彼は一般に、ヘンリー七世の立法手段を甚だ高く評價し、『ヘンリー七世朝の歴史』一〇三七頁【全集】第六卷九頁二、斯くてヘンリー七世治世四年及び五年の羅紗價格法をも殊の外賞揚してゐる。これは或る意味に於て、法定利率に關するペイコンの

1) フーゴー・グロティウス [Hugo Grotius] も——『戦争及び平和の法に就いて』(De iure belli et pacis.) 第二編第十二章、第二十章以下——根柢に於ては、利子徴收を是認してゐる。諸の反對論據中、彼が纒かに肯定してゐる、かの聖書の律法は、貸主の危険・貸主自身の利潤節慾・彼の努力その他を超えたる利率に對してのみ、適用することを望んでゐるに過ぎない。これに反して、サー・ウァーター・ラリーは、——『内閣會議』(The cabinet-council.) 『全集』第八卷四九頁【一七五一年版『全集』第一卷五五頁】——次の如くに考へてゐた。丁度今日は、印度から甚だ多量の貨幣が流入し、多額の貨幣を手許に持つてゐる人々は、高利貸業が(法律上許されてゐる限り) 他の諸商業部門よりも益を以て確實有利となる、と見做すに至るであらうから、それだけに、高利の制限は甚だ以て必要である、と。

提案に相當して居り、殊にその中に於ては、羅紗の粗製品と上等品とに對し、異つた價格が規定されてゐた（前掲書、一〇四〇頁【全集第六】卷九六頁）。

同じ年、ヘンリー七世は一つの法律を制定し、英吉利以外の船によつて南佛蘭西から大青と葡萄酒とを輸入することを禁じた。勿論これは結局航海條例に導く運命を持つてゐたところの、かの連鎖の第一環であつたわけではない（ベイコンは斯う信じてゐたやうに思はれるが）。といふのは、既にリチャード二世の治世五年法律第三號は、これと類似のことを規定してゐたのであるから。併し經濟上の犠牲を拂つて政治上の利益を獲得しやうとする斯かる規定の目的を、ベイコン程よく特徴付けてゐるものは一人もない（前掲書一〇三九頁【全集第六】卷九五頁）。曰く、*Infectens paulatim politiam regni Angliae ab intuitu ubertatis et utilitatis rerum venalium ad intuitum potentiae militaris. Antiqua enim statuta fere omnia mercatores externos invitant, ut merces omnigenas in regnum Angliae importent; pro fine habentia vilitatem et copiam earundem mercium, neutrum am respicientia ad rationes politicas, circa regni potentiam navalem.* 【英吉利王國のいふ形容詞が挿入してある。政策を、購買せらるべき物品の利益と利用

英原著には「昔の」といふ形容詞が挿入してある。政策を、購買せらるべき物品の利益と利用の一句が單に「豊富」となつてゐる。てふ見地から武力でふ見地に、徐々に英原

は「徐々に」なる副詞はない。變更しつゝ。といふのは、殆んど總ての昔の法令は、外國商人たちを誘つて總ての種類の商品を英吉利王國に輸入せしめたが、その目的は、これらの商品の廉價と豊富とにあつて、王國の海軍力に關する政治上の理由は、決して考慮に入らなかつた。——同様にして、ベイコンは、國法による賢明なる工業助長策にも反對でなかつた。尤も所謂マーカンテイリズムがこれに關して利用した諸詭辯は、彼に於て決して認め得ないところではあつたが。當時既に英吉利では絹商品の製造を理解してゐたが、彼はこの商品全體の輸入を禁止した一法律（ヘンリー七世の治世十九年）を賞讃し、この法律は、無用な外國商品の輸入を防遏すべし、真正の原則に立脚するものであり、これに依つて内國産業が奨励されるか、又は無用な物の使用が阻止されるであらう、と言つてゐる（前掲書、一一一五頁【全集第六】卷二二三頁）。——なほ、ベイコンは、工業の嘆美者ではない。彼は言つてゐる、若い國々では劍が、成熟した國々では文學が、齡傾いた國々では商業が繁榮する、と¹⁾。

國民經濟學に於けるベイコンの見解全體の極致とも見做すべきは、『植民に

1) 『論文集』第五十六章『有爲轉變に就いて』(De vicissitudine rerum.) 【スペディング『全集』版では第五十八章となつてゐる】。

就S.P.J. (De Plantationibus populorum) の論である(『論文集』第三十三章)。同章に於て彼は、實際上の一大利害關係に逢着したが、その利害關係こそは、この時代ジェームス一世の政府によつて攻撃されなかつた唯一のものであつた。當時恰かも、傳奇的な軍事行動に代り静かな搖ぎなき平和が突如として成立し、その結果多くの冒険家たちは、戦争に代はるべきものを、少くとも植民地建設で、比較的平和な冒険中に求めることを、殆んど強制されるばかりになつてゐた。ラリーヤカーライルの如き人々の不成功な實際上の企圖が、千六百六年以降に至り、始めて、ヴァージニアに於て比較的成功した後継者を見出したと同じく、ベイコンこそは、既に述べた十六世紀の植民論者たちが着手して置いたものゝ完成者と見做すことができる。彼も過剰人口に對して矢張り非常な懸念を懐いてゐたことは、その論文『愛蘭土植民策』(Cogitata de coloniis in Hiberniam deducendis)並びに『論文集』第十五章がこれを證明してゐる。——ベイコンの植民學說全體は、西班牙國民の企圖と極めて鋭く對立してゐる。植民地は、處女地の上のみ建設し、前住民の剿滅によつて始めて空地となるやうな土地には、建設しないやうにしたい、と彼は考へる。何はともあれ、植民地自體の收入を、餘り早急に期待してはならぬ、と彼は警告する。短見なる貪慾

は、有望な諸植民地までも破壊する。新しく植樹した森林の如く、この場合にも二十年経たない内は、何等の利益をも求めてはならぬ。母國の商人たちが全企業の先頭に立つ時より、貴族たちが先頭に立つ時の方が結構である、とベイコンが見做してゐるのも、この理由に據る。彼は、植民地の芽を傷める囚人たちの移住を諫止し、反對に、農夫や園丁や鍛冶屋や大工等の如く、極めて我雜な而も必要缺く可らざる仕事に耐える移住民たちを、殊のほか推稱してゐる。要するに、萬事が下から根本的に建設されなければならぬのである。斯くて例へば、第一の問題は、その植民地で自然に成長する食料は何かといふこと、次には、一ヶ年内に人為的に生産し得るものは何かといふことであつて、それまではビスケットや小麦粉等は、母國から供給して貰はねばならない。畜類に就いては、最も病氣に罹らず而も最も繁殖の大なるものが一番宜しい。併し、食料並びに輸出用として最も多く頼るべきは、漁獵である。總じて輸出に關しては、ベイコンは、總て過度の投機的耕作を戒めてはゐるが、反對に煙草や棉花等の適當な栽培を推稱し、木材、瀝青等の輸出に至つては、原始林があり餘る程あるところから、それにも増して推稱してゐる。甚だ特徴の存するのは、彼が鑛業を嫌つてゐる點で、これが危険なる富籤に類する性質は、植民者たちを非經

濟的たらしめると言つてゐる。このことは、ベイコンが鐵の採取と加工とを斷然推稱してゐるだけに、西班牙流の遣り方とは極めて截然と相違してゐるわけである。植民地の行政は、一個人に、而も一種の軍隊統帥權を持つた個人に委任したいと考へる。母國には監督官廳が餘り多くあつてはならぬ。租税の免除以外、植民地がまだ成熟しない内は、完全な貿易自由も、原則として存在せねばならぬ。原住民たちに對しては、厳格な公平こそ最良の政策である。それ以外にまた、彼等の中の個々人を母國に送り、そこで彼等の同胞に對する開化の使徒となるべき教育を試みなければならぬ。——我々は茲に、千六百六年以降、英吉利國民の實際上に於ける植民地經營を特徴付けてゐる、極めて重要な諸特質を、鏡にかけるが如く、明瞭に知るであらう。併しこれが誤謬も、幾分はベイコンの學說中に移つてゐること、勿論である。斯くて、例へば、新英蘭土に於ける如く、ヴァージニアに於て、最初の興隆を甚しく阻害した、半共有制度の如きはこれである¹⁾。ベイコンは薦める、農園地

1) **パークス**『巡禮行』第四卷一七六六頁【千九百五年乃至七年版—第十九卷、九五頁】、**バンクcroft**『亞米利加合衆國の歴史』(Bancroft: History of the United States. [from the discovery of the American continent.]) 第一卷一六一、三四〇頁【一八四六年版、第一卷一三九、三一—五頁(?)】。

及び菜園地の大部分には公立倉庫を指定した上、その入庫品は、包圍中にある都市に於ける如く、計畫的に分配せねばならぬと。上に述べたことの注目に値する系を形つてゐるものは、ベイコンが、千六百六年、王ジェームス一世に奉つた、愛蘭土拓殖計畫である¹⁾。このうちには、特に次の如き新案が含まれてゐる。即ち移住が貧民によつて實行されることを戒め、教會、道路、都市の圍壁、その他公共的建築物の建造に對する議會の助力を求め、最後に移住者たちの法外に甚しい分散を避くべきことを、懇切に勸めてゐる。

1) 千五百七十三年、エセックス伯指揮の下に、愛蘭土殊に沒收地の上に、英蘭土の植民地を建設しやうとした、無益な企に就いては、**リングアード**、八の一五〇以下参照。ベイコンに依つて建議され、ジェームス一世によつて實行された諸計畫の成果に就ては、同書、九の二〇〇以下参照。【**ロッシヤー**は、茲に單に Lingard, VIII, 150fg. 及び Idem. IX, 200ff. と言つてゐるのみで、果して何を意味するか明瞭でない。恐らくは Lingard: A history of England, from the first invation by the Romans to the commencement of the reign of William III. 8 vols. 1819-1830. であらうと思ふが、若しさうであるとすれば、私の参照した千八百七十四年のダブリン版(全十冊)に於ては、ロッシヤーの上掲引用箇所は、それぞれ第六卷 五六頁以下及び第七卷九〇頁以下に當るのであらう。】

第五章 英吉利世界商業の濫觴

トマス・マン【Thomas Mun】の生涯に就いては僅か次のことだけしか判らない。彼は卓越した一人の商人で¹⁾、千六百二十三年既に、經驗に富んでゐるとの名聲があつた²⁾、千六百二十八年には、東印度會社の議會請願書を執筆し³⁾、千六百三十年には、トスカナ大公から商業を目的とする貸付を受け⁴⁾、而も千六百六十四年彼の主著が息子によつて出版された時は、既に生存してゐなかつた。

最初の著作『英國對印貿易論』(A discourse of trade from England unto the East-Indies, answering to diverse objections, which are usually made against the same. By T. M.)は既に千六百九年に刊行されたといふことであるが【この想像は果して如何であらうか。商科大學にはそれが第二版たることを證明すべき記載は見當らないやうである】及び“A discourse of trade etc. 2nd mt. impression corrected and amended. London 1621.”

1) マンの息子が遺作の序文中で言つてゐるところに従へば、famous among merchants【商人等の間に在つて名聲があつた】と。

2) ミセルデン『商業界』(Misselden: Circle of commerce. 1623.) 三六頁。【譯者は本書を見ることのできなかつた。】

3) マカロック『經濟學文獻』三八頁。

4) 著者自ら遺作の中で言つてゐるところに従ふ。

なる二書が併せ藏されてゐるが、その對照によつて我々は、——千六百九十年に出版された「*England's treasure by forraign trade, or the ballance of our forraign trade is the rule of our treasure. Written by Thomas Munn of London, merchant, and now published for the common good by his son, John Munn of Bearsted. London 1664. 8.*」編纂者が彼の遺産中最も貴重な部分であると述べてゐるこの著書は、當時の大藏卿サザンプトン伯爵閣下に公獻されてゐる。

緒言(第一章)では、立派な商人に屬すべき諸性質が、極めて熱心に敘述されてゐる。その一つは、實に *steward of the kingdoms store*【御國

1) これと似てはゐるが、これよりは貧弱な、東印度貿易辯護論が、
——サー・ダッドリー・ディグス (Sir Dudley Digges) 著——千六百十五年倫敦で出版された。『貿易辯護論』(The defence of trade, in a letter to Sir Thomas Smith, governor of the E. I. Companie etc. From one of that societie.)

の店の番頭】である。以下本書の内容は、殆んど例外なく、二つの項目に分たれる。曰く、貿易均衡¹⁾の本質に關する理論的諸考察と英吉利にとつてこれをより有利ならしめる爲めの實際的諸方策。——正金と富 (treasure) とは、マンから見れば、全く同一の意義を持つ(第二章)。正にこの理由に據り、奢侈は唯だ内國産の諸商品によつてのみ營まれねばならぬ。この場合には、富者の失ふところが貧者の得るところとなるが故である。外國からはできるだけ多く獲得すべく、自國からはできるだけ少く報酬を與へる。従つて海上貿易や仲繼貿易や遠國との直接貿易の積極的經營は、最も熱心に推稱される。羅紗や鐵製品は、羊毛や鑽石よりも遙かに多くの價值を持つが故に、製造工業等もまた同様である(第三章)。それにも拘らず、著者は、商品輸入と貨幣輸出とが、甚だ有利な

1) この機會に、私は敢て一步進んで述べたいと思ふ。即ち凡そ國民經濟學說上、貿易均衡が順であるとか又は逆であるとかいふのは、國民の富にとり最も重大なりとされる諸要素を基準として、判斷されて來たものである。即ちマーカンティリストたちは貨幣數量を、ゾンネンフェルス [Sonnenfels]・フォルボネー [Forbonnais]・ネツカー [Necker] の如き人々は被傭者及び被扶養者の數を、今日の英吉利人たちは國民勞働の生産能性を基準とする。而して、この最後の者は、順なる貿易均衡を以て、國富増加の單なる第二次的原因、殆んど單にその兆候ぐらゐるものに過ぎずとするが、最初の者は、これを以て唯一の原因とした。

場合のあり得ることを疑はない。そこで例へば、借手がこれを利用して、その代りにレヴァント【Levante】その他から商品を輸入するであらうといふことは、充分よく知つて居られたにも拘らず、トスカナ大公は、マン自身及びその他の商人に金を貸付けられた。併し、それは有利に行はれて、諺にいふが如く、『鴨を銜へつ』(a duck in his mouth) 歸つて来る。そして就中リヴォルノ【Livorno】の如きは、これによつて一小寒村から大商業都市になつたのである。貨幣を輸出して、その代りに再輸出し得る商品を持歸へるものは、種蒔く人に比することが出来る。商品を持つものが貨幣に不足する道理はない。國內に非常に澤山の貨幣を保有することなどは、好ましいどころでなく、却つて商品價格を騰貴せしめ、その結果これが輸出を困難たらしめるに過ぎない。伊太利人は、常に手形や銀行等によつて現金を補つた後、現金そのものは外國で利用する(第四章)。この理由に據つて、穀物や魚類等を輸出したものは貨幣を國內に持歸るべく、外國商品を輸入したものは英吉利商品を以て支拂ふべしとする、英吉利の古い諸法律は、マンの非難するところである¹⁾。自國の消

1) 同じ時代に、ルキス・ロバーツ【Lewis Roberts】も——當時非常に有名な商業百科辭典たりし『商人の商業地圖』(The merchants mappe of commerce. 1638.)の著者——貴金屬の自由輸出賛成論を唱へ

費を超えた實質上の輸出超過のみが、國民を富まし得るに過ぎない(第十五章)。概言すれば、マンは貿易を指導すべしとする總ての強行法に、反對するのである(第十章以下)。——貿易の均衡が彼にとつて重大と思はれれば思はれる程、益、以て綿密にこれが計算を行つたのは、當然である。そこで、例へば、難船とかジエスウキツト税等の如き諸項目までも、看過するを許さない。従つて輸出が英吉利船で行はれた場合、運送費として輸出價値に二割五分加算する時は、同じ前提の下に於て、輸入價値からも二割五分差引かなければならぬ(第二十章)。その外、各の貿易差額に於ては、三人の當事者を區別すべきである。即ち國民が全體として利益する場合に商人が損をすることあり、またその反對の場合もある。この際、王は常にその關稅によつて利益を受ける(第七章)。——マンが彼の國人に私淑すべしと薦めてゐる模範は、常に和蘭・ヴェニス・シエノア・トスカナ、即ち彼の時代にあつては、疑もなく、國民經濟上最も高度に發達した國々である。彼は如何にも上手に、自然の富と人爲の富とを對立せしめたが、勿論、例へば英吉利や土耳其は第一の範疇に、和蘭や伊太利は第二の範疇に屬する(第十九章)。なほ

た。それは次の書である。『交易の寶』(The treasure of trafficke, or a discourse of forraigne trade. 4. London 1611.)

マンは、和蘭國民を非常に尊敬してゐたが、それだけにまた、彼等の友人とはならなかつた(第三章)。和蘭の偉大は、本來、英吉利領海内の漁業に基き、英吉利國民を害すること、佛蘭西または西班牙の競争よりも事實遙かに甚しい(第九章)。西班牙が亞米利加金銀の慈雨を極く僅かしか有効に確保し得ないのは抑、何によるか、といふ事情は、この國の生産物が貧弱で而も戦争が屢行はれたといふ理由に據つて、説明し得るであらう(第六章)。凡そ鑄貨の品位惡化乃至名目的引上げは、抑、國庫充實を目的として行はれやうが、或は國內保有正貨増加の爲めに行はれやうが、何れも、マンによつて否認される(第八章)。高利(usury)の徴收は商業にとつて

1) この點に於て、彼はサー・ロバート・コットン [Sir Robert Cotton] といふ一人の卓越した戰友を持つ。故意の惡貨改鑄に對する彼の非凡な反對演説は、千六百二十六年九月二日に樞密院で行はれ、千六百四十一年、五十一年、七十九年と數回出版された。マカロツク『文獻』一五五頁參照。【この演説は、マカロツク『稀觀書集』の中に收められてゐる。A speech made by Sir Robert Cotton before the Lords of his Majesties most Honourable Privy Council, touching the alteration of coyn. London 1651. (In Mc Culloch: A select collection of scarce and valuable tracts on money.)】——伊太利の如きにあつては、なほガリアニ [Galvani] の『貨幣論』(Della moneta, III. 3.) が、惡貨改鑄の詭辯的辯護を敢てすることのできた時代既に、甚だ重大なこの問題を理論的に解決したことは、英吉利の名譽である。

不利益ではない、と考へられる(第十五章)。反對に諸の重税は、唯だ戦争危險に對して認められるのみ。財政策としての官職販買は、無條件に非難される(第十六章)。國家の金銀退藏は、マンの非常に賛成するところである(第十七章)。併し如何なる年と雖も國民が貿易均衡によつて獲得したところ以上を、堆積すべきではない(第十八章)。

第六章 英吉利革命

大革命戦の著述家たちのうち、純粹な政治學者は總てこれを考慮外に置き、たゞトマス・ホッブズ【Thomas Hobbes】とジエイムス・ハリントン【James Harrington】との二人だけを、比較的詳しく研究したい。

48
ホッブズ（一五八八—一六七九）は、聖書に對しては表面上甚だ敬意を表してゐるが、その哲學體系は、本質的にはなほ唯物論である。彼の認識論は、主として昔のエピクルの學說と同じ響きを持つ。併し、何といつても、ホッブズは智の人であり、飽くまでも思惟を徹底させる人である。これは、就中、『リヴァイアサン』に述べられてゐる徹底的な國家個人平行論に於て、否認し得ないところであらう。國家自體は、言はゞ人工的な人間で、元首はこれが精神をなす。役人たちは四肢に當り、諸の會議はとりわけ記憶に、對外使節等は眼に、警察官たちは手に相當する。賞罰は神經に、國民の富は體力に、國民の福祉は職業に、植民は生殖に較べられる。斯くて、法律と權利とは國家の理性であり、市民たちの和合

はその健康、暴動は病氣、内亂は國家の死亡である¹⁾。——ホッ
 プスは青年時代の教育に於て、ペイコンに影響され、ガリレイ
 【Galilei】とガッサンディ【Gassendi】とを友とし、自らは優秀な數
 學者兼物理學者であつたが、これらの科學を研究した爲め、正確
 な觀察に習熟し、従つてまた、當時の體系的哲學者たちに對して
 は、實に屢々激烈な輕侮の意を表してゐる。——ところで、國民
 經濟の人間の並びに歴史的全體に對する比較的深奥な洞察は、
 無論、唯物論とは結合することができない。たゞ經濟學のうち、
 數學に最も近い部分であつて、その全體に對する關係が、大體、解
 剖學の人類學に對する、或は國土の三角法的記録の地理學に對
 するが如き關係にある場合、——この場合には、聰明にして觀察
 犀利な唯物論者は、常に、優秀な準備作業をすることができ
 であらう。そして斯學の比較的抽象的な分野に於ける、斯様な準
 備作業こそ、いふまでもなく、ホッブスの功に歸すべきものであ

1) 【リヴァイアサン】第一章その他隨所。【本書は、最初千六百五十一年、次の標題を以て出版された。Leviathan or the matter, formes, and power of a common-wealth, ecclesiasticall and civil. London 1651. ロッシャーが本書で引用してゐるのはその拉丁譯であつて、千六百五十一年版とは幾分相違してゐる。そこで、この邦譯書では、右英原著第一版及び商大圖書館所藏の拉丁譯本 Leviathan. Sive de materia, forma et potestate civitatis ecclesiasticae et civilis. (刊年不明)を参照した。】

る。

我々は、たゞ『リヴァイアサン』の第二十四章と『市民論』(Elementa Philosophica de cive)なる著書の第十三章とを比較し、さへすれば宜しい¹⁾。我々が本章の最初に當面するものは、一個の立派な國民經濟學教材分類表である。——總じて巧妙な分類は、實にホッブスの最大の特長に屬する。——『國家の榮養は、生活に必要な物資の豊富と、その分配と、これが公衆の使用への準備及び適用とに懸る。』(『リヴァイアサン』第二十四章)【英原著一二七頁——『國家の榮養は、生活の準備に、及び調整されたときは、公衆の使用への適當な導管による、これが運搬に、存する。』(拉丁譯二二二頁)では次の如くとなつてゐる。『國家の榮養は、生活に必要な物資の豊富と分配とに、その準備に、及び公衆の使用への適用に懸かる。』】明かに、ジュー・ペー・セー以來經濟學を生産論分配論消費論に分類するのと、全く同一轍ではないか。——『かの財貨従つて食糧品の數量は、自然そのものによつて制限されてゐて、我々の共同の母の乳房たる土地と海とから生ずる諸の果實より成立ち、神はこれを人類に自由に恵み賜ふか、又はただ勞働に代へてのみ賣り賜ふた。【……】必需品の豊富は、神の御恵みに次いで、たゞ人間の經營と勞働とに懸るだけである。』(『リヴァイアサン』第二十

1) 後の著書は千六百四十二年【この邦譯書では、千六百四十八年の巴里版を引用する】に、前の著書は千六百五十一年に著はされた。

四章【拉丁譯一二七頁】。別の個所【『市民論』拉丁原著二一三頁】では次の如くに言ふ。『市民の致富に必要なものは労働と貯蓄との二者であり、有用なものは第三者即ち地と水との自然收入である。第四者即ち戦争は、時によると市民たちの財産を増加することもあるが併しそれを減少せしめることの方が多い。最初の二者のみが必要なく可らざるものである。蓋し、島嶼の上にあつて、大いさは居住に必要な程度を超えず、播種なく漁撈も行はれない國家にあつては、たゞ商工業によつてのみ富有となり得るに過ぎないから。』直ぐその次には戦争は經濟上一種の博奕で、これによつて多くの者は貧乏となり、たゞ極く少數の者のみが金持となる、と明確に繰り返へしてゐる。それ故、凡そ經濟上の立法は、次の三點を中心として行はれる、曰く、*Proventus terrae et aquae, labor et parsimonia*。【地と水との果實、労働及び貯蓄】（『市民論』第十三章第十四節【二一四頁】）。斯くて本質的には、萌芽の状態にあるリカルド説である！*Parsimonia*【貯蓄】とは、我々が資本と呼ぶところのものであるが、それは過去労働の蓄積された結果である。即ちこの理論家に取つては労働が前景に立ち、土地は遙か後方に退いてゐるのである。——進んで自然の所産は、*nativa*【國産品】と *externa*【外國品】とに分類される。ところで、凡そ國土にして、必要なものは

50

悉く産出し、餘計なものは少しも生産しない、といふやうなものはまづないから、茲に於てか交換は發生し、過剰な『國産品』をも最早過剰たらしめず、『外國品』の輸入によつて『國産品』の不足を補ふこととなる。茲でホッブスは、甚だ正當にも、人間労働も他のものと異らず、凡ゆる種類の財貨に交換され得ることを認めてゐる（『リヴァイヤサン』第二十四章。交換殊に輸出入以外、所有權もまた、ホッブスによれば、『財貨の分配』なる項目の下に取扱はれる。——甚だ興味のあるのは *concoctio bonorum*【諸財貨の調整】に關する彼の見解で、この語の下に彼の理解するところは、貯藏せらるべき諸財貨を、價値は同一であるが運搬にはより、容易な物に換算し、その結果、市民たちをして大した困難もなく、自己の貨幣により隨所に生活するを可能ならしめること、これである。この働きを行ひ得るものは金銀貨のみである、とホッブスは考へる。『地上殆んど到る處に於て、金銀は、實にその素材の故を以て最高の評價を受けるのみならず、他の諸財貨の最も適當な尺度でもある。一つの國の内部だけであれば、勿論どんな素材でも、凡そ官憲がこれに極印を押した場合には鑄貨となり、交換される諸財貨を測定するに適するであらう。併し金銀貨に至つては、到る處に於て通用する。【……………】金銀貨はまた、素材自體によつて

評價されるものであるから、一國又は少數の國々によつて、その價格の騰貴又は減少を強ひられることがない。これに反し、より質の悪い素材で造られた貨幣は、その價格を容易に騰貴したり低落したりすることができ、而もこれは、國家の軍勢を必要に應じて外國に派遣し、海外で軍隊に武装させ、これを維持するといふ、金銀貨の營み得る如き作用を行ふことができず、常に國內に止つて、或る時は比較的高き又或る時は比較的低き評價を受け、これを所有する人々に損害を被らしめざれば止まぬ。【*】總じて貨幣

【* 拉丁譯、一二三——二四頁。この一句は、英原著(一三〇頁)では次の如くになつてゐる。『そしてこれは金と銀と貨幣 (Gold, and Silver, and Money) 以外の何ものでもない。蓋し、金銀は、(偶々) 世界中の殆んど總ての國々に於て高く評價されてゐるから、國家間に於ける凡ゆる他物の價値の適當な尺度である。そして貨幣は (國の元首が抑々如何なる物質によつて鑄造しやうとも)、この國の臣民たちの間にあつては、他の總てのものの充分な價値尺度である。この尺度を手段とすることによつて、凡ゆる財貨は、動産も不動産も總て、人間に伴はれ、平常の居所の内外を問はず、凡そ彼の到る總ての場所に、ついて行く。またこのものは、人から人へと國內を渡り歩き、(その通過する際に) その總ての地方を養ひながら巡り歩く。……』

そして金銀は、その價値を素材自體から得るものであるから、第一に、凡ゆる場所に於ける諸財貨の共通の尺度として、一國又は少數の國々によりその價値が變へられることはあり得ない、といふこの特權を持つ。然るに、悪い貨幣の方は、容易に變へられたり、悪くされたりすることがある。

は國家の血液である、とホッブスは言ふ。即ち、貨幣は國內を遍歴し、その際手中を通過した個々の市民を養ふこと、恰も體内の血液が榮養分より成立ち、その循環を媒介として個々の肢體を養ふ如くである。特に國庫は心臟に、歳入は靜脈に、歳出は動脈に相當する(『リヴァイヤサン』第二十四章)。

ホッブスの實際的意見は、周知の如く、この上もなく嚴格な專制主義である。が、これは通例考へられてゐるやうな意味に於てではない。蓋し、ホッブスは、一生涯ステュアート王朝黨の熱心な擁護者であり、而も三大國家形態の中、君主政體に對して斷然優位を許してはゐるが(『市民論』第十章、『リヴァイヤサン』第十九章)、このことは、學問上彼にとつて第二次的意義を持つに過ぎぬ。ホッブスにとつて大事なことは、抑々君主政體であらうが、貴族政體であらうが、將又、民主政體であらうが、兎に角國家權力なるものは不可分無制限たらざる可らず、といふことこれ

第二に、それは、諸の國家をして、必要に應じ軍隊を動員したり外國に派遣したりさせ、また臣民の旅行する者のみならず全軍隊にまで食糧を供給することを得せしめる、といふ特權を持つ。併し素材によつてではなく品位の極印によつて價値の生ずる如き鑄貨は、外形の變化に耐え得ないから、たゞ國內だけで通用し得るに止まる。而も國內に於ても、それは法律の變化を被つて價値を減じ、屢々これを所有してゐる人々に損害を與へることがある。』

である。といふのは、萬人の萬人に對する自然の戦争を國家てふ形に於て緩和し得る途は、各個人がその總ての權力を同一の個人又は同一の會議に委任することによるのみであるから¹⁾。
ホッブスの實
踐經濟學はこの

1) Ego huic homini (vel huic coetui) auctoritatem et ius meum regendi meipsum concedo, ea conditione, ut tu quoque tuam auctoritatem et ius tuum tui regendi in eundem transferas. 【余は、余自身を支配する余の権能と権利とをこの人(またはこの會議)に譲渡する、英原著は「權利を與へてこれを放棄する」となつてゐる 汝が汝自身を支配する権能と権利とをこれに移譲するといふ條件の下に。英原著では次の如くになつてゐる。『汝が汝の権能を放棄してこれを彼に與へ、余と同様に彼の總ての行為を承認する、といふこの條件の下に。』】(『リヴァイアサン』第十七章【拉丁譯八五頁、英原著八七頁】・『市民論』第五章參照) ホッブスがこの根本思想から引出した驚くべき歸結は、『市民論』第十二章の目次によつて、最も明瞭に示されてゐる。曰く Inducationem boni et mali ad singulos pertinere, seditiosa opinio. Peccare subditos (posse) obediendo principibus suis, seditiosa opinio. Tyrannicidium esse licitum, seditiosa opinio. Subiectos esse legibus civilibus etiam eos, qui habent summum imperium, seditiosa opinio. Imperium summum posse dividi, seditiosa opinio. Fidem et sanctitatem non studio et ratione acquiri, sed semper supernaturaliter infundi et inspirari, seditiosa opinio. Civibus singulis esse rerum suarum proprietatem sive dominium absolutum, seditiosa opinio, cett. 【善惡の判斷が私人に屬するとするのは、煽動者流の見解である。臣民が君主に服従することによつて罪を犯すことありとするのは、煽動者流の見解である。暴君弑逆は許し得べきことであるとするのは、煽動者流の見解である。主權を持つ人々も民法に従ふべしとするのは、煽動者流の見解である。主權を分割し得るとするのは、煽動者流の見解である。信仰と神聖とは、精進と理性とによつて

基礎に應じてゐる。『凡そ所有は』……『國家權力に基因する。何となれば、自然状態に於ては、萬物悉く萬人に屬して永久の戦が支配し、總ての財貨は、これを強取し、武器を以てこれを固守する人々のものとなり、従つて此處には、所有も共同社會も生ぜずして、鬭争が發生するから。ところで所有の創成は國家の作用であるが故に、それは即ち國家に於て最高權力を持つてゐる者の作用でもある。』(『リヴァイアサン』第二十四章) 【拉丁譯一三一—一三二頁、英原著一三七—一三八頁。『榮養を蔽へば、所有權 (property) の設定を言ひ、總ての種類の物との、即ち一言にしてこれを何となれば、國家のない處には、(既に述べた如く) 各人對隣人の永久の戦が有り、従つて凡ゆるものは、これを獲得し力に依つて保持する人の物となり、それは所有でもなければ、共同社會 (community) でもなくして、不確定 (uncertainty) であるから。……従つて所有の設定は國家の作用であり、國家はこれを代表する人格によるに非ずんば何事をも爲し得ないが故に、それは即ち、元首の作用たるに過ぎない。』従つて何人と雖も、元首の至上權を排斥する様な形に於て、所有權を持つことはできない。或は往々にして後者を相手取つて訴訟の起されることもあらう。併しその場合は、元首が抑、何を正當に爲し得るか、といふことが問題となるのではなく、何を爲さんと欲するか、といふ

得られるものでなく、常に超自然的に注入され吹き込まれるものであるとするのは、煽動者流の見解である。各臣民が自己の財貨の所有權又は絶對的支配權を持つとするのは、煽動者流の見解である。等々。】(『リヴァイアサン』第二十九章參照。)

ことが問題となるに過ぎない。従つて裁判の判決は元首自身の権限に属するのである（『市民論 第六章第十五節』）。*Nam qui dominum habent, dominum non habent. Civitas autem civium omnium domina est. Dominum ergo et proprietatem tua tanta est et tandem durat, quanta et quantum ipsa vult.* 【何となれば支配者を持つものは主権を持たぬ。……】と
 ところで國家は、『ホッブスの原著では此處に 總ての市民の支配者である。著者はこの問に次の如く述べられてゐる。』市民の支配が企てられる前には、何人と雖も所有權を持たず、萬物は萬人の共有に屬してゐた。従つて敢えて問ふ。抑、國家に由らずして、而も汝がこの所有を獲得する途があつたか。各人が自己の權利を國家に委任することなくして、而も國家がこれを獲得する途があつたか。従つて汝もまた汝の權利を放棄してこれを國家に與へたのである。』
 従つて、汝の領地と所有とは、正に國家の欲するだけ及び國家の嘉する間だけ續くであらう。』（『市民論』第十一章第七節「一九一頁」）殊に新しく開拓された地方又は征服された地方の土地分配は、全く元首に倚存する。『斯くてそれは【拉丁譯では「王又は最」自己の利益に反すること否な彼自身の良心に反し、彼の約束に反し、自然法に反したことを澤山行ふことさへできる。【……】併しそれを理由として、市民が劍を採つたり、元首を訴へたりすること否な元首に就いて何か悪様にいふことを許すだけでさへ、それは否認さるべきことである。』（『リヴァイアサン』第二十四章【拉丁譯一二二頁】）【原著では、こ

の一文は次の如くになつてゐる。『成る程、王又は最高會議の大多數は、自己の情を遂げる際、自ら良心に反し、従つて信認を裏切つたり自然法を犯したりするやうなことを、澤山爲せと命ずることがあるかも知れぬ。併し、これは、元首に戦をしかけたり、權利侵害の告訴をする途に立入つたり、或は、何等かの方法で、元首を誹謗したりする權利を、臣民の何人かに與へる充分な理由とは、ぬらぬら』——土地の分配に際し、元首が一定の土地を自らに保留する場合と雖も（御料地！）、公の諸需要に應ずるに當つては、必ずしもこれだけに制限さるべきでない。そうでなければ、經費を使ふことの多い政府の如きは、國家全體を破産せしめるに至るかも知れないから（『リヴァイアサン』第二十四章）。統治者が租税を無制限に課する權利も、この理由に據つて自から明白となる。若しそうでなければ、兵士たちを維持する無制限の權利をも有効ならしめることが、どうしてできやうぞ（『市民論』第六章第十五節、『リヴァイアサン』第十八章）。租税なるものは、本來、國民の勤勉が敵の攻撃によつて妨碍されないやうに、劍を採つて防衛する人々の報酬以外の何物でもない。それにも拘らず、ホッブスは熱心に忠告して言ふ。多數人民の愚昧なる、或は暴動を起す氣になることもあらうから、租税の負擔を餘りに重からしめてはならない（『市民論』第十二章第九節）。蓋し彼等は、この場合貧窮を自己の怠惰と浪費とに歸せずして、租税の重荷に歸するが故に（『市民論』第十三章第十節）と。ホッブスはまた、君主政體に於ける方が民主政體の場合より、租税

が輕くなるを常としたのは何故か、といふことに對し、喜んで注意を促してゐる（『市民論』第十章第六節）。そこで何より重大な問題は、租税を平等に課することである。何となれば、不平等な租税は、大抵の場合高い租税より壓迫が甚しいと考へられるから（『市民論』第十三章第十節）。併しこの平等は、負擔と受益との平衡に存する。國家の與へる身體上の保護に對しては、貧富ともに同額を支拂はなければならぬ。——但し、富者の方は、その身體以外に、保險すべきものを持つてはゐるが。——問題はたゞ、租税を課するに營利及び所有を標準とすべきか、或は消費を標準とすべきか、といふ點に存する。勿論ホッブスが斷然賛成するのは、後者である。『蓋し勤勉と貯蓄とによつて自己の生活資料を獲得したのも、怠惰と浪費とによつて自己の生活資料を使い果たしたのも、共に國家から同一の保護を享受したのであるから、後者より前者に重く課税するのは公平でない。』【拉丁譯一八二頁】 従つて租税は、人間の上に課すべきものでなく、消費對象の上に課すべきものである（『リヴァリアサン』第三十章、『市民論』第十三章第十一節）¹⁾。

1) この考は、人も知る如く、長期議會【千六百四十年召集千六百六十年解散の英吉利議會】の時代、英吉利間接税制度の創設によつて、正に

なほ進んでホッブスは、臣民相互間の交易を指導し、工業に於ては怠惰を禁じ、勤勉を奨励し、總て不相應な奢侈を妨ぐべき法律に就いて論じてはゐるが（『市民論』第十三章第十四節、『リヴァリアサン』第二十四章併し、斯様な監督が過度に行はれることを嚴に戒めてゐる。法律の命令は、國家及び國民の眞正なる利益を促進する以上に互つてはならない（『市民論』第十三章第十五節）。輸出入は、その對象に就いても通商の場所に關しても、大抵の場合、斯かる國家の指導を必要とする。『即ち、若しこの點に於て各人が自分自身の意志に従ふことを許されるときは、私の利益に驅られて、國家に害を與へ得べきものを敵國に賣つたり、國民には或は氣に入るとしても有害又は少くとも無益なものを輸入したりするものが、ないとは限らないから。』（『リヴァリアサン』第二十四章【拉丁譯一二三頁】。——ホッブスは、故なくして貧困に陥つたものに、必要缺く可らざる生活必需品を給すべき、國家の義務を推論してゐるが、その理由は、若し然らざる場合、彼等は、極端な窮迫に際し

三 實行されるに至つたが、それ以前には、たゞ直接税と關税とがあつただけである。凡そ間接税は、中流階級の諸消費對象から取立てられた場合だけしか、相當な租税收入を與へないから、大抵の國民に於て見られる如く、既に顯著な中流階級が形成せられてゐる様な文化段階に至つて始めて、成立するものである。

て盗掠する *iure naturae* 【自然の権利】を賦與せらるべきが故である。なほ労働能力ある貧民たちには、労働を強制すべきである。この場合ホッブスが特に考へてゐるのは移植民のことであるが、植民すべき土地の土人たちは絶滅すべきものでなく、たゞ地域の制限と農耕とを強制するだけに止めなければならぬ（『リヴァイアサン』第三十章）。

ホッブスの反対者中特に卓越してゐる者は、ジュ、エ、ム、ス、ハリントン、（一六一一—一六七七）で、有名なオケアナ理想國に於てのみならず、その他の諸著作に於ても、『リヴァイアサン』の著者に向つて熱心に論戦してゐる¹⁾。勿論構想と體系的成果並びに形式の精緻な點に至つては、此は彼に遙かに及ばない。併し、歴史に精通してゐる點に於ては、此は彼より斷然優れてゐる。ハリントンの學問的方法は、観察と比較とに基き、哲學の深奥より造り出される如き論斷は、彼の好まざるところである。彼の實際上の目標は、人も知る如く、ホッブスの専政主義と正反對で、適度中庸の民主々義である。彼はクロムウエルの獨裁に満足しなかつたことは、ミルトンと同様であつた。

1) ジョン・トーランド編『ジェイムス・ハリントン全集』(The Oceana of James Harrington and his other works. The whole collected, methodiz'd and review'd etc. by John Toland. London 1700.)

ハリントンの理論全體の中心點と見做し得べき命題は、凡ゆる國體の本質が土地所有の分配方法に懸かる、といふことである (Balance of property 【所有の均衡】)。一個人が總ての土地を所有するか、または少くともその壓倒的部分即ち約四分の三を所有してゐる處には、土耳其又はジ・ゼフ時代の埃及に於けるが如き絶體君主制が見出され、貴族だけかまたは貴族と僧侶と合體したものが、壓倒的土地所有者である處には、西班牙並びに從來の英吉利に於けるが如き混合君主制が成立する（『オケアナ』）。勿論嚴格に言へば、後者にあつては、貴族政治を云爲しなければならぬが、經驗の教へるところに従へば、君主制を持たない貴族政治なるものは、貴族中の誰も彼も、が他の貴族たちを支配しやうと努めるところから、永久の戦争状態に陥る。最後に一個人だけの優越がなくなり國民全體の間に土地が分配されてゐる處には、民主政治が成立する。三個の國家形態の變態も、同じ根本思想に還元される。例へば、暴君專政は、一個人が何等壓倒的土地所有を持たないに拘らず、無制限支配を固執する處に、生ずるが如きこれである。若し夫れ、暴君寡頭政治家又は無政府主義者たちの土地所有が、真正の支配を行ふに足りる程大きくなく、而も軍隊を維持するには充分であるといふ場合には、内亂状態が発生する。かの三個の變態は

何れも建物と土臺との間の矛盾に立脚する。併し暫く経てば、建物が土臺と同化するか又は土臺が建物と同化するに至るから、この矛盾は決して永續し得ない。この闘争が最も長く続くのは、土地所有が國家の各要素間に平等に分配されてゐる場合例へば貴族が庶民と同じ大さの土地を持つ如き場合である。併しこの場合にあつても、雅典に於ては庶民の側から貴族に對して行はれ、羅馬に於ては貴族の側から庶民に對して行はれた如く、一方の對立者は必ずや他方を滅すに至るものである。——如上『土地所有の均衡』に就いて述べたことが貨幣所有の上にも移され得るのは、たゞ例外の場合、即ち和蘭やジェノアの如く、少ししか土地を持たないか又は全然持たないところの商業諸國に限る。蓋し他の處にあつては、メリウス【Melius】やマンリウス【Manlius】の如き人の手中に在る多額の貨幣所有は、一時危険を呼び起すことはあらうとも、眞に永續的に根を下ろすことは滅多にないから¹⁾。かくて小さな商業國フロレンスでは、メディチ家の貨幣財産は兎に角政治上の變革を惹起したけれども、インド人の財寶は西班牙の勢力均衡と財産均衡とを變更することができなかつたし、ヘンリー

1) 『オケアナ』(『The commonwealth of』 Oceana.) 三九頁以下。『政治の體系』(System of politics.) 四九七頁以下(第二、第三章)。

七世の集めた多額の財寶も、英吉利のそれを變更することはできなかつた¹⁾。

ハリントンは、上に研究した自然法則の全體を、甚だ單純に次の事實に、即ち總ての權力は臣下就中兵士たちを維持する能力の如何に懸かり、而もこの種の能力の繼續的所有は土地所得によつて決定される、といふ事實に歸してゐる²⁾。自分の考へるところによれば、この眞理は昔から知られてゐることだと説明した反對者に對して彼自らを辯護する爲め、ハリントンは自己の發見を、血液循環に關するハーヴェイ【Harvey】の説に比してゐる³⁾。而して事實ハリントンの理論は極めて一方的であり粗笨ではあるが、それが國民經濟と政治とを學問上關聯せしめるといふ立派な企圖を含んでゐる事實は、否定するを許さない。凡そ經濟學は、共に調和して發展せしむべき二個の主たる側面を持つ、一に曰く倫理的・政治的側面、二に曰く物質的・經濟的側面。ところでホッブスが後者に就いて貢獻したと正に同じ程度に於て、ハリント

1) 『民主政府の特權』(The prerogative of popular government.) 二四六頁以下(第一編第三章)。

2) 『民主政府の特權』二四三、二四九頁(第一編第三章)。

3) 同書二四九頁。トーランドも(Life of J. Harrington. p. XVIII.) 主人公の發見を、火藥・印刷術・眼鏡等の發見に比してゐる。

ンは前者に關して貢獻したのである。

ハリントンはその根本的見解に従つて、總ての革命を二つの種類に分つ。自然的即ち内生的及び暴力的外生的の二つがこれである。その分類の標準は、財産の重心が平和的交通によつて移されるか、又は征服と没收とによつて移されるか、といふ點に存する。後の過程は更に、君主的方法によつて行はれるか、貴族的方法によつて行はれるか、又は民主的方法によつて行はれるか、貴族が特色を示すべき先例を提供してゐるものは、就中、マホメットと民族移動とカナンに於けるイスラエル人とである。諸の革命中、前の種類に屬するものは、就中英吉利國家の變遷で、著者はこれが最も深い根據を、ヘンリー七世の諸立法手段——大采邑の細分と讓渡とを容易ならしめ、後更にヘンリー八世の僧院領解放を生じ、その結果、財産の均衡が貴族的なものから民主的なものに變つた——の中に認めてゐる。斯様な革命に向ふ主な手段は、いつも、現存の均衡を確固不動の状態に固定する諸の農業法である。然る後始めて、國家といふ建物の建築はその基礎に相應した靜けさの中に、遂行されるであらう！。かの第一種の革

1) 『立法の技術』(The art of law-giving.) 三八八頁以下(第一編第二章)。

命は、色々な途を通じて行はれ得る。イスラエル人とラケデモニア人とは、一つの家族に授けられた土地の絶體的讓渡禁止を通じてこれを行はんとした。併しその結果、持てる人々は法外に安固となり、持たざる人々は法外に絶望となり、斯くして國民の勤勉は害はれた¹⁾。民主政治にとつては、同一人の手中に土地が兼併され過ぎることを妨げさへすれば充分であり、混合君主制にとつては、過度の分散を禁じなければならぬ。斯くて、例へば英吉利ぐらゐの大きさの國では、三百人以上に及ぶ均衡の分散は王國の崩壊を意味し、五千人以下の分配は共和國の崩壊を意味する²⁾。現在の諸状態の下に於て、著者はそのオケアナ理想國に對し、次の田制を薦める。年々二千磅以上の土地所得を持ち而も數人の男子を持つものは、その死に際し、總ての子供等が同じだけ受取るか、乃至は、最も年長者、最も寵愛を受けた者もなほ二千磅以上を受取らない様に、分配せねばならぬ。尚ほ誰でも、相續に依らずして年々二千磅以上の土地所得を蓄積してはならず、女子の婚資は相續人たる女子だけは別として、一千五百磅の額を超へてはならない。一言にしてこれを蔽へば、如何なる生存中の均持も、また如何なる

1) 『民主政府の特權』二九一頁(第一編第十一章)。

2) 『立法の技術』三九二頁(第一編第三章)。

物持の家族も、何等苦痛を感じず、而もこの制限内に於ては、二千磅以上の土地所得を持つ大財産の成立を、できる限り妨礙しやうといふのが、この法律の目的である¹⁾。——モーゼ【Mose】の利子禁止とリクルゴス【Lycurgus】の貴金屬貨幣禁止とを説明するに當つても、ハリントンは同じ考に據り、たゞその適用を更に嚴格にしただけである。即ちスパルタ【Sparta】とパレスチナ【Palästina】とは非常に小さかつたから、甚だしく發達した貨幣財産は、土地財産を容易に凌駕し、従つて後者の最も堅固なる均衡をも破壊し得べき筈であつた。かの禁令は、この危険を豫防しやうとするにあつたのである²⁾。

私は結論として、ハリントンの田制が首都の甚しい膨脹と普通の田舎の憫むべき過剩人口とを惹き起すであらうとの非難に、彼が對立せしめてゐる、立派な議論に就いて述べやう³⁾。曰く、人口増加はそれ自體既に有益な或るものである。それは、都會からも田舎からも始まり得る。人口の多い都市は同じく人口の多い田舎を伴ひ、その反對の場合もまた同様である。たゞ前の場合にはそれが言はゞ授乳によつて行はれ、後の場合には離乳に依つて行はれ

る。何となれば都市の繁榮は、附近村落の販路を増加し、より多くの家畜を養ひ、よりよく施肥すること等を可能ならしめ、進んでは排水その他に依つて耕作地の面積をさへ増加せしめるに至る。反對に人口稠密な田舎は、住民を促して農耕地以外更に他の補助手段をも採用せしめる。斯くて例へば、ゴートヴァンダル【Goth-Vandal】時代の如き戰鬪的移住、乃至は今日最も好まれてゐる工業及び都市生活が、發生するのである。

1) 『オケアナ』一〇二頁以下。

2) 『民主政府の特權』二四五頁（第一編第三章）。

3) 同書三〇〇頁以下（第一編第十一章）。

第七章 貿易に於ける和蘭繁榮の模倣

サー・トマス・カルペパー【Sir Thomas Culpeper】¹⁾に就いては、二つの小著が識られてゐる。その一つは、千六百二十三年『高利反對論』(A tract against the high rate of usury)なる標題の下に、議會に提出された覺書で、法定利率を一割から六歩に引下げることとを建白するにあつた。【慶應圖書館所藏原本には、A the High Court of Parliament. London 1621. なる標題が附いてゐる。本書は、その後チャイルドの『貿易及び金利に關する簡略なる諸考察』(後述)中に附録として再刻されたが、それにも A tract against usurie presented to the high court of parliament. London, printed in the year 1621, and now reprinted 1663. と附記されてゐる。従つて「カレント」に A tract against the high rate of usurie, presented to the high court of parliament. A. D. 1623. (By Sir Thomas Culpeper, Knt.) 4to. London 1623. とあるを踏襲したかに見ゆる、ロッシヤの】その二は、千六百四十年に於けるこれが續稿で、事實上八歩に達した利子低下(ジェイムス一世の治世二十一年法律第十七號)によつて生じた諸の良結果を利用し、更に繰返し繰返し新たな引下げを提議し、遂に和蘭並みの利率水準にまで至らしめやうとするにあつた。

1) 彼の生涯は殆んど識られず、その大崇拜者たるサー・ジョサイア・チャイルド【Sir Josiah Child】でさえ、カルペパーは一人の田舎貴族であつたらしい、と言つてゐるに止まる。

げにこの上もなく注目に値する著作たるこの兩書よ。比較的高度なる文化に伴ふ多くの兆候の相互關係に對する、一個の深い洞察は、無論著者に對して否定することを許さない。潑刺たる多方面に互つた、而も激しい競争を通じて刺戟された商業、自國の活潑な航海經營、外國の顧客たちに奉任するに當つて低廉なこと、租税や施物等を大した苦痛なしに高い収益にまで高める能力、喬木植林の經濟的可能性、高い土地價格——凡そこれらのものは、カルペパーに從へば、總て利率の低いことによつて條件付けられる。殊に彼は強調して曰ふ。利率が低いときは、新しい土地を買入れるより舊い土地を改良する方が有利である。然り、排水上の諸設備築堤、何か費用の嵩む施肥、鋤耕農業等は、植民地や工業的發明と同じく、たゞこの前提の下に於てのみ可能である。事實は正にその通り。唯だ惜しい哉、諸關係の相互作用を、完全にといつてよいくらゐ看過してゐる。低い利率なるものは、上掲諸事情の一つの原因たると同じく、また一つの結果でもある。それは正に高度に開發された國民經濟と呼ぶ同じ大有機體の、それぞれ皆異つた諸方面なのである。然るにカルペパーは、國家が利率を人為的に引下げることによつて、残り總ての諸事情を強制し得るかの如く考へてゐる。斯様な一面觀は、實際政治家たちにあつては、決して

珍しいことでない。保護關稅は、わがリスト【Friedrich von List】に至るまで、如何にも屢々文化と富とを創造する魔法の一種として、推稱され來つたではないか。而も理論家たちでさへ、彼等の學問の幼稚な時代には、實に屢々個々の重要な眞理に幻惑され、他の殆んど總ての諸眞理は、これを通ずることによつてのみ觀察し得るものである、と考へる。私は希臘に於ける最初の哲學者や自然研究者等を想ひ起す。——貿易均衡に就いては、カルペパーは所謂マーカンティルシステムに通例な諸見解に左袒してゐる。（從つてコルベールの誕生後四年にして、既にこの見解があつたわけである。）——外國よりの資本借入は、大抵は貴金屬の形でなく、過剩外國商品てふ形で這入つて來、元本として流入すべきものより、利子その他として國外に流出する方が多いであらうから、カルペパーは、これに對して甚しい厭惡の情を懷いてゐる。貿易上は逆均衡にして而も疲弊しない例外の場合もあるが、斯様な例外として、彼が擧げてゐるのは、人口稀薄で、住民たちがその地の自然生産物を使つても使ひ切れない國々である。

精神上、上述の著者と縁の近いものは、パロネット、サージ・サイアチャイルド【Sir Josiah Child】である。東印度會社重役としての彼の地位は、經濟學上に於ける彼の見解の闡明

に寄與したと同じく、その踏晦にも役立つたかも知れない¹⁾。併し兎に角、チャイルドは、彼自身の多年の経験から貿易に精通し、その結果を次の二つの著書の中に書き下ろした。【この點ロッシヤの言葉は幾分事實と相違してゐる。PrefaceとTrade and Interest of money considered etc.の】——『貿易及び金利に關する二部を加へ、改題して出版したのが後書である。】——『貿易及び金利に關する簡略なる諸考察』(Brief observations concerning trade and the interest of money.

By J. C. 4. London 1668.) (大部分は、既に千六百六十五年黒死病の際、チャイルドが田舎に住んでゐた時分の作である。)『貿易新論』(A new discourse of trade.

1690.) 五版グラスゴウ、一七五一年——私は、遺憾ながら後の書物而も千七百五十四年の佛蘭西譯だけしか利用し得なかつた。この外次の諸書もチャイルドが書いたものであるといふ。——匿名愛國者著『東印度貿易が凡ゆる外國貿易中最も國家的なることを證明する一論策』(A treatise, wherein it is demonstrated, that the East-India trade is the most national of all foreign trade. By philo-sophos. London 1681. 4.)『和蘭東印度會社重役の辯明を駁す』(Confutation of a treatise, intituled: A justification of the directors of the Netherlands East-India-

1) チャイルドは東印度貿易の效能を故意に誇張した、とするジェームス・ミル『英領印度史』(James Mill: History of British India.) 第一卷九五頁【千八百五十八年版、第一卷九一頁(?)】の非難參照。

Company. 1688.) [*]

チャイルドの體系にあつても、その中心點として取扱はるべき命題は、次の如くである。低い利率は凡ゆる富の causa causans【期成原因】で(六八頁【英原著八頁】)、その商業に對する關係は否なそればかりでなく、農業に對する關係も、丁度精神の肉體に對する關係と同じである(三六三頁【英原著一七七頁】)。これは既に英吉利

【* 茲にロッシヤの引用する『貿易新論』佛譯版とは Traité sur le commerce et sur les avantages qui resultent de la reduction d l'interest de l'argent. Amsterdam et Berlin 1751. であらう。但しこの佛譯本は A new discourse of trade. の千六百九十三年版(恐らく第一版)、千六百九十四年版(第二版)、千六百九十八年版(恐らく第三版)、刊年不明倫敦版(第四版と明記)、千七百五十一年版(第五版)の何れとも幾分相違してゐる。(例へば、この邦譯本一二九頁を見よ)。佛譯版の標題は Traité sur le commerce etc. とあつて『新』の字を冠してゐないから、その臺本は或はウォルフォード『保險百科辭典』(Walford: The insurance cyclopaedia.)の中に擧げられてゐる Discourse about trade. なる書物であるかも知れぬ。——その筆者はこの千六百九十年版を持つてゐることを明言してゐる。——そして若しこの推定にして誤なしとすれば、チャイルドのこの書物は増補又は改訂されつゝ次の如く三度標題を變へたものではあるまいか。(一) 千六百六十八年『貿易及び金利に關する簡略なる諸考察』、(二) 千六百九十年(又はそれ以前)『貿易論』、(三) 千六百九十三年『貿易新論』。以下私はこの邦譯書では、ロッシヤ引用の佛譯版と『貿易新論』第二版原文とを照合しつゝ、譯稿を進める。【英原著……頁】とあるのは、この第二版の頁數である。『和蘭東印度會社重役の辯明を駁す』は、見る事ができなかつた。】

に就いて看取し得るところで、此處では、利率の法律上の引下げが、全くこれに相當した富の増殖を伴つて來た。千六百五十一年、従つて六歩への利子引下げの方、上等馬車の數は百倍に増加し、その當時奥方が着て居た着物より更によい着物を、今は腰元たちが着けて居り、取引所では、當時一千磅を持つてゐた者よりなほ多數の人々が、今や一萬磅の財産を持つてゐる。千五百四十五年に於ける最初の利下げにまでも廻るときは、英吉利の富は爾來六倍してゐる(六九頁以下【英原著八頁以下】)。これと類似のことは、例へば和蘭乃至伊太利を、愛蘭土(その豊饒にも拘らず)や、西班牙(その金銀坑にも拘らず)や、土耳其などと比較することによつても、判明する。一言にしてこれを蔽へば、或る一つの國土が到達した富や商略等の程度は、利率の高さに據つて至極簡單に判定し得るのである(七四頁【英原著一三頁】)。——然るに當時既に、一人の炯眼な匿名著者があつて、『誤解せられたる金利』(Interest of money mistaken [: or a treatise proving, that the abatement of interest is the effect and not the cause of the riches of a nation and that six percent is a proportionable interest of the present condition of this Kingdom. London] 1668) なる書物の中でこれを首尾顛倒し、チャイルドの最初の著書に反對して、低い利率は國富の結果にしてその原因

に非ず、と叫んだ。そこで我がチャイルドはその反對なる所以を證明するの勞を採つたのである(七七—九八頁【英原著一四—二五頁】)。併し彼の事實上妥當な唯一の論據は、低い利率なるものは、事業家たちが無爲の金利生活を送つたりその子弟をさういふ風に教育したりするのを妨げると共に、これによつて國民の貯蓄をも促進するものである、といふ點に存する(八九頁以下、一一〇頁【英原著一八—四三頁】)。それにも拘らず、他の個所ではまた、卵は靴雞の原因であると共にその結果でもあるといふこと、以上の事柄とは、同じ關係にあるかもしれない、と告白してゐる(一一二—一五六頁【英原著四—四六三頁】)。——著者が個々の立法令の影響を甚しく過度に評價してゐることは、カルペパーと同じである(三頁【英原著第二〇—Preface】には頁數が附いてゐない)。否、な凡ゆる人間は本來平等であつて、唯だ法律の異なるによつてのみ差違を來たすに過ぎないとさへ、彼は卒直に考へてゐる(一四六、二九四頁【英原著七—四三頁】)。猶太人同志の間では、徵利を全然禁止するが、外國人からならこれを明白に差許してゐた、モーゼの法律は、利率に關する彼の理想である。これだけを以てしても既に、猶太國民は富有となつた筈である(九五頁以下【英原著二—四頁以下】)。蓋し二歩の利上げは、四分の關稅引上げより遙かに不利で、後者は單に一個の事業即ち輸出入のみを、而も僅

か年一回壓迫するに過ぎないが、前者は、總ての事業を、而も間斷なく壓迫する（三八頁【英原著序文】）。

なほ序ながら、凡そ利子の最終原因は資本それ自らの生産能性であるといふことは、チャイルドには、未だ全然知られてゐなかつた。彼が利子を表はす爲めに極めて屢、使つた *price of money*【貨幣の價格】なる表現が、既に、これを示してゐる。債權者たちは、常に債務者たちを犠牲として肥え太る（七九頁【英原著一四頁】）。而して殊に複利の驚くべき諸結果を思ふときは、何故に資本借入が爾く有害であるかといふことも、合點が行くに違ひないとチャイルドはいふ（九一頁【英原著二二頁】）。誰人でも、過剰な手持現金があればこれを銀行家に委託するといふ、今日英吉利で非常に高度に發達してゐる習慣は、當時漸く始つた計りであつた。明かにこの習慣は、貨幣の廉價利率の低廉に、與つて力あるには相違ない。然るにチャイルドは、反對の見解を持つてゐたのである（四六頁【英原著序文】）。——彼の理論上の諸見解に就いては、なほこの外に、次の諸點が重要である。彼は、商業の隆盛と高い地價との必然的な相互關係を、極めてよく注意してゐる。1) 二二頁【英原著序

1) Land and trade are twins: it cannot be ill with trade, but

文】。尙ほ、生活資料の繼續的價格騰貴は富國にのみ生じ、その反對もまた然りといふことも、證明されてゐる。これに反し、貧民にとつては一時的な騰貴の年でさへ、特別に豐作の年より有利である筈だといふのは、明白な誇張である（八一頁以下【英原著一】）。——殊に立派に展開されてゐるのは、國民の増加に關するチャイルドの諸見解である。勿論彼は、十七八世紀に甚だ廣く普及してゐた誤謬に左袒し、人口の増加が何時も富と文化との進歩たらざるを得ないかの如くに、考へてはゐる。（二九八頁【佛譯本には此處に「土地を耕し、商業を營む者が人間でればする程、益々以て、耕作に於てまた商業に於て、進歩を遂げる」なる一句があるが「貿易新論」では、私の参照した何れの版にもこれに相當する句がない。】）併しこの場合にもその基礎に横はつてゐる條件付きの眞理、三六八頁以下【英原著二七頁以下】は、他のものより比較を絶する程平明な言葉で、言ひ表はされてゐる。ところで人口増殖の諸前提に就いては、チャイルドは、對米移民の爲めに英吉利國民の數が減少したとする議論に、甚だ熱心に反對する（三七一頁以下【英原著一八二頁以下】）¹⁾。『我が國の人口は、我々

land will fall or ill with land, but trade will feel it. 【土地と商業とは双生兒である。商業が病氣になりながら土地が倒れないといふことはあり得ないし、又土地が病氣になりながら商業がこれを感じないといふこともあり得ない】（序文）。

1) 斯様に論じたロージャー・コーク [Roger Coke] に就ては、下出第

が與へ得る限りの就職口と常に比例を保つであらう。今英吉利が僅か百人しか備ひ得ないのに、百五十人も「生み且つ」養つたとすれば、我々が植民地を持つてゐやうがゐまいが、これに顧慮することなく、五十人は移住又は死亡せざるを得ないであらう。他方に於て、植民地生活が安樂である、といふやうな事情によつて誘惑され、實際餘りにも甚しく移住が行はれるに至つたとしても、母國內に於ける人口の不足は、瞬く間に而も自然に再び補充されるに至るであらう。人間の不足は、勞銀の暴騰を惹起すべく、それは更に結婚の數と移入民の數との増加に導くであらう(三七九頁以下、一四九頁【英原著一八六頁以下、五八頁】)。即ちチャイルドの説は、全くマルサス法則の萌芽である! — 當時大抵の經濟學者たちに於ける如く、チャイルドにあつても所謂貿易均衡なるものが大きな役割を演じてゐる。彼はこの大問題の發見者を尊敬し(三一四頁【英原著一五三頁】)、外國工業品の使用が一國にとつて有害であればある程、彌、その解決は重要となる(八三五八頁【英原著一七五頁】)と言ふ。低い利率が特に甚しく賞讃されるのも、それが均衡を順ならしめるための主要手段だからである(一〇一頁【英原著二七頁】)。併し正にその故を以て、チャ

八章を見よ。

イルドは、均衡を發見する爲めの普通の方法に對し、多くの重大な抗議を行つてゐる(三一三六三頁【英原著一七五頁】)。そこで彼は、例へば、密輸入と間違つた評價とによつて生じた關稅登錄の不正確性に就いて述べる。諸輸入品の價值からは、自家運送の料金が差引かれねばならぬ。輸出が損失を生じたり、輸入が有利に購はれたりした爲め、外見上の順均衡が貧弱となり、外見上の逆均衡が豊富となるが如きは、稀なことでない。愛蘭土の如き國々や多くの植民地などに輸出超過を生ずるのは、これによつて、不在資本家乃至所有者たちに貸子を支拂ふ爲め、従つて貧困とならんが爲めである。凡そこれらの事情がある爲めに、輸入に對する輸出の一般的超過が常に正金を以て決濟されるかの如くに前提する通説は、不充分となる。加之、個々のものについて見れば、例へば、英吉利の如く、諸國又は東印度から商品を輸入する方が、そこで販賣するよりも、極めて多い場合もあり得る。併し輸入される諸の商品は、海上權乃至第三國への轉賣の爲め甚だ重要であるべく、従つて取引全體としては、寧ろ甚しく有利であると言はざるを得ない。斯くて東印度は、就中最も優良な最も確實な硝石原産地であり、而も戰鬪用の船舶を以て英吉利海軍の勢力を増すこと、殊に著しい。更に東印度産諸商品の再輸出に至つては、優に輸入費用の六

倍に及ぶ貨幣を英吉利に回収する。チャイルドは爲替相場でさへ貿易均衡を測定するに常に充分であるとは、必しも考へてゐない。寧ろ彼は貿易の均衡による富の増大乃至消滅を航海の永續的增加または減少から推定すべきことを唱へる。なほ、一國が諸外國に販賣する爲めには、これらの國々からも購買しなければならぬといふことも、チャイルドの完全に看破したところであつた（三五八頁【英原著一七五頁以下】）。

チャイルドの體系全體の實際的基礎と見做すべきは當時の和蘭があつたと同じ文化段階にまで英吉利を向上せしめやうとする努力——或はより適切に言つて、和蘭の經濟的優越から英吉利を解放しやうとする努力これである。チャイルドは總じて和蘭流のものに對する最大の嘆美者である。併し、甚だ多くの獨逸人が例へば英吉利を嘆美するが如く、無爲の諦めに終るものでないことは、勿論である¹⁾。そして然るが故にこそ、これは我々の國民と時代とにとつて、特に教訓深い

1) この故に、アンダーソンの如き賢明の士が（『商業の起源』第二卷千六百七十年の項【第二版第二卷五〇四頁】）、チャイルドのこの和蘭偏重論に對し幾重にも惡感を懐いてゐたことは、甚だ不思議である。英吉利が、その後間もなく、その模範に追ひ付くべきことは、チャイルドの斷然確信してゐたところであつた（四三頁以下【英原著序文】）。

ものがある。而も彼の著書の主要部分は、千六百六十四年乃至六十七年の蘭英戰爭中に書かれてゐるのである（六九頁【英原著八頁】）。和蘭商業隆盛の最も著しい原因としては利率の低いこと以外に、次の諸點を擧げる、——實際商人たちが最高の國務に參與すること¹⁾、遺産の分配に於ける長子相続權を廢したこと²⁾、工業家たちの權利を安固ならしめること、國家が發明家その他を大いに奨励すること、航運に長じ運送料が廉く少しでも危険があれば國家の護衛によつて海運業を保護すること、國民性として勤儉なこと、算數の智識の一般に普及してゐること、輸出入税が低いこと（これに反し、國家の需要は高い消費税即ちこの最も平等な最も公平な最も無害な税種によつて支辨されてゐる）、立派な貧民扶養法が規定されてゐること、諸の銀行の存すること、容易に外國人を受容れること、商事裁判の判決が迅速で且つ費用の安いこと、

1) 同じ點は、その後特にダヴナン【Davenant】によつて、甚だ力強く述べられた。——『全集』第一卷四四八頁以下。

2) 因みに當時と雖も、英吉利の長子相続權に對する聰明な辯護者たちが居なかつたわけではない。有名な法律家サー・マシュー・ヘイル【Sir Matthew Hale】は、平等の遺産分配が田舎の家庭を眞實の擔税力限界以下に陥れるに至ること、反對に、土地所有に於ける長子たちの優先權が、弟たちを商工業に赴かしめる等々の意見を、持つてゐる。——『英吉利コンモン・ローの歴史』(History of the common law of England.)第十一章。

商業手形の流通が發達してゐること、終りに立派な抵當權制度の存すること(五七頁以下【英原著一頁以下】)。——我々は、チャイルドが、恰も和蘭隆盛の最高頂に達した瞬間に執筆してゐることを忘れてはならぬ。それは、コルベールが同國駐在の佛蘭西公使に與へた千六百六十九年三月二十一日附の急報¹⁾中で、商船の總數を二萬隻と言ひ、そのうち一萬五千乃至一萬六千隻を和蘭に、五百乃至六百隻を佛蘭西に歸した時代に屬する。その後數年ならずして、炯眼なテムブル【Sir William Temple】は、既に和蘭の商業がその絶頂を通過してつたとの意見を述べることができた²⁾。

さて次に一列の特別な諸章に於て、上述したことの最重要點を、英吉利人に對して更に詳細に示めす。少くとも倫敦及びその郊外に對する貧民救助を、現在以上に集中すべしとする提案(一八七頁—二一七頁【英原著一〇二頁】)³⁾は、次の和蘭式見解

1) フォルボネー『佛蘭西財政史考』(Forbonnais: Recherches et considérations sur les finances de la France, [depuis l'année 1595 jusqu'à l'année 1721. Basle. 1758. 2 vols.]) 第一卷四一八頁以下に據る。

2) サー・ウヰリアム・テムブル『和蘭觀』(Observations on the Netherlands. 1675.)【『全集』第一卷】。

3) その後、ダヴナン『全集』第二卷二〇七頁によつて、支持されてゐる。

から出發してゐる。總て活潑な商業は、人口の自由な移出入を必要とするが、甚しく地方分權的な貧民救助は、嚴重に維持された郷土權と必然的に結合してゐる。——諸の特權貿易會社に就いては、チャイルドは「その地が遠方にある爲めか又は野蠻及び非基督教的地である爲めに、王が交渉を持たず又持つこともできない土地、並びに貿易の爲めには要塞と軍隊とを維持せざるを得ない」土地に於て、是認してゐる。なほこの場合にも、國民は總て、相當な租税を出せば、會社の貿易に關與することを許されねばならぬ。我が著者は、これに反對して擧げられてゐる諸理由を、反駁するに成功してゐる。なほ、彼は、凡そ上述の諸條件が存在しない場合には、常に會社の特權を排斥する。例へば、レヴァント、西班牙などとの自由貿易が、和蘭人に對して立派に自己の位置を維持したのに、英吉利の東海貿易、グリーンランド通商等が失敗したことを以て、これらの貿易に關する特權を與へられた諸會社の責任に歸してゐるが如きこれである(二四、二一八頁以下【英原著、序文、一〇二頁以下】)。殊に佛領西印度の衰微は、會社の獨占に基くといふ(四〇三頁【英原著一九九頁】)。我々は、これが、アダム・スミスの唱へたところと全く類似の諸原則であることを見る。唯だ、チャイルドの方が、原則からの例外を極めて廣く解してゐたゞけに止まる。——航海條例

に關するスミスの見解も、チャイルドによつて準備されてゐる（二三八頁以下【英原著一】）。彼はこの條例を magna charta maritima【海事大憲章】（三六頁【英原著序文】）と名付けてゐるが、これあるによつて大多數の英吉利國民が運送業者その他少數人の利益の爲めに運賃を高められてゐることを看過してゐるわけではない。併し國家全體に對する軍事上の用は、なほ決定的に重要である。この理由から、チャイルドは、割合多くの航運を必要とする商業部門を特に奨励すべし、と考へる。この場合には、運賃収入即ち純粹な餘剩のみならず、同時に軍事上の附帶利益が極めて著しいからである（二一九頁【英原著序文】）。——チャイルドは、全く和蘭流に、外國人の歸化を歓迎することや非國教徒に對して寛大なこと等を到るところで勧めると

1) 抑、航海條例は利益が多いか害が多いかといふ問題は、當時英吉利で甚だ議論されたところである。そこで例へばロージャー・ヨーク（下出第八章を見よ）の如きは次の如く斷言する。千六百五十三年頃の英吉利に於ける船舶建造は、千六百五十一年の航海條例以前より、實に約三割も高價になつてゐた。水夫たちの勞銀も騰貴して、英吉利はその露西亞貿易・グリーンランド貿易を全く和蘭人に奪はれるに至つた、と。併し同じ時代に、有名な和蘭人ジャン・ド・ウヰット【Jean de Wit】の『回想録』（Mémoires de Jean de Wit, grand pensionnaire de Hollande. Traduit d'original en Français, par M. de xxx A la Haye 1709.）二二〇頁以下は、この法律が和蘭の對英運送の大部分を奪ふであらう、といふ懸念を述べてゐる。

共に、諸の反對理由を適當に考量した後、特に猶太人の入國を許すことをも、提唱してゐる（二九〇頁以下【英原著一】）。——工業取締規則に關する彼の意見は、極めて卓越してゐる（三〇五頁以下【英原著一】）。彼は一般に諸工業品の技術的優良性を保證する爲めの國定標準は、これを強行し難い、假令強行されたとしても、それは、流行の變遷等に際し、生産者たちに不利益至極な械を箴めることになる、と信じてゐる。世界商業を支配しやうとする國民は、正に如何なる欲望嗜好にも應じ得る爲めに、各種品質の商品を用意してゐなければならぬ。例外として一定の品質に對する政府の極印制度が存する場合には、勿論これを勵行しなければならぬ。併し規定外れの商品は、極印拒否によつて罰するだけに止めなければならぬ。それと共に、彼は、凡ゆる製造業者が私の商標を持ち、商品の長さ幅等を外見上統一することを、非常に推稱し、その際これらの點の一つに於て詐欺のあるときは、最も嚴重に處罰すべしとする。——總じてチャイルドは、原則として商工業の自由の熱烈な友である。彼は都市ギルドの諸特權に反對する。年期を終らないものは何人も工業を營むことを許さずとする、エリザベス治世五年の條例に反對する（二九〇頁【英原著七三頁】）。職人徒弟その他の數を一定し類似工業の兼營を禁ずる諸法律に反

する(二九三〇六頁【英原著文、一四九頁】)。

彼は政府の公定價格の反對者であると共に、地金銀のみならず金銀貨の自由輸出の辯護者でもある¹⁾。原毛の輸出禁止(千六百四十七年以降)に就いて、彼は言ふ。「一商品に對して最もよい價格を支拂ひ得るものは、如何なる法律【英原著では『の反對』】があらうとも、如何に海上または陸上の強國が介在しやうとも——普通の通商路には斯様な強力狡猾暴力が伴ふ——常に何等かの方法でこれを取得失得るに至るであらう」【英原著一四七頁と2)。彼は穀物の貯蔵を以て、凡そ商

1) 実際には、既に千六百六十三年以來、英吉利人は、昔の貨幣輸出禁止令を、英吉利自國內で鑄造された諸貨幣のみに、限つて居た。

2) この意見は、極めて注目に値する次の小冊子中で、他の方面から支持されてゐる。——『制限附羊毛輸出賛成の諸論據』(Reasons for a limited exportation of wool. London 1677. 24 p. in 4.)。——本書に従へば、禁止令は適當な輸出税と代へらるべきである。而もこれが主たる理由として本書の擧げてゐるところは、次の通りである。王國の地主たちは羊毛職工と製造品輸出商人との雙方よりも、より重要な利害關係を代表してゐる。(一)蓋し總ての利益は彼等に屬する土地から生ずるといふ意味で、彼等は英吉利に於ける凡ゆる國富の根元の支配者であり、また所有者であるから。(二)蓋し凡ゆる租税や公課は、販賣することなくして購買する者の上のみ懸るが故に、彼等のみがこれを負擔することとなる、即ち、販賣者たちは、租税に應じて、その商品價格を高めるか又はその商品の品質を悪くするを常とするものであるから(五頁)。^{一頁}【本書は、スミス『羊毛考』第一卷第五十六章に収録されてゐる。】

業に對して與へられ得る限りの、最も有用な奉仕の一つである、と説明する(一七二頁以下【英原著七頁以下】)。同じ和蘭の例は、汚物除去下水装置その他の有用なことをも、彼に確信せしめた(一七〇頁【英原著七一頁】)。マーカンテイリズムに對する月並みな非難を以て、チヤイルドを片付け得ると信するなら、それは如何にも根據のない意見である。——最後に植民地に就いては、暫く前までは實踐を、ジ・サイア・タツカーに至るまでは理論を、殆んど例外なく支配してゐた見解に、著者は左袒する。總て植民地は、母國が良き法律を勵行して植民地貿易を獨占しない限り、母國に損害を與へるものである。斯様な法律がなければ、植民地貿易は總て和蘭人の手に歸するに至るであらう。しかし凡ゆる植民に何より先に伴ふ人口の減少は、出稼人たちが後に遺した本國內で間接的に生産増加を生ぜしめることによつてのみ、再び恢復される否な利益に轉することさへできる(三九四頁以下【英原著九四頁以下】)。兎に角植民地に關する編は、極めて卓越した、屢、全く豫言者的な、多くの判斷を含んでゐる。斯くて彼は、例へば、西班牙人や和蘭人や佛蘭西人が植民に關して持つてゐる種々な才能を、非常に良く描寫し、また英吉利人も、本來の植民の領域に於ては、彼等の敵對を大して怖れる必要がない、との希望を與へてゐる(三九七頁以下【英原著九六頁

【以下】。反對に、チャイルドは將來にとつて最も恐ろしい一つの敵手が、ニュー・イングランドに於て（殊に海上權に關し）發生すると見てゐる（四二八、四三三頁【英原著一—二】。二—五頁以下）。彼は合衆國の後世の強大を炯眼にも豫見したのである。

チャイルドの著作の、これ程豊富にして且つ重要な内容に較べれば、これが形式上の缺陷無数の繰返へしは、否な個々の點に於ける矛盾（例へば二四頁及び二二—四頁【英原著一〇—五頁】を参照せよ）でさへ、却つてそれだけ、寛大な批判を要求し得るであらう。それは正に、パンフレットを書く實際家たちに於いて屢見る誤謬に外ならない！

1) チャイルドがその死後永く、なほ如何に重く評價されてゐたかは、例へばジェイ・ジの『英國通商航海考』（J. Gee: The trade and navigation of Great-Britain considered. 1730.）に據つて極めて明かである。千七百九十七年には、サー・イーデン（『貧民の狀態』第一卷一八七頁）即ちアダム・スミスの立脚點に屬する一人物は、彼を呼んで This acknowledged oracle of trade. 【この定評ある貿易の使徒】と言つてゐる。

第八章 政治算術家ペティ

サーウキリアム・ペティ【Sir William Petty】（一六二二—一六八七）の經て來た經歷は、

その天成の多藝と經驗上の練達とが、恐らくは彼の品性を犠牲にして、最高度に發達せざるを得ない底のものであつた。彼は製絨工の息子であつたから、古典及び數學の勉強と並んで、子供の時分から既に、若干の手工業に關する實際智識を、習得してゐた。青年時代商業を營んだが、その後間もなく、殊に巴里及び和蘭の地で、解剖學と醫學との研究に没頭し、その際殊にホッブスの交友に恵まれた。千六百四十八年以來はオックスフォードに於て、この最後に擧げた二つの専門並びに化學を、教授したり實地に應用したりした。愛蘭土との關係は、その後學問上にも非常に著しい諸成果を齎す運命を持つてゐたが、それは軍醫監としての任命を以て始り、これによつて彼は、俸給以外年額四千磅の謝禮を得ることができた。茲で偶、目に附いたのは、愛蘭土に於て沒收された廣大な土地の測量と分配とが宜しきを得てゐないといふ事情である。ペティはこれに對する政府の注意を

喚起し、そこで親しく總ての處置の指導を行つた。この目的の爲めに彼の作つた地圖は、當時にあつては最も詳細な、凡そ如何なる土地と雖も以て誇となし得るものとして通つてゐた¹⁾。これは今日に至るまで、愛蘭土では、法律上の實證力を持つてゐる²⁾。この仕事によつて儲けた金を、ペティーは土地賣買と信用投機とに使つて、完全に成功した。なほ彼は、如才がないと共に露骨でもあつて、革命の時には議會黨として行動したが、王政復古の時には、チャーレス二世に好意を寄せて王の知遇を受け、王に獻げた論文【Two essays in political arithmetick concerning the people, housing, hospitals etc. of London and Paris.】の上

1) エヴェリン『回想録』(John Evelyn: Memoirs.) 第一卷四七四頁以下(四つ折版)参照。【本書は最初次の標題の下に刊行された。Memoirs, illustrative of the Life and Writings of John Evelyn, Esq., F. R. S. Author of the "Sylva" etc. etc. Comprising his Diary, from the year 1641 to 1705-6, and a Selection of his familiar Letters. To which is added the private Correspondence between King Charles I. and his Secretary of State, Sir Edward Nicholas, etc. 1818. 譯者は次の版本を利用した。茲に引用されてゐる箇所は、その二九八頁に在る。The Diary of John Evelyn with an introduction and notes by Austin Dobson. (The globe edition.) London 1908.】

2) 原本は一部分焼失したが、巴里圖書館所蔵の寫本がある。これはペティーが自らの爲めに作製せしめたものであるが、英吉利へ歸航の途次、佛蘭西海賊に奪はれた(マカロック『經濟學文獻』二一一頁)。

には、甚だ卒直にも Qui sciret regibus uti, fastidiret olus!【國君を操縦することを知らん程のものは、粗食を厭ふものとす】といふ標題を付けてゐる。死ぬ時には、彼は一萬五千磅の年收を遺した。その後彼の息子はシエルブルン男爵【Baron Shelburne】に任ぜられた。これ即ち今日のランズダウン侯【Marquis von Lansdowne】の祖先である¹⁾。

ペティーの豊富にして光輝ある教養は、當時の人々によつて幾重にも嘆賞された。斯くてエヴェリン(前掲箇所)は、現在生存してゐる人々の中、ペティーは最良の拉丁詩人の一人である、と説明してゐる。He is so exceedingly nice in sifting and examining all possible contingencies, that he adventures at nothing which is not demonstration. There were not in the whole world his equal for a superintendent of manufacture and improvement of trade, or to govern a plantation..... There is nothing difficult to him.【ありとあらゆる出來事を精査究明するに當り極めて巧妙であつて、彼がやつて見ることで確證を擧げないものは一つもない。工業の管理や貿易の改善乃至植民地の統治上、彼に匹敵するものは、世界中一人もない。

1) 千七百五十五年の倫敦版『政治算術論數篇』中の、ペティーの生涯参照。

……彼にとつて困難なことは、一つもない。』なほ彼は、他人の眞似をするのが非常に巧妙であつたとも、云はれてゐる。例へば、クエイカー修道僧プレスビテリアン等種々異なつた説教師たちを、同時に眞似るが如き類である。特にペピース【Pepys】¹⁾が稱揚してゐる點は、判斷力が明敏で論理が明晰なことである。彼の最も明確な功績に屬するものは、Royal Society【王立協會】の創立と指導とに關與したことである。なほこれと並んで、彼は技術の方面でも、發明家として頭角を現はしてゐた。

ペティの述作中最も重要なものは、次の諸著である。『租稅論』(A treatise of taxes and contributions, shewing the nature and measures of crowlands, assessments, customs, poll-money, lotteries, benevolences etc. [3 ed.] 4. London 1679.) 『貨幣小論』(Quantulumcumque, or a tract concerning money, addressed to the Marquis of Halifax. 4. London 1682.) 『政治算術論數篇』(Several essays in political arithmetick.) —— 最初千六百八十二年に刊行され、次いで千六百九十一年立派な遺稿論文 Political arithmetick concerning the value of lands etc. を加へられた(四版、倫敦一七五五年、八つ折版)。——『愛蘭士

1) ペピース『日記』(Diary) 第二卷一四五頁(八つ折版)。

の政治的解剖』(Political survey or anatomy of Ireland, with the establishment of that kingdom, when the Duke of Ormond was Lord-lieutenant etc. 8. London 1791.) —— 彼の著作の勝れた全集は、今なほ存在しない。愛蘭士の統計その他に關する未刊の諸勞作が、ランズダウン家に所藏されてゐるそうであるから、これは益、以て遺憾とすべきである【*】。

【* 現在の我々は、次の權威あるペティ論文集に恵まれてゐる。即ち千八百九十九年刊シー・エー・チ・ハル編纂『サー・ウヰリアム・ペティの經濟學論文集』(The economic writings of Sir William Petty, together with the observations upon the bills of mortality, more probably by Captain John Graunt, edited by Charles Henry Hull, Ph. D. Cambridge 1899. 2 vols.) 及び千九百二十七年刊ランズダウン侯編纂『ペティの未刊論文集』(The Petty papers. Some unpublished writings of Sir William Petty, edited from the Bowood Papers by the Marquis of Lansdowne. London 1927. 2 vols.) これである。

ハルが種々なる版本を研究考證した結果に據れば、『租稅論』の初刊は千六百六十二年に屬し、茲にロッシュの引用してゐる千六百七十九年版は、その第三版である。この第三版は、その後千七百六十九年に『政治算術論數篇』第一版及び『政治的解剖』第二版と合冊して『愛蘭士論集』(Tracts; chiefly relating to Ireland. Containing: I. A treatise of taxes and contributions. II. Essays in political arithmetic. III. The political anatomy of Ireland. By the late Sir William Petty. To which is prefixed his last will. [Ornament.] Dublin 1769.)なる標題の下に刊行された。譯者はロッシュが引用してゐる第三版の原本を手にし得ないから、止むを得ずこの再刻版を利用し、併せてハルの前掲書に再刻されたその第一版を

ベテイの統計的著作は、當時の参考資料が總て甚だ不完全であつたことを示してゐると同じく、彼自身の識見が天才的に周到且つ明晰であつたことをも示してゐる。——我々今日の統計では可成り確實を極め而も比較的容易至極なものと成つてゐる一般人口數も、ベテイにあつては、極めて不確實な面倒至極な廻り道によつて、その推測を試みざるを得なかつた¹⁾。彼は先づ倫敦にある家屋數を基礎として推論

survey of Ireland, with the establishment of that kingdom, when the late Duke of Ormond was Lord Lieutenant; and also an exact list of the present peers, members of parliament, and principal officers of state. To which is added, an account of the wealth and expences of England, and the method of raising taxes in the most equal manner. Shewing likewise that England can bear the charge of four millions per ann. when the occasions of the government require it. The second edition carefully corrected, with additions. London 1719. と幾分標題を改めて再版された。ロッシヤが本書で引用してゐる千七百九十一年版は果して如何なる版本か不明であるが、その引用頁數が千七百十九年版と全く符合する點から判斷して、九十一年は或は十九年の誤植ではあるまいか。譯者は便宜上、その第二版原本及びハルの前掲書中に再刻された第一版を参照した。

尙ほ後出『賢者には一言を以て足る』は、『政治的解剖』の標題に示されてゐるやうに、同書の卷末に附録として載せられてゐる。]

1) 『政治算術論五篇』(Five essays in political arithmetick. 1687.) 第三論文(『數篇』七八頁以下【一六九九年版一二〇頁以下】)。

参照した。

『政治算術論數篇』は、ベテイの死後千六百九十九年に編纂されたもので、次の諸編を含んでゐる。『人口増加に關する論策並びに政治算術再論』(An essay concerning the multiplication of mankind: together with another essay in political arithmetick, concerning the growth of city of London: with the measures, periods, causes, and consequences thereof. 1682.) 『ダブリン死亡表研究(續編)』(Further observation upon the Dublin bills: or, accompts of the houses, hearths, baptisms, and burials in that city. The 3 ed. corrected and enlarged. London 1698.) 『政治算術論二篇』(Two essays in political arithmetick, concerning the people, housing, hospitals, &c. of London and Paris. London 1699.) 『倫敦市及び羅馬市研究』(Observations upon the cities of London and Rome. 2 ed. corrected. London 1699.) 『政治算術論五篇』(Cinq essays sur l'arithmetique politique. Londre 1699. Five essays in political arithmetick. London 1699.) 『政治算術論』(Political arithmetick, or a discourse concerning the extent and value of lands etc. London 1699.) (本書中に収録された各論文の異版刊年等に就いては、ハルの前掲書参照)。私はロッシヤの引用してゐる第四版を見ることができなかつた。この邦譯書では、その初版を参照した。

『貨幣小論』は、マカロック『稀觀書集』中に収録されたものを参照した。

『政治的解剖』は、始め千六百九十一年 The political anatomy of Ireland. With the establishment for that kingdom when the late Duke of Ormond was Lord Lieutenant. Taken from the records. To which is added Verbum sapienti; or an account of the wealth and expences of England, and the method of raising taxes in the most equal manner. Shewing also, that the nation can bear the charge of four millions per annum, when the occasions of the government require it. London 1691. なる標題の下に公刊され、後千七百十九年 Sir William Petty's political

し、更に進んで、巴里では各家庭が三、四世帯を數へる場合、倫敦では多分十分の一の家屋は各二世帯、餘は唯だ一世帯を含むのみであらうと考へる。最後に一世帯當りの家族數は商人にあつては平均八人である、と嘗てグロント【John Graunt】は述べたが、ペテールは、比較的裕福な家庭ではこれが十人以上、比較的貧乏な家庭では五人、總平均六人と見積つてゐる。さて斯様にして得られた倫敦の人口數を、ペテールは二つの方法で吟味する。その一は、毎年死亡數の中數に三十を掛ける方法であり、その二は、千六百六十五年黒死病の際に於ける死亡者數——當時の人口の五分の一に達したといはれてゐる——を基礎として、彼の時代までの自然増加を加算する方法これである。第一の方法によれば六十九萬五千七十六といふ數、第二の方法によれば六十九萬六千三百六十、第三の方法によれば六十五萬三千となるのであるから、然る限りに於て三つの方法は何れも一致してゐる。同じくペテールの愛蘭土家畜頭數の計算¹⁾も、草原牧地の面積(supposing to be competently well stocked【充分によく飼養されてゐると假定する】)を基礎とし、次に小家族の三分の一は各々一頭の馬を持つてゐると推量し(I guess)、一萬六千の比較的大き

1) 『愛蘭土の政治的解剖』五四頁以下【ハル第一卷一七四頁以下】。

な家庭には合計四萬頭の馬匹を推定(suppose)せる如き類である。彼の多くの基數はこのやうに不確實なものであるから、例へば、『ダブリン死亡表研究』(Observations upon the Dublin bills of mortality. 1681.)で推論してゐる結果がダブリンは三萬二千より寧ろ五萬八千の住民を算へる¹⁾、といふにあつても、少しも驚くに當らない。否、なそれのみならず、彼の計算には實に奇怪な飛躍さへ行はれてゐる。例へば、千六百六十四年愛蘭土のバタ及び家畜輸出が千六百四十一年より三分の一だけ大きいことを見出した上、さてそれから結論して、後の年には人口は三分の一だけ多くなつてゐるといふ場合などはこれである²⁾。併し長所の方が甚だ決定的に優れてゐるのであるから、これらの短所に就いてはこれ以上言はない。誠にペテールが基礎を築いた劃時代的な進歩を識る爲めには、我々は唯だ所謂 Respublicae Elzevirianae【ヘルゼヴェル版】中の最も尤なるもの、即ちコンリング【Cooring】の著作をペテールと對照すれば足る。觀察は統計の右の眼であり、比較はこれが左の眼である。そしてこの何れの點に於ても、ペテールは驚異に値する。そこで彼は、例へば、愛蘭土の氣候が溫和であ

1) 『數篇』五四頁【一六九九年版五三頁】。

2) 『政治的解剖』一八頁【ハル第一卷一四九頁】。

るとか濕潤であるなど、説明するのでは、まづ満足しやうとしない。恐らくこれに加ふるに、島中の諸地方に互り、一年中の種々なる時期を通じ、長い面倒な單純觀察と比較觀察とを繰り返へし、而もこれを他の地方から得られた類似の諸觀察と比較せねばならぬであらう。殊にペティは、風位と風力とを測定する爲めの諸器具、並びに一定の方位から吹く風は一年全體に互り一日何時間かといふ觀察進んでは年々の降雨量や大氣の濕度の最高度及び最低度の測定、一時間毎の寒暖計及び晴雨計觀測その他を要求する¹⁾。氣候の健康に適する程度を判定する爲めには、一定生存者數に就き、年々幾何の出生及び死亡が生ずるかといふことのみならず、更に平均生存期間をも確めなければならぬ²⁾。最後に述べたこの事情こそは、彼にとつて甚だ重要であると思へ、彼はこれを public economy 【國家經濟】の『いろは』と名けてゐる³⁾。

一なほ序ながら、統計の記述的部分は、甚だ多數の近世學者たちに於ける如く、斷じて圖表的部分の後に隠れてはならない。そこで例へば、愛蘭土に於ける諸黨派その根本的意見と最後の動機殊に加特力教僧侶と教區との關係に關

1) 『政治的解剖』四八頁以下【ハル第一卷一七〇頁以下】。

2) 前掲書五〇頁【同上一七二頁】。

3) 『數篇』三五頁【?】。

する記述の如きは、實に模範的である¹⁾。同様に種々なる國民階級の食物衣服風俗教養等も、同時に含蓄に富んだ短文ではあるが、極めて巧みにありと畫かれてゐる（『政治的解剖』九一頁以下【ハル第一卷一九八頁以下】）。總て立派な統計は、シュローツァー【Schlözer】の語を借りて言へば、歴史の流れの横斷面である。ところで我がペティは、該博なる歴史的研究には殆んど大した關心を持たなかつたが、彼に健全な歴史的識見のあつたことは、確かに否定するを得ない。斯くて彼は、全くこの地方の自然に立脚して、愛蘭土最古の住民は蘇格蘭から出發してカリックファীগス【Carrickfergus】附近に移住したものである、と結論してゐる。何となれば、舟楫の術は當時は極く極く幼稚であつたから、大ブリテン以外の場所からの移住を推定するを許さない。ウエイルスの岬からでは、愛蘭土を全く見ることできぬ場合が屢あり、明瞭に見ることの如きは一度もあり得ないであらうが、これに反して蘇格蘭からならば、カリックファীগスが甚だよく見えるし、また始終見える。此處は小さなボートが三四時間で漕ぎ渡る。この邊の愛蘭土の濱邊は、對岸の蘇格蘭海岸より遙かに肥えてゐる。

1) 『政治的解剖』四二頁以下、九一頁以下【ハル第一卷、一六七頁以下、一九八頁以下】。

兩地の言葉も、この邊では最もよく類似してゐる。加之最も位の高い恐らくは最古の僧正駐在地がこの近くに存在してゐる¹⁾。——我々はこの方法が、我が近世に於ける最良の研究のまゝであり、また實にその昔スキジデス【Thukydidēs】が既に用ゐた方法たることを觀取する²⁾。——同様に愛蘭土が、人口稀薄な總ての地方と同じく、所有權の不安固に惱んでゐるのは何故かといふ説明や、斯様な土地を人口稠密な國家の諸法律を以て直ちに救済しやうと欲するのは、不適當であるといふ説明は、實際的にして同時に歴史的である（『政治的解剖』九八頁【ハル、第一卷二〇二頁以下】）。

愛蘭土の政治的解剖³⁾が當時としては個別統計の模範を提供してゐると同じく、遺著『政治算術』は比較統計の模範である。實際僅か八つ折版九十頁を算へるに過ぎないこの小著の豊富な内容は、次の長い標題によつて示されてゐる。A discourse concerning the extent and value of lands, people, buildings; husbandry, manufactures, commerce, fishery, arti-

1) 『政治的解剖』一〇一頁以下【ハル、第一卷二〇四頁以下】。

2) 拙著『スキジデスの生涯・著作及び時代』(Roscher: Leben, Werk und Zeitalter des Thukydidēs. Göttingen 1842.) 一三二頁以下参照。

3) この標題の起源は、恐らくホップスとの交友及び意氣投合に負ふものであらう。

zans, seamen, soldiers; publick revenues, interest, taxes, superlucration, registries, banks, valuation of men, increasing o. seamen, of militias, harbours, situation, shipping, power at sea etc. As the same relates to every country in general, but more particularly to the territories of his Majesty of Great Britain and his neighbour of Holland, Zealand and France. [London 1630.] 大膽な數字上の概括は——その不確實を最もよく識ることのできるものは著者自身であらう。——本書でも非難を免れないところで、例へば、商業世界中抑、何れの地方からでも、兎に角輸出される商品全體を年額四千五百萬磅と見積つた上、さてこれから、英吉利は世界商業を自國に奪ふだけの資本を持つてゐると推論する（『數篇』一八〇頁以下【二七二頁以下】）が如きは、この例である。それだけにまた、當時の凡ゆる主要諸國に於ける統計材料に、同じ程度にまで通曉しやうとする彼の努力、眞に妥當なもの興味あるものだけを洞察する眼識に至つては、愈々以て賞讃に値する。同様に、國家權力の言はゞ筋肉と神經とを感得する、眞に政治家的な手練の如きも、多數の統計家が表面上の外被から内部に透徹することさへできないのに比すれば、甚だ賞讃すべきである。——ペテイは、和蘭國民の偉大な長所の眞價を認めるに吝でなく、これが表現は多くの點でチャイルドのそれと一致して居

り、而もベテイの説明の方が、チャイルドより勝れてゐる。讚嘆すべき諸事物が如何にして天才的に發明されたかといふことより寧ろ、これらのものが種々なる條件の中から殆んど必然的に發生し出した経過如何といふことを、大部分實證する能力を持つものは、眞正の識者であるが、彼にあつては斯る識者の Nil admirari【何事にも驚かない自若さ】が觀取される（『前掲書』一一五頁【一八三頁】）。

比較的短い Essays on political arithmetick【政治算術に關する諸論文】は、大抵王立協會の爲めに執筆されたものであるが、その大部分は比較統計に屬してゐる。例へば倫敦と巴里、倫敦と羅馬、ダブリンと他の若干大都市に關する立派な諸研究の如きこれである。上に擧げた主著は、次の語を以て終つてゐる。曰く、政治算術の下に著者の理解するものが何であるかは、上述したところに據つて觀取することができやうと。これは、本質上正に、我々が、數字上で得る限り正確なる比較統計と名けたいと思ふものである¹⁾。當時この科學が、如

1) 『數篇』九八頁【一六九九年版一五三頁】—— to express myself in terms of number, weight or measure, to use only arguments of sense, and to consider only such causes, as have visible foundations in nature;.....observations, which if they are not already true, certain and evident, yet may be made so by the sovereign power. 【數量・重量乃至容量の稱呼を以て自己を表現し、感覺に訴へる諸議論だけ

何斗り新しいものであつたかといふ事情は、十七世紀の終りに至つても、ダヴナン¹⁾が熱烈な讚辭を捧げてゐることによつて知られる。従つて我がベテイは、斯學の最も優れた創始者の中に算へることが出来る。尤も、ベテイは周知の如く斯の方法の唯一の發明者である²⁾といつた彼の子息の主張は、幾分の誇張を含んでゐる。即ち、多くの點で彼に途を開いた者は、王立協會の同僚ジ、モン、グ、ロ、イ、ント大尉の『諸死亡表に關する自然的及び政治的觀察』(Natural and political observations upon the bills of mortality, chiefly with reference to the government, religion, trade, growth, air, diseases etc. of the city of London. 4. London 1662.)³⁾てふ卓越した著書で、ベテイ自ら屢、この先驅者を引合ひに出し、その死後千六百七十六年には、前掲書第五版發行の面倒を見てゐる³⁾。尙ほ、グ、ロ、イ、ントとベテイとが見出した死亡の法則は、倫敦市とダブリン市

を用ひ、自然の中に認め得べき基礎を持つ原因だけを考慮すること。……既に眞正、確實、明白であるといふわけでないとしても、なほ理性によつて斯様にすることのできる諸觀察。】

一五

1) ダヴナン『商業及び政治全集』第二卷一六九頁以下【第一卷、一二七頁以下(?)】

2) 『數篇』九三頁【一六九九年版一四四頁】。

3) ハレーがその著『人間死亡率の推定』(An estimate of the degrees of the mortality of mankind.)で、又エヴェリンが『回想録』第一卷四

との記録に基くものであるが、これに就いては既にハレー¹⁾が異議を唱へ、これらの都市は移出入民のため甚しい増減を被るから、計算の結果に大きな影響を及ぼすに違ひないと言ひ、従つてハレー自身はこれに據らず、自己の研究に當つて、ブレスラウ【Breslau】市を基礎としてゐる。——併しペティーの英佛蘭比較統計は、別の根據からも重要である。即ち同書は、直接には英吉利國家が急速に衰微しつゝあるとする一般の歎聲に反對する意圖を以て書かれたものである。當時世人が考へてゐたところによれば、『地代は一般に低下した。【ペティー原著ではこの間に次の一句がある】の故に、又これ以外の多くの理由に據つて】國家全體は日々に貧困となりつゝある。【ペティー原著ではこの間に次の一句がある】從來は金に充ちてゐたのに、今や】貴金屬の缺乏が支配してゐる。【ペティーの原著では「不足し】國土は人口が減退し乍ら、而もその住民に對し充分なる職を持たぬ。【ペティー原著では、「國民にとつては貿易もなければ職もないのに、而も國土は人口が減少してゐる。】

七五頁で、グローントの著作の原作者は我がペティーである、と言つてゐるのも、此處に胚胎するのであらう。併しこの見解には、マカロック『文獻』二七一頁が甚だ正當にも反對してゐる。曰く、斯くも立派な有名な業績に伴ふ名譽を、詐つて他人に譲るが如きは、ペティーの性格上決してあり得ないことである、と。

1) 上に引用した論文に於て、『哲學論叢』(Philosophical transactions. London 1693.)所載。

諸税は高過ぎる【ペティー原著では「數】。愛蘭土と亞米利加【ペティーの原著では「植民地】の一語挿入】とは英吉利にとつて一個の重荷に過ぎず、蘇格蘭は少くとも利益とならぬ。貿易は【ペティー原著では「一】極めて悲むべき衰勢を辿りつゝある。和蘭國民は、その海軍力を以て、殆んど英吉利國民と匹敵し、佛蘭西國民は、國富と兵力とに於て兩國を甚しく凌駕し、唯だ慈悲を以て、兩隣邦の併吞を控えてゐるに過ぎぬ。一言を以てこれを蔽へば【ペティー原著では「最後に】英吉利の教會と國家とは英吉利の貿易と同じく、危機に瀕してゐる¹⁾と。ところでペティーは、これに對して教へる。諸の小さな國土と國民も、地勢と貿易と政治とを以てすれば、國富と兵力とに於て自國より遙かに勝れたものに、匹敵することができぬ。佛蘭西は、就中海上權に於て、英蘭兩國に甚しく劣らざるを得ない。英吉利王の國土と國民とは、本來、佛蘭西と略、同じ大さを持つてゐる。英吉利の兵力と富力とは、四十年來増加し來つた。而してこれが將來の増加に逆行する凡ゆる障害は、取り除き得るであらう。最後に、英吉利の貿易否な世界中の貿易を營む爲めには、貨幣は不足してゐない、と。——過去二十年の長きに亙り、英吉利經濟學者たちを二つの陣營に分裂せしめ、實際上、殊に商業政

1) 『數篇』九六頁【一六九九年版、一四八——一五〇頁】。

(Roger Coke) の『英吉利の國難』(A treatise, wherein is demonstrated, that the church and state of England are in equal danger with the trade of it. London 1671.) 『和蘭貿易増進の諸原因』(Reasons of the increase of the Dutch trade, wherein is demonstrated, from what causes, the Dutch govern and manage trade better than the English. London 1671.) 『英吉利の進歩』(Englands improvement, in two parts, the first part relates to the strength and wealth, and the latter to the navigation of the Kingdom. London 1675.)。以上三書とも四つ折版で倫敦に於て公開された。これらの書物の前提となつてゐるものは、英吉利が、逆均衡による以外、更に人口の大減少——黒死病と 米利加、愛蘭土等への多数の移住によつて惹起されたところの——の爲めに、衰運を辿りつゝある、といふことこれである。航海條例とエリザベス救貧法との結果も不得策であると論ぜられる。反對に、特にヨークが推稱してゐるのは、外國新教徒の歸化・愛蘭土よりの自由なる家畜移入の復活・排他的なる諸ギルド組合の開放等である。——極めて注目し得るこれが反對書は、『英吉利の大幸福』(Englands great happiness, or a dialogue between Content and Complaint, wherein it is demonstrated, that a great part of our complaints is causeless. By a real and hearty lover of his King and country. 4. London 1677.) で、書中特に目に着くのは、次の諸章の標題である。To export money our great advantage. 【貨幣を輸出することは我が國の大利益である】 The French trade a profitable trade 【對佛貿易は有利な貿易である】 Variety of wares for all markets a great advantage 【總ての市場に對する商品の種類が多いことは、非常に有利である】 High living a great improvement to arts 【高い生活程度は技術上大なる改善を齎す】 Inyitation of foreign arts a great advantage. 【外國技術の輸入は非常に有利である】 Multitudes of traders a great advantage. 【貿易業者が多いことは非常に有利である】 The word /impossible a great discourager of arts. 【不可能てふ言葉は諸技術を甚

策上、異常な重要性を持つて來た一個の論争¹⁾は、如上の諸研究を以て、一時終りを告げた。因みに、この眞に尊王愛國的な優秀な著作も、それが offended France 1 【佛蘭西の氣に障つた】との理由で、千六百九十一年になつて漸く刊行を許されたといふ事情は、當時に於けるステュアート朝政府の佛蘭西に對する隷屬、更に英吉利新聞界の政府に對する隷屬の特質を示めすものである。

1) 當時佛蘭西は、政治上及び文學上世界に冠たる國家であつたのみならず、コルベール指導の下に國民經濟上優越すべき確固たる見込みをも、持つてゐたやうに思はれる。そこでチャーレス二世の臣僚は、彼等の議會的自由・新教的信仰・國民的風習が事實上脅かされてゐると同じく、その商工業も、佛蘭西の爲めに脅かされつゝあると信じた。英吉利は經濟上衰微しつゝある、といふ主張が非常な賛同を見出したのも、如上の事實からして明瞭となる。當時の統計は總て不完全であつたから、この見解を抑へることは仲々困難であつた。この論争を開始したものは、サミュエル・フォートリー『英吉利の利益と進歩』(Samuel Fortrey: Englands interest and improvement, consisting in the increase of the store and trade of this kingdom. [Cambridge] 1663.) である。彼は、本書に於てエンクロージヤアと外國人の英吉利移住とに賛成して若干言及してゐる以外、ルキ十四世の調査と稱するものを基礎とし、佛蘭西の對英輸出は年額二百六十萬磅であるに對し、英吉利國民は僅か約百萬磅しか佛蘭西に輸出しない、即ち英吉利にとつての逆均衡 (clear loss) は年額百六十萬磅に達するとの意見を、遺憾なく述べてゐる(二二頁以下)。斯様な表面上の事實によつて喚起された大驚愕は、當時英吉利國民をして、對佛貿易の制限と禁止とに賛成せしむるに、甚だ與つて力大なるものがあつた。——ロジャー・ヨーク

さて次に、ベテイの述作の根柢に横はる經濟學上の諸見解に移らう。

各財貨の價格は、これが生産に必要な勞働に依存するてふ命題は、その萌芽の形に於ては既にホツプスの樹立したものであるが、ベテイはこれを更に大いに發展せしめてゐる。『或る人が一ブッシェルの穀物を生産するに必要とする同一時間内に、一オンスの銀をペルーの地中

しく沮むものである。著者の反對者たちは、どちらかと言へば、例のマーカンティリズムの觀念がびつたり宛て嵌まるやうな人々であるに對し、著者は常に貿易自由の熱心な賛成者である。本書中満足してゐる方の對話者は、Complaint 【本書は、副題の示す如く、『満足』(Content)及び『不平』(Complaint)なる二人の人物の對話の形式を以て、書かれてゐる】に對し、フォートリーの均衡表は正確だ、と常に告白してゐるが、それにも拘らず、彼はなほ、佛蘭西貿易は有益又は少くとも快適な商品を輸入するが故に有益である、と説明してゐる。佛蘭西人が、英吉利貨幣の代りに英吉利商品を受取つたとすれば、それは有用の程度を更に増すのみであらう。抑、私人たちは、必しも常に、直接賣り戻し得る人々だけから購買するものとは限らない、國際通商の場合は全く別物だ、といふ理由が何處にあらう、といふ最近甚だ通例となつた議論は、既に本書に於て見出されるところである。——『疲弊せるブリテーン』(Britania languens, or a discourse of trade: shewing the grounds and reasons of the increase and decay of land-rents, national wealth and strength. 8. London 1680.)。本書では、英吉利の經濟的衰微 (consumptive condition) の原因として、特に次のものが擧げられてゐる。貨幣の輸出、奢侈品の輸入(特に佛蘭西よりの)、航海條例、東印度會社その他の貿易會社の諸特權、諸のギルド特權、その他種々。マカロツク『文獻』三九頁以下參照。

から倫敦に運び得るときは、一方は他方の自然價格である。而して更に採掘のより容易な新しい鑛山により、從來の一オンスと同じ容易さを以て、二オンスの銀を獲ることができると至つたとすれば、他の諸事情にして同一なりと假定する限り、一ブッシェル十志の穀物は、五志であつた從來と、廉價の點に於て變らないであらう¹⁾。『自然的なる物價の騰落は、最必需品の爲めに必要な人手の多少に懸る。従つて一人が十人分の穀物需要【Kornbedarf 原著では單²⁾ "Corn"となつてゐる】を生産し得る場合には、僅か六人分のそれしか作り得ない場合よりも、穀物は廉い。尙ほこの際氣候が人間を強制して、或は多く或は少く消費せしめることをも、顧慮しなければならぬ。【……………】百人の農夫が爲し得ると同一の勞働を、二百人に振り向けざるを得ない場合には、穀物は二倍だけ騰貴するであらう²⁾。技術又は危険を以て顯れてゐる勞働も、この原則の下に入る。『銀の生産が、穀物の生産よりも、より多くの技能を必要とするか、又はより多くの危険を伴ふとし、さて穀物に對し百人の人々を十年間働かせ、銀に對しても同數の人々を同じ期間だけ働かせるとせよ。【英原著にあつては幾分異なつた言ひ廻しをしてゐる】 然らば私は主張する、銀の純

1) 『租稅論』三一頁【『愛蘭士論集』三八頁、ハル第一卷五〇頁】。

2) 前掲書 六七頁【『愛蘭士論集』八一頁、ハル第一卷九〇頁】。

収入は穀物の純収入全體に對する價格となり、一方の同一分量は、他方の同一分量に對する價格となるであらう。假令それだけ多數の銀坑夫が精煉鑄造の術を覺えること、乃至は鑛山労働の危険と病氣とに打克つて生きのびることがなかつたとしても¹⁾。——ペティは、主として土地と労働とに均しく適用し得る如き價格尺度を見出すことを以て、『經濟學上最も重要な問題』であると説き、さて斯様な價格尺度として、一人一日分の平均食糧、而も種々異つた食料品はその生産の爲めに異つた労働量を必要とするが故に、最も廉價な生活資料に還元せられたる食糧を、推唱する。この價格尺度を手掛りとすれば、例へば銀は、秘露から露西亞へ輸送するには運送費と危険とが伴ふのを通常とするから、露西亞に於ける方が秘露に於ける場合の四倍も高いわけである²⁾。

それにも劣らず興味あるものは、三大所得部類に關するペティの考へである。彼は、利率の自然的低下を以て、貨幣増加の一結果であると説く。國法は、この點に於て、直接には殆んど何事をも爲し得ないであらう³⁾。従つて愛

1) 『租稅論』二四頁【『愛蘭土論集』二九頁以下、ハル第一卷四三頁】。

2) 『政治的解剖』六二頁以下【ハル第一卷一八〇頁以下】。

3) 『數篇』一七一頁【一六九九年版二五九頁】。

蘭土にとつては、利率を約一割から五歩乃至六歩へ低下せしめることが望ましいと考へられる場合にも、斯の目的達成の爲めに彼が推唱するところは、土地銀行以外には、單に商行爲と信用の安全とを増加すべき諸方策だけに止まらうてゐる¹⁾。利子最高限を定める慣行の規則に對しては、彼は既に、異つた金融業は甚だ異つた危険を伴ふてふ理由を以て、反對してゐる²⁾。——地代に關しては、ペティは、*natural and genuine rent of lands*【土地の自然純粹なる賃貸料】即ち土地生産物の形に於ける収益と、貨幣収益とを區別してゐる³⁾。ところで狭い意味の地代を發見する爲めには、例へば一教區の地積の平均總收穫とその附近に住む労働人口 (*within a market-days journey*【市日に集つて來ることのできる(日歸りのできる)範圍内】)の諸支出とを、探究しなければならぬ。後の點が定つて始めて、上の總收穫を獲る爲めの諸掛りを推定することができやう。更に優れてゐるのは、次の方法である。放牧場にある一頭の牛が、一定期間内に、五十日分の食糧 (*days-food*) として必要な丈けの肉を増し、一人の労働者が、同じ土地の上で同じ時間内に、六十日分の食糧を生産すると

1) 『政治的解剖』一二五頁【ハル第一卷二二一頁】。

2) 『貨幣小論』

3) 『政治的解剖』五四頁【ハル第一卷一七四頁】。

すれば、地代は五十日分に、勞銀は十日分に、相當するに違ひない¹⁾。序ながら、自然の賜物を獲得するには、人口増加に伴れて相對的には益、増大し行く費用を以てしなければならぬ、といふ經驗、即ちリカルド法則のこの基礎に就いては、ベティーは何等の注意をも拂つてゐない。英蘭土の地代は、愛蘭土の地代に比較して四倍乃至五倍高いが、和蘭の地代に較べればその四分の一乃至三分の一の高さに過ぎないことを見出して、然る後、彼は甚だ單純にも、これを人口と關聯せしめ、人口は和蘭に於ては英蘭土に於けるより四倍も稠密であり、英蘭土に於ては愛蘭土に於けるより四倍乃至五倍稠密である、といふ。この事情には限界があるかどうかといふ點は、ベティーにとつては殆んど問題とならないから、彼は人口の密度に對する執心の餘り、住民が、愛蘭土及び蘇格蘭高地を全く見限つて、英蘭土に移住して來るのが有利であると考へるに至つてゐる²⁾。それ丈けに、益、立派なのは、次の見解である。商工業の進歩には、農業勞働人口の減退が結付くのを常とする。例へば和蘭國民が、穀物と若い家畜とを波蘭や丁抹から取り寄せ、自國の土地は園藝酪農業その他に使用する如きこれである。斯様な進歩

1) 『政治的解剖』六二頁以下【ハル第一卷一八〇頁以下】。

2) 『數篇』一四七頁以下【一六九九年版二二七頁以下】。

は、著者の考へるところに従へば、地代を低下せしめるに相違ない¹⁾。——ベティーは、勞銀の差違を次の如くに説明する。今一人の畫工が、従來は肖像畫を一枚五磅で供給してゐたのに、この價格に於て彼が充たし得ない程多くの顧客を獲るに至つたとすれば、彼の勞働時間全體を充たすに足る丈けの人數の顧客が、六磅を以てしても猶ほ承諾すると信ずるや否や、彼はその價格を六磅に高めるであらう。従來例へば一千日の通常勞働日を以て百英町の土地を耕作するを常としてゐたのに、今や一人の思索家が百日の精神勞働によつて、残りの九百日間に百英町の代り二百英町を耕作し得るやうな、農業上の改良を行つたとすれば、この場合にも、上と類似の事情は發生する。この場合、百日の精神勞働は、明かに人間一人の一生に互る通常の手仕事と、その價值を等しくする²⁾。勞銀の資本化に依つて、ベティーは、再三『國民の價值』を評定しやうと試みてゐる。この際は、彼は個人の勞働力の暫時性に顧慮することなく、地代資本化の場合と同一の乗數を利用してゐる。これ、人間の種族は、土地と同じく、永久的なるが故である³⁾。

1) 『數篇』一二三頁以下【一六九九年版一九二頁以下】。

2) 『政治的解剖』六五頁【ハル第一卷一八二頁】。

3) 『賢者には一言を以て足る』(Verbum Sapienti.)一〇頁【ハル第

生産的労働と不生産的労働との區別に關するペテイーの學説は甚だ完全である。その政治算術に於て、彼は二つの階級の人間を、相互に對立せしめる、『有形財即ち公益上實際に役立つ物を生産する人々、殊に商業又は武器を以てその國の金銀財寶を増加する人々、及び飲食歌舞遊樂以外には何事をも爲さない人』これであつて、著者は後者の中に、形而上學その他『不必要な思索の研究』をも算入してゐる。

【一六九九年版『數篇』一九八頁。』……立派な食物、衣服、家具、屋遊、園、果樹、園、官、衙等に依つて、自分たちの住む國家を美化しつゝあるのみならず、商と腕とを以て、國家の金銀財寶を増加せしめつゝある、勤勉敏捷な人々の資財。私は言ふ、これらの人々の資財が、租税に依つて減少せしめられ、飲食歌舞遊樂以外何事をも爲さぬ人々へ、否な形而上學その他不必要な思索に精進する人々、乃至は有形財または國家に於て眞に有用な價值なる物を毫も生産しないやうな仕方に於て仕事を爲しつゝある人々に、移轉されるとき、この

後の階級は、斯くの如き行爲が精神の場合には、公衆の富は減少するであらう。』
上の娛樂休養に役立ち、これを適宜に行ふとき、人間をして、他のそれ自體より重要な職業を、より善く處理することを得せしめる、といふ點を論外に置けば、國富を減少せしめるものである。第三の階級としては、更に、無條件的に有害な職業を挙げられる。例へば、乞食、詐欺、窃盜、賭博その他の如きこれである。1) — —

テイーは考へる、商業は不生産的とも生産的ともなり得る。大抵の商賣人たちは、彼等の分前を犠牲にして全體を増大せしめるより、寧ろ全體を犠牲にして彼等の分前を増大せしめやうと努力するが故に、勿論商業を不生産的たらしめる。この場合ペテイーが特に考へてゐるのは、愛蘭土の土地所有並びに租税刑法その他に於ける權利が甚だ不安固なことから生ずる、無數の訴訟や奸策のことである。總てこれらの場合には、恰も博徒たち否々不正なる博徒たちに於けると同じく、國民財産を殆んど増加せしめないであらう。然るに、愛蘭土上流階級の三分の二は、まるで蝗や毛蟲の如く、斯様な不生産的労働に従事してゐるのである。1) 愛蘭土に於ける都會の家屋全體の約三分の一が酒屋であるといふ事情も、またこれに屬する。2)

人口動態に關するペテイーの諸考察は、彼の採らうとした見地が甚だ多様であつた爲め、極端に不充足である。3) ところで彼は、種々異つた文化段階が必然的に異つた死亡率、出生率その他を持つべき所以を理解するに至つたことは、嘗てなかつた。かくて彼は、三十萬の人口は五百年經過する内には百二

1) 『政治的解剖』八五頁以下【ハル第一卷一九四頁以下】。

2) 前掲書、一一五頁【同上、二一五頁】。

3) 『數篇』四頁以下【一六九九年版五頁以下】。

一六九九年版一九二頁】。

1) 『數篇』一二七頁以下【一六九九年版一九八頁以下】。

十萬に増加することを原則として承認する¹⁾。他の箇所ではペテイは千八百四十二年には、倫敦の人口が一千七十一萬八千八百八十九人に、英吉利の他の地方全體のそれが一千九十一萬七千三百八十九人に達するであらう、と計算してゐる²⁾。稠密な人口が有用であるといふ點に對しては、彼は殆んど熱情的に執着してゐる。即ち彼は、一千人を養ひ得る一千英町は、同じ効果を持つ一萬英町より善いと卒直に説明し、前の場合は、共同目的の爲めにする總ての結合總ての牧師職や司法や國防、總ての分業及び食料の供給が、比較にならない程便利となるといふ事情を、引合ひに出してゐる³⁾。分業の利益、殊に生産物をより廉くする利益も、彼は甚だよく知つてゐた⁴⁾。從來の帝王たちは首都の非常な膨脹に制限を加へやうと再々試みたのに⁵⁾、ペテイはこの膨脹を以て専ら結構なことゝ考へてゐる。思へらく、國家は、住民四百五十萬以上に達する倫敦の膨脹

1) 『政治的解剖』二五頁【ハル第一卷一五四頁】。

2) 『數篇』一七頁【一六九九年版二一頁】。

3) 前掲書、一〇七頁以下、一四七頁【一七一頁以下、二二七頁】。

4) 前掲書、一一三頁【一七九頁】。

5) アンダーソン、千五百八十年、千五百九十三年、千六百三十年の諸項參照【第二卷、一五〇、一八二、三四一頁】。殊に千六百三十四年、チャールス一世が倫敦の新築家屋に賦課した冥加金を、想ふべきである。

に依り、外に對しては防衛するにより容易となり、内に對しては統治するにより容易となるであらう、分業は工業上より完全となり、競争はより大となり、凡ゆる種類の運送及び旅行費用はより少くなり、諸税はより耐え易いものとなるであらう¹⁾。

貨幣論に於ては、ペテイは甚だ卓越してゐる。一國民の富が特に貴金屬から成立つことはあり得ないし、況や全然貴金屬のみから成立つことなどはあり得ることでない。これ、彼の統計的諸研究が、彼をして極めて明白に確信せしめたところであつた。大抵の國、殊に愛蘭土に於て、否な英蘭土に於てさへ、鑄貨保有總額は國民の年支出の約一割にしか達せず、國民財産の一分には減多に達することがない²⁾。各國は、その交易の爲めにも、單に一定量の貨幣を必要とするのみ

1) 『數篇』二三頁以下【一六九九年版二九頁以下】。同じ時代、大都市の膨脹は、他の一匿名書によつても、眞面目に且つ巧妙に辯護されてゐる、『都市建築辯妄』(An apology for the builder; or a discourse shewing the cause and effects of the increase of building. 4. London 1685.)。然るにも拘らず、千六百八十五年の議會は、地方のジェントルマンたちの強要により、倫敦の新築家屋に重税を課すること、否な倫敦市内に於ける現在以上の家屋建築を向後全然禁止することをさへ、決議したのである。

2) 『政治的解剖』八二頁【ハル第一卷一九二頁】。『賢者には一言を以て足る』一七頁【ハル第一卷一一四頁】。

である。富が増殖しないのに現金保有額を増加するは、不経済であらう。これ貨幣は少な過ぎることのあると同じく、多過ぎることもあり得るからである。唯だ前の場合には、金銀器製造の如きに依つてこれを匡正することが比較的容易であるに過ぎない¹⁾。『貨幣は、言はゞ國家の脂肪であつて、その過少が後者を病氣にすると同じく、その過多は屢、これが活動を妨害する。脂肪が筋肉の運動を圓滑にし、榮養不足の場合にこれを扶養し、凹凸のある窩腔を充たし、身體を美しくすると同じく、國家内にあつては、貨幣はこれが活動を促進し、^{【ベテイの原著では次の一句が挿入されてゐる】}國內に於て[】] 缺乏の時には國外から扶養し、その可分性に由つて勘定を決済し全體の人々就中多額の金を持つてゐる人々を美しくする²⁾。英蘭土は、諸般の事情から見、毎年總ての地代の半額總ての家賃の四分の一労働者支出總額の五十二分の一に當るだけの貨幣を必要とする。これ地代は半年毎に、家賃は四半年毎に、勞銀は毎週支拂はれるのを常とするが故である³⁾。こ

1) 『貨幣小論』、『政治的解剖』八二、六七頁【ハル第一卷一九二——一九三、一八三頁】。

2) 『賢者には一言を以て足る』一六頁以下【ハル、第一卷一一三頁以下】。

3) 『數篇』一七九頁【一六九九年版二七一頁】、『政治的解剖』一一六頁【ハル第一卷二一六頁】。

の理由に據り、ベテイは凡ゆる貨幣の輸出禁止を非難する。即ち貨幣の代りとして商品が持ち歸へられ、それらの商品が輸出された貨幣量以上の價值を國內に於て獲得する以上、これもまた有用であると考へる¹⁾。貿易の均衡に關しては、彼は正當にも、爲替相場の變動が、自然の状態に於ては、決して正貨輸送上の諸掛り及び危険以上に達し得るものでないことを看破してゐる²⁾。——なほベテイは、貴金屬に對しては（並びに寶石もそうであるが）他の諸商品よりも、より高い程度に於て、富としての性質を認めてゐる。前者は比較的滅失すること少く、總ての時總ての場所に於て價值を持つ。反對に、葡萄酒や穀物や肉の在荷は、單に此處彼處で、富として通用し得るに過ぎない。そこでベテイは、言ふまでもなく、貴金屬を輸入する商業部門を特に有利と見做し、課税に當り、これを特別に保護したいと考へる。内國商業より外國貿易をより、多く尊重してゐるのも、これと同一の理由に由る³⁾。——名目上の貨幣價值引上げてふ有害

1) 『貨幣小論』。マン乃至チャイルドに對して、確かに著しい進歩である。

2) 『政治的解剖』七一頁【ハル第一卷一八五——一八六頁】。

3) 『數篇』一一三、一二六、一五九頁【一六九九年版一七九、一九六、二四七頁】。斯様な『マーカンティリズムの諸謬想』を傲然と見下してゐる多數の近世學者たちは、外國貿易が、原則として内國商業より、遙かに早

つ折判パンフレット【アンダーソンに據れば、本書の標題は次の如くである。Seasonal observations for the encouraging of foreign commerce. 1657.】のことは、アンダーソン著第二卷千六百五十一年【千六百五十七年の誤植(?)】の項【四四三頁】に述べてある。ポッター『貿易業者の珍寶』(W. Potter: The tradesman's jewel; or a safe, easie, speedy and effectual means for the incredible advancement of trade and multiplication of riches etc., by making bills become current instead of money. 4. London 1659.) クラドック『租税全廢策』(Fr. Cradocke: An expedient for taking away all impositions and for raising a revenue without taxes, by creating banks for the encouragement of trade. 4. London 1660.) マシュー・ルキス『王及び議會への建議』(Matthew Lewis: Proposals to the King and parliament; or a large model of a bank showing how the fund of a bank may be made without much charge or any hazard, that may give out bills of credit to a vast extent. 4. London 1678.) —事實上成立するに至つた英蘭銀行に關するものは、『英蘭銀行概説』(【Michael Godfrey:】 A short account of the intended bank of England. 4. London 1694.) (この銀行の初代副總裁であり、且つペイターソンの最も活躍した片腕であつた、ミカエル・ゴッドフリーの著)とウキリアム・ペイターソン『公債會議』(William Paterson: Conferences on the public debts by the Wednesday-Club in Friday-Street. 4. London 1695.) とである。當時、銀行の多數反對者等は、斯かる制度は共和國に於てのみ成立し得るに過ぎず、それは英吉利を斯かる國家に變化せしめるであらう、と考へた。他の者たちはまた、王はこれによつて掣肘されなくなるであらうと怖れた。この組織の商業に及ぼす諸結果に關しても、諸の豫想が交々唱へられてゐた。或るものは、この銀行が總ての商業を壓迫するに至るであらう、と心配した。他のものはまた、それが貨幣を全部商業に引き寄せ、斯くの如くにして、地價を低落せしめるに至るであらう、と氣遣つた。ありとあらゆる宗教上の疑念に對しては、この銀行の賛成者たち

なる財政政策に對しては、ベテイは再三猛烈に反對した。それが總ての商品價格や信用關係に及ぼす諸結果は、彼にとつては明瞭であつたから、屢説かれ、る國家の破産も、これに比すれば猶ほ遙かに小さな害惡である、とさへ考へるに至つてゐる¹⁾。尙ほベテイは既に、事實上の貨幣としては、二つの貴金屬中の一方のみが基礎となり得るに過ぎず、他方はそれと並んで商品として流通せざるを得ないことを、認めてゐる²⁾。——銀行制度は、主として和蘭の諸經驗を通じて識つてゐた。彼は、交易上比較的小さな貨幣額を比較的大きな貨幣額と等價たらしめるてふ作用を、これに歸してゐる。併し、この問題は、ベテイの思想の範圍内では、大した役割を演じてゐない³⁾。

く發達したものであることを、忘れてはならなかつたのだ。従つて、昔のマーカンティリストたちが、外國貿易を比較的高く評價したのも、その時代としては、全く根據ある事實を述べてゐたもので、勿論唯だ説明が不充分であつたに過ぎないのである。

1) 『貨幣小論』、『政治的解剖』七二頁【ハル第一卷一八六頁】。

2) 『政治的解剖』六七頁【ハル第一卷一八三頁】。

3) 『數篇』一二〇頁以下【一六九九年版一八八頁以下】。この機會に、序ながら、英吉利に於て、かの大銀行の成立に或は先立ち或は伴つたところの最も重要な諸著作に就いて述べることは、蓋し適當であらうと考へる。マカロック『文獻』一五八頁以下参照。サミュエル・ラム【Samuel Lamb】(千六百五十七年)なる商人がクロムウェルに宛て、書いた一